

成·壽



般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波

羅蜜多時照見五蘊皆空

度一切苦厄舍利子是不異

空空不異色色即是空空即

是色受想行識亦復如是舍利

子是諸法空相不生不滅不

垢不淨不增不減是故空中

無色無受相行識無眼

耳鼻舌身意

無量壽故無有恐怖遠離一

切顛倒夢想究竟涅槃三世

諸佛依般若波羅蜜多故

得阿耨多羅三藐三菩提

故知般若波羅蜜多是

大神咒

是大明咒

是無上咒

無色聲香

味觸無眼界

至無意識界無異明

亦無無明盡乃至無老死亦無老

死盡在涅槃滅道無智亦無

得已無所得故菩提心隨緣依

般若波羅蜜多故心無罣礙

若善咒能除一切苦真淨不虛

故說般若波羅蜜多是

諸佛如詩法羅網詩法羅

網諸佛如詩法羅網詩法羅

沙門三喜庵



賀 成寿山善光寺開創三十周年

山口晴通

黒漆崑崙培福田

こくしつ こんろん 黒漆の崑崙福田をつちか培い

武彊夙志度人天

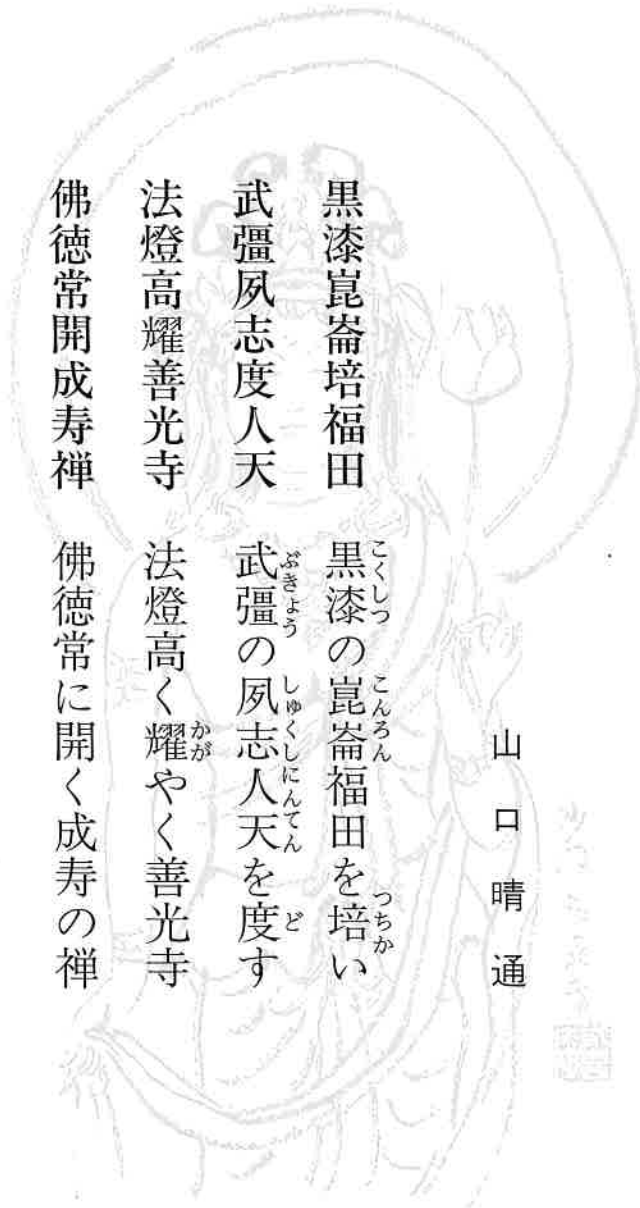
ぶきやう 武彊の夙志人天をど度す

法燈高耀善光寺

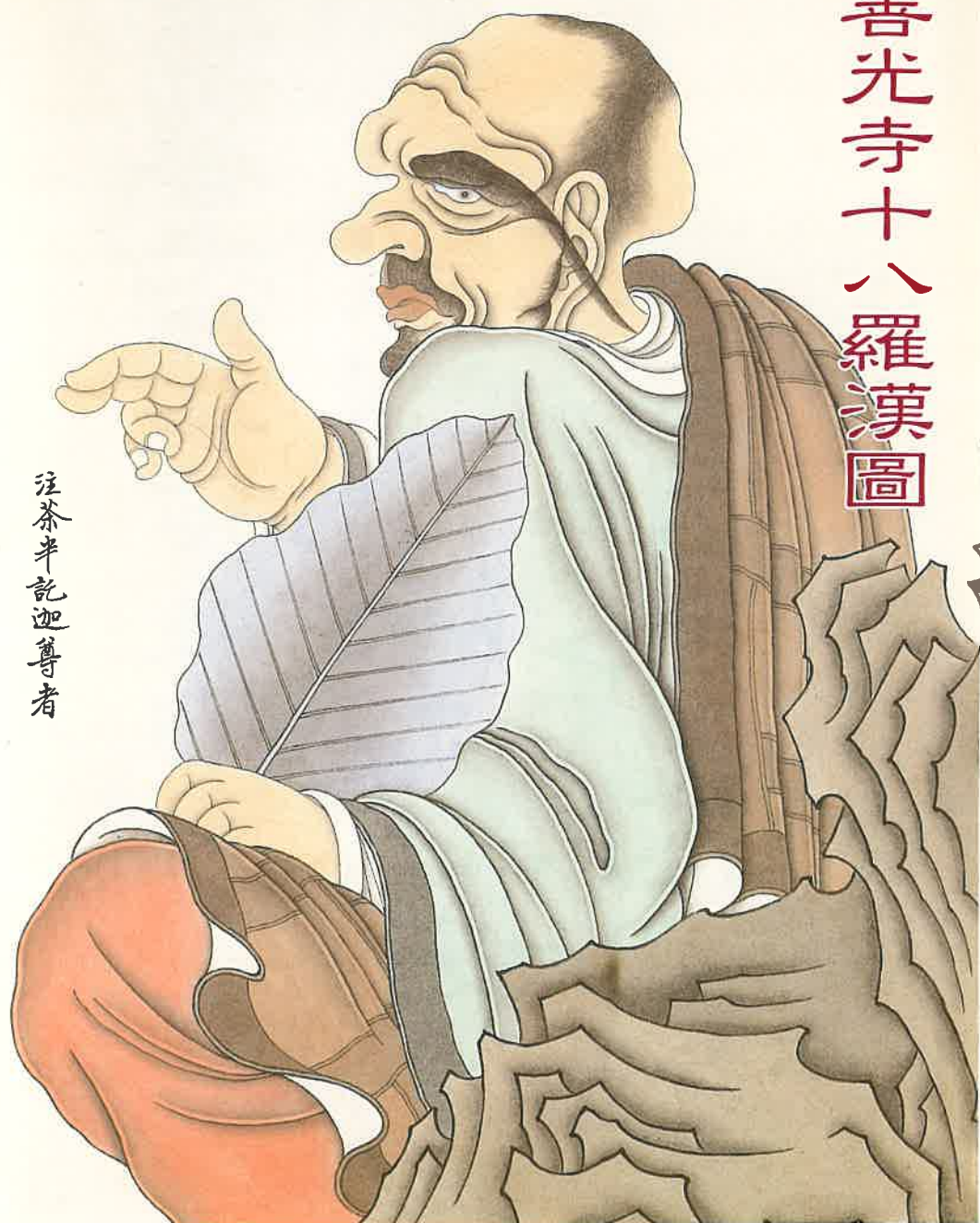
かが 法燈高く耀やく善光寺

佛徳常開成寿禪

佛徳常に開く成寿の禪



横浜善光寺十八羅漢圖



注茶半託迦尊者

橫濱善光寺十八羅漢圖

平成十二年歲次己卯正月初一吉日

沙門法音拜題

橫濱善光寺善光寺自昭和四十四年開創以來已歷時三十春秋矣為慶賀
開創三十周年暨首吳命設立十五周年之盛典任職黑田武志老作發願清
僧十八羅漢圖乃寺供養余乃奉囑恭請中國上海畫師周頌先生為之得以
至成也蓋羅漢圖方史傳有三方派一者黃保二者李龍眠也而周以畫當屬前
者此十八尊者皆相貌偉骨相嶙峋物難之也周擅丹青鳥獸魚蟲山水
尤精於人物其筆墨清雅畫意高遠斯作洵得月精髓且可寶之丹青
大凡羅漢圖多為十六尊者而此作繪成十八更為罕也羅漢者乃為聖教真
僧諸漏悉盡具大補通力發心住善者其人福德不可計量也黑田堂頭
荷佛慧命披忍辱鎧道心為邈然焉斯勝因豈世界平和佛以昌隆善光寺
法水長流以燈永明而歷如是也 平成十二年歲次己卯正月初一日沙門法音拜題

難提蜜多羅尊者



第十七尊者 難提蜜多羅尊者



第二尊者 迦諾迦伐蹉尊者



第一尊者 賓度羅跋囉惰闍尊者



第四尊者 蘇頻陀尊者

第三尊者 迦諾迦跋釐醯闍尊者



第六尊者 跋陀羅尊者



跋陀羅尊者



諾矩羅尊者

第五尊者 諾矩羅尊者

第七尊者 迦理迦尊者



迦理迦尊者

第八尊者 伐闍羅弗多羅尊者



第八尊者 伐闍羅弗多羅尊者

第十尊者 半託迦尊者



半託迦尊者



戒博迦尊者

第九尊者 戒博迦尊者



第十二尊者 那伽犀那尊者

第十一尊者 羅怛羅尊者



第十四尊者 伐那婆斯尊者



第十三尊者 因揭陀尊者



注茶半託迦尊者

第十六尊者 注茶半託迦尊者

第十五尊者 阿氏多尊者



阿氏多尊者



軍徒鉢歎尊者

周敏寫于結珠齋

第十八尊者 軍徒鉢歎尊者

カラ 一 横濱善光寺十八羅漢
集 ● 二十一世紀に向かって真実の種まきを

カラ 一 横濱善光寺開創三十年の歩み……………黒田 武志

カラ 一 東野光生の世界……………東 隆眞
● はばたけ！新世紀へ 開創二十周年、育英会設立十五周年……………東 隆眞
● 横濱善光寺十八羅漢……………東 隆眞

特 集 ● 「ブッダモンソン」に世界最大の経蔵……………黒田 武志
「タイ・今世紀最大の偉業にわく……………黒田 武志

カラ 一 南伝大蔵経の経蔵完成「ブッダモンソン」に世界最大の経蔵……………形山 俊彦
リポート ● タイに巨大な仏教施設「ブッダモンソン」——経蔵落慶式を厳修……………小倉 玄照

連 載 ● くらしの中で読む『正法眼蔵』——面授の巻・その五……………伊藤 博
特別寄稿 ● ベトナムを旅して……………伊藤 博

● 詩と禅……………山口 晴通
● 禅の心を米国へ——山口晴通老師らがロスを訪問……………遠藤 博因

● 禅院での体験……………アンゲリカ・ゼンジョー
● 上座部の修行……………真野 大成

● 育英生五人に辞令……………真野 大成
● 「アメリカカ禅」を特集 三巻目の論文集刊行……………真野 大成

カラ 一 伊藤三喜庵の世界……………伊藤三喜庵
● 「国際栄誉賞受賞」お祝いのメッセージ……………伊藤三喜庵

声 209 読者のたより 230 留學育英生からのたより 258
題字・さしえ 伊藤三喜庵

卷 頭 言

善光寺住職 黒 田 武 志

仏教を通して「仏法興隆、世界平和」に貢献したい、そして「宗祖を通して釈尊に還ろう」を旗印に、成寿山善光寺を開創して満三十年、育英会を設立して十五周年を迎えることが出来ました。

これひとえに大恩教主本師釈迦牟尼仏、高祖承陽大師、太祖常濟大師、歴代の祖師方のお徳のいたらしめる所であり、仏天のご加護であります。同時に心温かい檀信徒の皆さまのお力添えと、多くの方のご支援の賜物で、心から関係各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

この三十周年の節目の記念行事といたしまして、四月に中国を訪問いたしました

た。

曹洞宗の開祖道元禪師は、貞応二年（一一二二）二十四歳の春、日宋貿易船に便乗して、中国へ留学修行、その二年後には太白山天童寺をたずね、如浄禪師に出逢い、坐禅修行に励み、「身心脱落」の言葉で悟りを開かれました。

道元禪師さまは、安貞元年（一一二七）帰国しました。そして第一声、悟りの心境―我、彼の土において、柔軟心ニウナシシを学ばん―と喝破されました。それは、肉體も精神も共に、一切の執着からとき放され、自由になりきることであり、それが身心脱落で、仏祖の心であると説かれました。

此の度私達は、そのお寺寧波ネイハの天童禪寺を参拝いたしました。天童禪寺の修祥監院老師は、我々一同を大変喜んで迎えて下さり、心からなるおもてなしをいただきました。天童禪寺の大雄宝殿では、善光寺山門繁栄、檀信帰崇、旅の道中安全を御祈念し、参加者各家、そして檀信徒各家先亡累代諸精靈、有縁の三界万靈等に回向をさせていただきました。

又、北京にては、『成寿』の表紙、さし絵をお描きいただきました故伊藤喜二郎先生設計の中国一の医院「中日友好医院」をたずねました。

次の日には、北京ではもつとも古い名刹で中国仏教協会のある弘慈広濟寺にて、美しい白玉の欄干をめぐらした大雄宝殿において十八羅漢に守られた法堂で、成寿山善光寺開基故村岡満義靈位二十三回忌、故村岡家先祖代々、そして善光寺檀頭故伊藤喜二郎靈位の追善供養をとり行うことが出来、深い法悦を感じました。そして、善行を積み悪をつくらず、生死に著^{しやく}する心なく、一切衆生のために、さらなる精進をと自分に言いきかせました。

『法燈高く耀く善光寺』

仏徳常^に開く成寿の禪』

これを目標にかかげ、釈尊の正伝の仏法を世に伝えるために、あらためて、0ゼロからの出発を、かたく心に誓っております。

二十一世紀に向かって真実の種まきを

横浜善光寺開創三十年の歩み

善光寺住職 黒田 武志

横浜日野公園墓地の正門近くに、善光寺を開創したのは昭和四十四年（一九六九年）。あれからまたたくまに月日は流れ、生まれたばかりの何も無い赤子だった小庵・善光寺も一歩一歩足跡を残しながら、三十歳という年を迎えました。孔子の言を借りるなら「三十にして立つ」、人間で言えばそろそろ思想も確立、護るべき家庭を築き上げ、社会的責任も重くなりつつあり、その中で将来のビジョンをしっかりと描いて精力的に活動している年齢です。まさに今、善光寺もそんな時代を迎えようとしています。

まだ世の中のこと何かわからない新寺に、母親の慈愛ともいえる無償の愛



現在の善光寺

によって乳をやり、手を取り歩き方を教え育ててくださった方々の顔が、目を閉じれば臉の奥に数多く浮かんでまいります。善光寺の開基となられた慈愛溢れる大阪の村岡社長（ナリス化粧品）をはじめ、さまざまなかたちで寺の護持に尽くしてくださった先生方、そして、温かい目で見守り続けご支援くださった檀家のみなさま……。言葉ではいい尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

この間に、尊敬する方々ともこの世での辛い別れも数々経験しました。人生の財産となったすばらしい出会いを思い出しながら、いまだ僅か三十年、善光寺が歩んできた道をふり返ってみたいと思います。

〜 厳しい修行時代が私の原点

善光寺誕生までの私は、大いなる佛さまの胎内宇宙で、もがき苦しみながら、如何にして自分が生きていくべきかを模索しておりました。自分の意志で生を納得しうるものに再構築することが自己に対する義務だと思いつつも少しづつ少しずつ栄養分を与えられ生かされていることも気づかないままに……。自分なりに少しでも成長しようと懸命に働いて来たつもりでした。若き日自分に起こった諸々、すべては誕生のための体を作る栄養分となっていたことに気づく。

栃木県大田原市で小さな寺を営んでいた師父・黒田白純大和尚と母嘉（よし）その八人兄弟（一人は夭折^{ようせつ}）の六男坊、名利を求めず貧を憂えぬ父母。当り前だというならそれまでですが父母は家中に神仏を祀り、朝夕敬虔にそれを拝し、神仏を恐れている様子でした。決して裕福ではない寺の大家族。父母の貧しくとも、清く美しく生きる者を愛する気概は少なからず幼少の私たちに大きく影響を与えてきた。子健やかなれと願いつつも先に幼な子を失った父母の悲しみは再び同じ悲しみ辛さを世の人に味わわせたくない。みな健やかに育ってほしいという願いはいつしか「子育て地蔵」の建立になったという。利他行の精神を持つ父のもとで育った私たち兄弟、心もちだけはみな豊かでした。

私の学生時代、すでに僧侶となっていた兄博雄（前角老師）は、修行ののちアメリカに渡った。開教師として道を志すその兄を慕う私は必然的に海外に目を向けることとなった。国を分ち隔てることなく、識^しらずく世界的規模で「人間」というものを観るようになっていったのも、兄前角老師や、開かれた視野を持つ兄たちのおかげだとつくづく思う。

やがて尊敬する兄たちの勧めもあり、いわゆるままに駒澤大学から大学院と進み、曹洞宗大本山總持寺、そして永平寺に坐し、全国托鉢行脚を経て、再び總持寺に修行。のち釈迦牟尼仏の足跡を歩きタイでの修行の時を経て、次兄のいるアメリカに渡れたのは三十歳のときでした。



大田原光真寺

私にとって二十歳代での修行は、並を越えており、その過程ではいささか人の尊さ、ありがたさを知ることができたことは、自分が伝導者としてその原点を探り当てることができた貴重な体験でした。僅かなことで迷い、苦しむ人を救い、世界の平和と人類に寄与するためには何を学び何を実践し、どう行動していけばいいのか——さらにはそれを積極的に具現化する力の源泉となり、生きていくうえでの肝腎な体験だったと回想します。

ひるがえって永平寺での修行中、心の疲れ、思いの貧困さから身体の具合が悪くなり、ついには「延寿堂」(病室)に入ってしまった。時は流れ得ることのない自分にイヤ気がさし、いつそのこと家に帰ってしまった。時は流れ得ることをいただき、東京を目ざしました。しかし、私にはお金が一銭もありません。何とか友人から少し借りたものの、とても東京へ行く電車賃にもなりません。ムダなことではできません。駅までと道すがら歩いたのが、私の初めての托鉢体験となりました。夕方、托鉢でいただいたご喜捨を握りしめ、駅へ。お金を数えてモタモタしている私に、「入場券で入って中で精算してください」と駅員さんは優しく言ってくださる。まもなく発車という電車で飛び乗り、アア、よかつた、と一安心。流れてきた車内アナウンスに電車が東京とは反対の、富山經由直江津行き」と告げられ、身体中の力が抜けてしまいました。しかし私の意志とは裏腹に、このとり違いから私の運命も方向転換、とび降りるわけにもゆか



總持寺修行時代

ず、導かれるままに。あれこそみ仏のお導きだったと今は思えるのです。

お蔭さまでその日が、私の全国托鉢行脚のスタートと相成ってしまいました。仕方なく富山で下車し、思案の上、大学時代の松本のいるお寺を訪ね泊めていただくことにした。「黒田先輩どうしたんです、永平寺ではなかったんですか」「いま、永平寺を乞暇し、やり切れんから逃げてきた。これしかじかで、今晚泊めてくれ」と頼んでみる。幸い草鞋わらじを脱ぎ暖をとることができた。以来毎日、托鉢をしながら歩いた。能登には、大本山總持寺の祖院がある。松本君のすすめもあり折角ここまでできたからにはお詣りしていきたい。これこそ禍転じて福来る日も来る日も托鉢することになった。托鉢するとお金がたまる、無心に歩くから疲れもなく、どんどん体調もよくなる。北陸ではお坊さんを格別大事にしてくれる。どこの家でもご喜捨してくださり、応量器はたちまち一杯になってゆく。「これなら日本一周しても生きていけるんじゃないか」などと簡単に思い込んでしまった。日本一周——「托鉢」この言葉が頭に浮かんだのにはいまひとつの理由がありました。

私はまだ、大学院卒業までもない九月、永平寺に修行に出かけようと思って準備をしていたときのこと。

当時私は、東京五反田、八畳の本堂と六畳間だけの小さな寺に住んでおりました。お彼岸に入った翌日。その夜半、本堂の戸が開く音がした。台所からの



応量器

ぞくと、三十代後半ぐらいの一人の男性が正面に坐し、何やらご本尊さまに手を合わせ拝んでいる。咄嗟に私は、「どうしたんですか」と尋ねてみる。この男、ただ事でない顔つき。

「私は殺されるんです」

と、恐ろしいことを言う。聞くともまっとうな仕事ではない。今日も借金の取り立てに行き、自分の生き方がつくづくいやになったという、稼業とはいえ親分の命令には逆らえない。幼い子どもの見ているテレビや洋服ダンスを借金の形にと持ち出したら、その母親や子達に、

「あんたらは鬼だ！」

と泣きながら罵られたそうです。

そこまで言われて生きるのもう真っ平だ！ オレの人生もおしまい、自分で死ぬか殺されるか、先はない。悪いけど此処に来てしまった、という。この男性、仏性に目覚めたか。稼業をやめる決心をし、親分に背いて逃げてきたとのことでした。

「和尚さんワシを助けてくれ」

うつむきながら語る男性の話に、私はただ驚くばかり。大学院を出たばかりで、まだ世間の血なまぐさい話などどう聞けばいいのかどう処理してよいやら見当もつかない。

とりあえず、警察に行くことを勧めましたが盗んだり殺したりした訳でもない。もうこれ以上警察には迷惑はかけたくない、と合掌し深刻な顔をして言うのです。やがてふところからナイフを取り出し、ここで死なせてほしいと頼むのです。

「チョットと待て、ここで死なれては私が困る。そこまで言うなら力になろう。どうする」

と聞くと、北海道に行きたいという。金はあるのかと聞けば無いという。北海道まで行くには少々では済まない。力になるといったからには後にも引けない。とり敢えず手当たり次第お彼岸のお経料、私の洋服、学生時代に着ていたトレンチコートなどかき集め、さらに仏さまのお供物まで手渡しました。

この寺を出たとたんに捕まって、殺されてしまうかもしれない……そう思うと、胸が痛む。いつの間にか私まで人に追われ、逃亡せねばならないのではないかと錯覚していました。

「もしかしたら、この世で最後の出会いかもしれない。万一、あなたに何か起こったら、私がお両親に会って、あなたの気持ちを伝えたい、ここにご両親の住所氏名を書き残していただく下さい」

と、半紙と筆を渡しました。男性は一瞬躊躇して、書く文字を考えるような顔つきで、名古屋市のとある住所と名前を書きました。それを受け取り、私は



總持寺修行時代

無事を祈る意味で、

「どうぞ親御さんに心配をかけないで下さい。あなたを今日まで育ててくださったご両親とご先祖さまに、お礼だけは述べていってください」

と言つて、〃〇〇家先祖代々之精霊〃と塔婆に書いてお経をあげました。

合掌したあと、男性は追われるように手に荷物、自分のはいていたボロボロの靴をひっかけて、暗闇のなか、振り向きもせず消えていったのです。

以来、何日たつても何カ月たつても、連絡はありませんでした。もし、すでにどこかで殺されて、見つからないままだったとしたら……。あの時私が泊めてあげ、かくまっていたらと後悔ばかりが先にたち、私は日に日に心配になっていったのです。

無理にでも引きとめればよかつた。もし殺されたとしたら、私はたいへんな罪を犯したことになる。助けてくれと頼まれて助けてやれなかつた。人間どんな命でも尊いもの、自分が正しいと判断し、下したことはその責を負わねばならない。私は目に見えぬ神仏の厳しい試練にさいなまれていた。

その頃、何か言い知れぬ背の重さに耐えられず、ある決意をする。

このときから、日本一周托鉢行脚しようという決意をかためておりました。

前々から、〃宗祖を通して釈尊に還れ〃というのが私の誓願に似た気持ちでしたので、藤井日達上人のお力で、全国各地に祀られているお仏舎利を巡拝したい

世界へ行こう」というようにきちんと魂に入ってくる。不平不満愚痴のことは遠ざかり感謝のことが胸にこみあげ、心からそう願って唱えられるようになっていったのです。

それでも、雨風、空腹、野宿といった毎日は、辛く厳しい、逃れたいという思いがまた起こってくる。京都では、三日三晩、暴風雨にさらされ、草鞋わらじは穴があき、袈裟や体全体からは馬糞の臭いがするような状態になっていました。いろいろな理由をつけても、だんだんお寺にも泊めていただけなくなって、とうとう「涅槃金」ねはんきん（不慮の死を遂げたときの葬式代として必ず托鉢修行者が携帯している最後の最後のお金）という、つけてはならないお金まで手をつけるほどになりました。

宿賃二百五十円の木賃宿にやっと泊めてもらえることになりましたが、宿のお風呂を使うことはやんわりと断られる始末。私は雨の中を一キロほど歩いて銭湯を見つけ、何週間かぶりに垢を落とす。帰り道、パンと一口分のバターとお酒を一合だけ買って宿の部屋に戻り、残った涅槃金を出してみる。手許に二十五円。「俺の命は二十五円……」思わずつぶやいていました。明日の命もわからない、それがその時の私の姿。

翌朝も雨。ご喜捨も望めない雨の中、宿を出ていかなければなりません。

「俺はいつたい、何を求めているんだろう」

貧しきとみじめさのどん底で、私は窓を見ながらボンヤリと考えました。次の瞬間、サーッと霧が晴れたように答えが現れたのです。

「俺は僧侶じゃないか。自分の命を気にしている場合じゃない。俺の今やるべきことは、ただひたすらにお経をあげることじゃないか」

これは、仏さまの囁きだったのかもしれない。

私は宿屋のご主人に、出て行く前にお経をあげさせてくださいと頼みました。一心に『般若心経』を唱えているうちに、私を追い払わず一晩泊めてくださいったご主人の優しきや心づくしがありがたく身にしてみました。人の情がわかったときは、目頭が熱くなる。お経をあげ終わって出ていこうとすると、ご主人が、

「お坊さん、腹へってるんだらう。朝飯食べていきなさいよ。」

本当に、世の中の人はすべて、仏さまだとしみじみ感じて、私は手を合わせてしまいました。

感謝の思いに心が満たされると、昨日までは辛かったどしゃ降りの雨もまったく気にならなくなりました。京都から亀岡の街までおよそ五里。私は大きな声で『般若心経』を唱えながらひたすら歩きました。

そして。しばらくすると、チャリンと応量器に十円玉の入る音がしました。ふと顔をあげると、一人の女子学生。観音さまのような微笑みをたたえ、私の



托鉢修行時代

前に立っています。私が歩いていたところは、ある女子校の校門前だったので。十円の尊さ。ありがたさ！

チャリン、チャリン……。出てくる女子学生がみな、ご喜捨をしてくださる。応量器はたちまち一杯になったのです。

感謝で胸がいっぱいになったとき、小降りになっていた雨がすっかりあがり、雲の隙間から太陽の光がパーッと差し込みました。

ああ、私は生かされている！ 私は生きているのだ！
まさに万感胸に迫る思いでした。

生かされている尊さを実感し、以来、こわいことも嬉しいこともみなすべて超越して、来るもの皆よし。すべてありがたいという心境になることができたのです。初めて、仏の教えの真の意味に気づいたような気がしました。自分はそれを学び、伝えていく役割を持っている。僧侶という仕事を選んだことに、はつきりとした使命感と喜びを感じたのです。お金には執着がないはずなのに、チャリンチャリンを聞くごとに、考え方まで変わってしまう自分、まこと修行とは紙一重。恥ずかしいけれど大いなる転機の一瞬でした。

お彼岸の夜、私のところに来た男のこと。名古屋で彼の両親を探してわかりました。実は詐欺師、以前までの私なら、「だまされてお金をとられた」と腹を立てたことでしょう。しかし、詐欺師のおかげで、私は日本中の仏舎利塔ぶつしゃりとうの巡

拝ができた、よく見れば自分もまたみにくい心。詐欺師と左程変わるものではない。お蔭で人生の転機ともなるような尊い修行をさせていただいた、感謝こそすれ、責める心も起こらず本当にありがたく感じたのです。

いまさらのように、人生（みちのり）には、まわり道をする事によって、新しい発見のあることも知りました。人生の地図も読み方、読む心次第で自由に変化するのです。

全国托鉢行脚を終え、自分の愚かさ、自分の弱さ、自分の貧しさ、自分の拙さ、自分の小ささ、自分の無学さ、自分の無能さを再発見した。このどうしようもない自分、それでもそんな自分がいと嬉しい。——だからこそ、いま一度精一杯努力し、修行し、自分を高めていく必要を痛感しました。悔いのみ多き日を省みながら昭和三十八年、大本山總持寺に開設された特別僧堂第一期生として基本から学び直そうと上山安居することにしたのです。

道元禪師が説いた真の仏道

私が学んだ仏教は、釈尊（仏陀＝真理に目覚めた人）の教えであり、仏になるための道を説くものです。教えは、あまりにも広大で深い人間観、世界観、宇宙感があります。インド、中国と経て日本に渡ってきた仏教ですが、膨大な



仏教經典の中からある一つを選びだしそれを拠り所としながら年月を経てさまざまな宗派に分かれてきた経緯があります。

その一つ、曹洞宗は道元禪師（鎌倉時代に中国から禪を持ち帰った）を開祖とし、瑩山禪師によつて広く世に知らしめられるようになりました。坐禪を主とし、いわゆる禪宗の一派を拠し、現在では一万五千カ寺、僧侶一万七千、檀信徒約八百万という大宗門となっています。八世紀に亘つて絶えることなく脈々と受け継がれ広がってきたのは「真実の道理」だからでしょう。時代がどんなに変わろうとも、道元禪師の教えは絶対に変わらぬ普遍的な真実の世界、つまり人生の根本的な問題、その解決方法を実際に即してまとめたのが『修証義』でした。道元禪師は、生きていく上で生・老・病・死、生けるものの避けて通れぬ大事があるといい、人生は即ちこの四苦であると気付かせ、次はその苦の原因を尋ね、そして苦を除く道を見出し、さらに苦のなくなった「安穩の境地」に導き入れるのが釈尊の教えだと説いています。人間は誰でも「生が決して充実していない」と気づいた時、坐禪をすればたちどころに「自己をならう」ということに通じる。「自己をならう」というのは生死の実相を明らかにし、人生の真実の意味を見出すことに通じ、こだわりの心、とらわれの心から脱却し、自由なあるがままの「本来の自己」の姿を発見、人はそれを受け入れ感謝して生きていくことこそ人間本来の美しい生き方だと教えています。

学びを深めれば深めるほど、私は急がなければならぬことがあります。良い意味では科学情報時代の進歩であり、一方においてはこの宇宙、自然、地球環境の破壊・破滅に関わる科学の進歩です。人間が驕り高ぶっている限り、大変な事態が迫ってくることは確かです。人道的、人間的でない科学、知識の進歩しすぎた社会ほど恐ろしいものはありません。ここで大事なことは破壊する科学の進歩と使い方を誰がコントロールするかということです。一方では宇宙、自然を保護しようという運動は結構です。しかし間違いなく「人間は宇宙、自然に支配され保護されていることを知る」べきです。道元禅師の言われる「諸仏は仏性にあり」というこの哲学的背景を人間がどのように信じ、どのように行動するかが一大事です。

私も托鉢修行体験で、そのすばらしさを実感しました。

道元禅師が弟子たちのために仏法の真髓を説いた書『正法眼蔵』は、「生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり」と真つ向から生と死のいみを明らかにし、それを理解して生きていくことが人間にとって唯一最大の大事と教えた日本最高の哲学書といわれています。修證義は「懺悔滅罪（自分のおろかさゆえになせる罪を洗い清め消滅させる）」「受戒入位（仏の子としての道に従い、それを受け、護り、仏として目覚めさせていただく）」「発願利生（苦しみ悩みの世界に身を捧げると誓って、世の人のために奉仕する）」「行持報恩（日々



總持寺修行時代

の暮らしの中で生かされて生きていることを感謝し、そのための行を積み重ねていく」などが書かれています。これらはすべて、何か目的を遠くにおいて行うのではなく、その「行」ひとつひとつ、瞬間瞬間、一所懸命行うことの大切さを教えてくださっています。

しかし、いくらすばらしい教えでも、生命をかけて後世に伝え残し教化していこうとする伝導者がいなければ、時の流れに教えも人類も滅びてしまっていたことでしょう。これは、未来永劫どのような新しい時代にも言えることです。

もし世の中の一人ひとりが、本来の自己をならい、人生問題の根本的解決を「行」として、命がけで取り組むなら、いかなる深刻な問題もたちまち解決するのではないでしょうか。世界中が抱える環境問題、あらゆる民族間の争い戦争、飢餓、たとえどんな問題であれ、すべてはこの「自己」の「ならい」に帰着すると言っても過言ではないでしょう。

迷いと苦に満ちた世に光をあて、救済していくというのが釈尊の思想。あらゆる聖者の説く教えも、すべてここに共通しており、どの宗派といえども、正しい仏陀の教えを求めているのに違いはない。また世界のさまざまな宗教宗派も、終極、真に世の中を明るくすることを主願とし苦しみを消し去り光明化した平和で幸福な自分、世界にしたいという願いは一つのはず。

人類みな心が一つにすれば！

「宗祖を通して釈尊へ還れ」——これが私の「生きる」の原点でした。

人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞われています。それだけに、世界的視野に立つての相互理解と、代償を求めない大いなる慈悲が必要です。自らの宗教宗派にとらわれず、世界中の宗教を知り、学び、理解し崇敬してこそ、すべての人が真理に目覚め、幸福と平和を祈りつつ生活し「釈尊」の教えを正しく後世に残せる人間を育て、また自分もその一人になりたいと悲願しています。

この私の願いは、後に、『善光寺留学僧育英会』というかたちで実践、実現の一步を踏み出すこととなります。しかしまだ修行中の身、現代の日本仏教と寺院のあり方に疑問を感じ、宗教者本来の使命と役割を発揮するためにはどうすればいいかを日々模索していました。

宗教本来の役割に目覚めて

總持寺での修行中、夏季摂心会という坐禅の会で、たまたま参禅者の中に村岡満義氏(ナリス化粧品社長)、そして常務取締役・東郷敏氏との出会いがあり、そこで劇的なできごとが起きました。このことは後で詳しく述べますが、その後修行を終えた私は、お二人の協力のおかげで、仏教の根幹、原点ともいえるインド、そして上座部仏教といわれる二百二十七の戒律を守るタイへ修行に



赴くことができました。

そしてやっと、私の兄角博雄老師の待つアメリカへ開教師として、また修行僧として、旅立つことになったのです。兄についても後で述べますが、「禅の精神を、宗教が異なるアメリカやヨーロッパの人びとにも釈尊の教えを伝えていくことが人類の平和に結びつくことになる」という信念のもとに、ついにはロサンゼルスに禅センターを開き教化活動を行っていました。私はそこで二年間修行させていただきました。

兄も私もふところは飢餓状態。少々入ったお金もそれとはなしに、教化活動のために使ってしまう兄でした。若い私はいつも空腹。アメリカといえども日本では考えられないほどの貧しい人たちもおり、その人たちの飢えに比べれば私は恵まれていると感じました。私のすることはただひたすら坐禅を組み、経を読み、その日その日のできごとを見たら書き、聞いたら書き、読んだら書き、行ったら書く。書くことによって、つかんだものがより確かなものとなり、この「くり返し」が「積み重ね」となり、感動が深まってきました。この習慣は今でも続いており、そしてこの積み上げは、膨大な量になりました。そんな生活の中で私の魂も浄化、いつしかひとつの大誓願を立てたのです。

「日本に帰ったら、新寺を建立しよう!」。そしてそこを拠点に釈尊の説かれた教え——人々の心を救う正しい教えを伝え、世界平和と人類福祉の向上に貢



（株）ナリス化粧品社屋（当時）

献すべく、憩いの場所に発展させたい。

仏教、寺院……と聞けば、大概、「死」にまつわる葬式や法事といった儀式的なことだけが思い浮かび、たしかにそれらの儀式はとても大切なことですが、儀式の意味もわからないまま形式的に行っても何にもなりません。現在に「生きている人びとの心に安らぎを与えること」これが宗教本来の使命であり役割だと私は感じるようになっていたのです。

仏の道にかなった正しいことをしようとするのであれば、必ず仏が助け、導いてくださる。私が今しなければならぬのではなく、せずにはおられなくなっていました。来た道が分かればゆく道が分かる、おるところが分かれば行くところが分かる。大切なことは来た道であり、今おるところです。すでになにかしら、私が寺の建立を思いつく前から、そのルールが引かれつつあったのではないかと思えるのです。

昭和三十六年（一九六一年）、林堅峰和尚が、私の師父、黒田白純和尚の勧めにより、善光寺の現在地に小庵を建てられましたが、志半ばにしてお亡くなりになりました（昭和四十三年）。まるで林和尚に導かれるように、私はアメリカから帰国。すでに引かれたルールに乗るかのように翌年（昭和四十四年）、横浜市宮日野公園墓地の正門脇にある小さな寺を訪ねました。しかしこの寺、事情重なつて、すでに人手に渡っていました。でも私は此処を尋ねたとき、

「私の求めていた、やすらぎの寺はここだ！」

と直感しました。墓碑二万基を擁する壮大な日野公園墓地。ここに集まる多くの人たち、神戸、長崎、函館と並ぶ国際都市、横浜のど真中、私はその小さな寺を布教の拠点として、世界に向け新しい情報の発信基地として活用したい、さらには檀信徒の研修センターとして、仏教の本来の使命と、国際化を果たす拠点として育てあげ、理想的な寺院を創ろうと決意したのです。そしてこれこそ自分でなければ出来ない仕事だと思いました。

私はまず、總持寺で出会って以来仏縁を結ばせていただいていた村岡満義社長と東郷敏氏に相談をしました。

「実はここにもどうしても寺を興したいのです。私は急いでいるんです。どうしても此処で私の仕事として人心の救済をやらせてほしいのです。でも、お金がないんです」

単刀直入、ありのままを話す私に東郷氏は驚かれたようです。主旨を理解された東郷氏は即断、すばらしい実行力ですぐに動いてくださったのです。しかし私はその集め方に注文まで出してしまいました。

「会社単位の大きなお金ではなく、一人ひとりの小さなお金を沢山集めていただきたいんです」



と。東郷氏は「先生も無茶な注文をされるもんだ。主旨はわかりました。仕方ありません。何とか工夫しましょう」。やがてこの願いは大きな実を結び、東郷氏の仕事柄全国津々浦々、北海道から沖繩まで、私の面倒な頼みごとにも快く引き受けてくださったのです。

やがて私の「趣意書」とともに、東郷氏の「お願い文」が全社員全取引先に向けて届けられることになりました。

趣意

今般拙僧旧来の仏教に頼ることなく一宗一派の偏見にこだわらず大聖釈尊の説かれた生きた正しい仏教を高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献する念願の許に新寺の建立を発願いたしました。

真の平和と人類の幸福は正しい教えに依って創られるものであります。

物質文化の発達。混沌とした現代に於いて迷える多くの人々に心のやすらぎと幸福を与えるものは宗教に依ると信じます。

横浜市南区日野公園墓地の一角で日本の玄関口ともいえる場所を選び「禅」の道場として青少年教化育成・檀信徒の布教化活動その他多くの人々の心の憩いの場所として正しい信仰活動をいたす念願であります。

冀くは、^{ねがわ}趣旨に御賛同賜り御支援、御芳情下さるよう伏して懇願申し上げます。

ます。

昭和四十四年八月吉日

発願人 黒田武志謹書

お願い

各位には益々ご機嫌麗しく新年度に力強く臨んでおられることと存じます。

既に一部にはご案内致しましたが、予てより坐禪を通じて親しくご指導頂いております黒田武志先生が、発願利生、いよいよ独立して、横浜に新寺を建立されることになりました。黒田先生は此の新寺を通じて、いよいよ、広く、深く、人心を救済せんとして一大決心をなさいました。この理想に燃えた黒田先生に、社長は痛く敬服、できる限りのお手伝いを致したいと念願しております。黒田先生は申し上げるまでもなく、社員に初めて坐禪を説かれ、總持寺(大本山)の雲水として修行する傍ら、若くしてインドに佛跡を尋ね、その真髓を学び、のちアメリカ本土に、全身心を投じ二年間佛道・坐禪の布教に没入されました。又、自らの修行に励み今日があります。

この度はさらに人心を救済すべく、人づくり国づくりをモットーに新寺建立の英断をされたのであります。別紙に黒田先生自らの新寺建立の趣意書を



同封致しますが、どうぞよくご覧いただき、一人でも多くのご賛同寄進得られます様ご案内致します。先生は何故か非常に急いでおられます。この新寺建立にあたって先生は、ナリスの皆様に頼る他はないと申しておられ、皆様の御援助によってのみ新寺建立の第一次計画は成就することになります。社内は勿論でありますが出来る限り関わる方々に広くご案内下さればよろこびであります。

どうぞ絶大なるご協力を賜ります様にご案内申し上げます。

昭和四十四年九月吉日

発起人代表 東郷 敏

他一同

東郷氏が呼びかけてくださって二カ月後。なんと約千名にのぼる社員から当分の金で一千万円。多大の浄財を喜捨していただくことができました。善光寺の第一歩は人から人、心から心、魂から魂。数多くの尊いみ心のおかげで踏み出すことができたのです。

その年の十一月、宗教法人「善光寺」の認証を受け、村岡満義氏（現・株式会社ナリス化粧品―初代社長―）を開基（寺の開創の基礎を造ってくれた人）、師父、黒田白純大和尚を開山（寺の開創者）として勧請して発足したのです。

地域に根ざす寺づくり

昭和四十七年十一月二十八日。かねてより増築工事を行っていた成寿山善光寺は心温かい方々のご支援のおかげで完成。落慶晋山式が行われることになりました。

善光寺の概要として、趣意、場所、敷地面積、総工費等の他、御開山・黒田白純大和尚、御開基・村岡満義社長の紹介。私は次のように所感を述べました。「師匠が新寺の五カ寺（那須野の那須寺・玄性寺・永盛寺・ロサンゼルス禅センター・仏真寺・横浜日野善光寺）を建立したいという発願を持って日夜精進努力していたのでその意に打たれて、この程念願を達成することができました。これ偏に釈尊をはじめ高祖さま、太祖さま並びに歴代祖師の御徳と諸大徳並びに先輩、後輩、檀信徒各位のご援助の賜と深く感謝合掌いたしております。

今後は檀信徒の皆様と共に仏法興隆に精進努力をいたしたく覚悟をしております」。

当日の様子は、青年新報によっても詳しく報じられました。

落慶式に出席した中外日報東京支社長・本間昭之助氏は、青年新報に次の

記事を寄せられた。

型破りの禅問答

新命住職・黒田武志氏

十一月二十八日午後一時から落慶式（大導師・岩本總持寺貫首）と、新命住職黒田武志氏の晋山上堂、本尊釈迦如来の御前立不動明王の報恩諷経（導師・山田永平寺副貫首老師）等の大法要が厳修された。

黒田武志新命住職の晋山上堂は、法語を唱えるにも、禅問答をするにも誠に男性的で大音声をあげ、威風凛々としていた。ことに注目を集めたのは須弥壇上での禅問答の応答が、意表をつく型破りであった点であろう。仏祖の聖句や和歌、道歌などを朗々と引用して答えとしていた。随喜寺院は驚き、且つ感心し、参列した檀信徒はうっとり酔い、あるいは感動に頬を上気させているようであった。

たとえば……

——成寿山頭獅子住するや否や

「身を削り人に尽くさん スリコギのその味知れる人ぞ尊し。獅子はいたるところに住す、行住坐臥を観ずべし」

——いかなるかこれ涅槃ねはんに臨まんしとき



晋山式（昭和47年）

「人々分上豊かにそなわれりといえども、修せざれば現れず証せざれば得ることなし。言語に戸惑うことなかれ、ただ仏祖の行履を行ずべし」

——タイ国ワットパクナムでの修学、何を道取せんや

「飯に逢うては飯を喫し、茶に逢うては茶を喫すべし」

——南無^{なむ}帰^き依^え仏^{ぶつ}、南無^{なむ}帰^き依^え法^{ぽう}、南無^{なむ}帰^き依^え僧^{そう}そもさん

「にぎりなき心の水にすむ月は 波も砕けて光とぞなる」

——いかなるか晋山上堂の一句

「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて涼しかりけり」

黒田新命住職は、問答のしめくりに、

「もし人ありて、新善光寺和尚、この山に住して何の境涯があると問わばこたえん」

と自問して、もう一度、

「身を削り人に尽くさん スリコギのその味知れる人ぞ尊し」

を自答したのであったが、これが実によく効いて（生きて）人々の胸奥に浸み透っていったと思われる。庶民にわかりやすい言葉で禅問答をする、香語を唱えるということが、今後の禅界の課題ではないだろうかと考えさせられたりもした。

この大法要に、黒田新命住職と總持寺特別僧堂、同安居の第一期生（昭和

三十八年度）が全員集まり、また駒沢大学・大学院時代の旧友も全国各地から駆けつけていた。旧友の一人は、

「黒田君が須弥壇上にのぼったとき、涙が出てならなかった」

と眼を赤くしていたし、黒田新命住職も、「坊さんになってよかった」

と法悦に包まれた感激を素直に述懐していた。

元来禅問答は素人が聞いてわかるものではなく、我の世のものではないように度外視されていた。しかし、黒田新命住職のように、庶民にわかりやすい言葉で禅問答をすることが、いかに新鮮な印象と感銘を与えるかということがわかり、この催しは、古今を通しての一つの革新であると筆者は大書する。

黒田氏を、ただものではないとかねてからみてきたが、これでまたその感を深くした次第――

新聞にこのようにあるように、当時私の禅問答はかなり型破りなものだったようです。

しかし私には、一般の老若男女が聞いてもさっぱり意味のわからないようなことでは、仏の真の教えをどうして広げていけるだろうかという気持ちがあり

ました。

どうやら最初から、革命児としてスタートを切ったようです。

さて、こうして善光寺は産声をあげ、私にできることは、誠意を尽してひたむきにことにあたる信念と実践のみ。お葬式や法事など、日常を支える厳粛な儀式では、単に形だけで終わらせず、その意味をお年寄りからお子さんにまでも理解できるよう、わかりやすく説くことから始めました。お通夜では生死について説き、葬儀にあたっては曹洞宗の方式に従って、「剃髪ていはつ（頭髪を剃り落とすこと）」によって煩惱ぼんのう（心身を悩まし、悟りを妨げるいつさいの欲望）を除き、懺悔ざんげによって心を浄め、三宝さんぼう帰依きえ（仏・法・僧を信じること）によって心を定め、戒律を守ることによって生活の純化をはかる「受戒」の意味を教え、肉親の死に悲嘆し揺れ動く遺族の気持ちを慮り、故人はきつと御仏に救われ護られて、召されて赴かれたことを申し上げ安心に導くようにしました。ただ読経するだけでなく、ひとつひとつの意味を説きながら、死者を仏弟子として成仏に導くとともに、「安心」を与えることが僧侶としての私の勤めだと思ったからです。葬儀は、仏弟子としてみ仏のもとに送る旅立ち、そのお手伝いをするのが、寺であり、僧であります。そうした認識と信頼を檀信徒の方々に持っていたできたかったです。

これだけでは本来の寺院としての役割を果たしたことはありません。死者



を送る場所” “お年寄りばかり集まる場所”ではなく、老若男女国籍問わず向上するために誰でも自由に出入りできる開かれた研修センター（かつて師父の起こした小さな寺のように。次兄のロサンゼルス禅センターのように）であること、また心やすらぐ場所であることなど。その第一歩として子どもたち対象の日曜学校を開くことにしました。幼い心にある思いやりやさしさの芽が大きく育ってほしいと願いました。仏さまのお話をわかりやすくした紙芝居、仏教の聖歌の練習など、いつの間にか一人二人：日曜ごとに子どもたちの人数は増えていきました。子達にはお母さんも一緒です。

今まで日常生活とは関係ないところにあつた「寺院」。寺と檀信徒、檀信徒同志の心の触れ合い、コミュニケーションを深める場として日常的に親しんでもらえるよう、次々と数々の行事を設けることにしました。そして諸行事が定例となりました。

【週間の行事】

- 写経会
 - 一般参禅会
 - 茶道教室
 - 少林寺拳法参禅法話会
 - 書道教室
 - 仏典研究会
 - ボーイスカウト
 - 坐禅会
- ほか

【年間の行事】

- 新年祈禱会

一月十日

- 節分会 二月三日
 - 開山会 二月七日
 - 青年会総会 二月二十一日
 - 春彼岸法会 三月十九日
 - 花まつり法会（婦人会総会） 四月八日
 - 婦人会研修会 五月十日
 - 不動明王大祭（大般若法会） 五月二十八日
 - 大施食法会 七月九日、十日
 - 棚経（お盆供養） 七月十三日より
 - 本寺光真寺参拝 七月二十三日（一泊）
 - 医事・身上相談 九月十五日
 - 秋彼岸法会 九月二十一日
 - 七五三祈禱会 十一月十五日
 - お茶会 十一月二十五日
 - 成道会 十二月八日
- ☆ 『成寿』（善光寺機関誌）発行（不定期）
- ☆ 『論文集』ほか刊行物の発行



昭和60年 茶会

これらの行事には、必ず法話を行い、悩み、苦しみに、少しでも最善に導くことができ、ひと筋の光を差し込ませることができればと考えました。また、くつろぎの楽しさの中から真理を見つけてもらい、福引やバザー、いろいろな芸能人を呼んで清興などを催し、しばし「寺」の存在を忘れ、心がふれ合い、人の憩う場所であることを知っていたかどうかと思いつくまま、できることをやって行こうと精一杯でした。ボーイスカウトや企業、大学への講演も、依頼があればどんな遠いところへも積極的に出掛け、「医事相談」などは防衛医科大学教授中村治雄先生（善光寺檀信徒総代）が、毎年敬老の日に無料診断をしてくださるようになりました。これによって、何人の方が早期発見できたというのを聞き、本当によかったと思いました。

開創五周年目には、記念事業も計画できるほどになりました。

趣意書

「身をけずり人に尽くさんすりこぎのその味知れる人ぞ尊し」

この聖句は、永平寺御開山道元禅師のお言葉であります。この句の通りに、世のため人のためにご尽力下さっている当成寿山善光寺住職黒田武志師が、寺を開創致しはや五年目を迎えようとしております。

つきましては、記念行事として、総代及び世話人関係者一同で、本尊脇仏、



記念講演のハナ肇氏

文殊菩薩（智慧の仏様）、普賢菩薩（慈悲の仏様）と境内に慈光観世音菩薩（仮称）の建立を發願いたしました。

冀くは趣旨にご賛同下さいまして御外護と御芳志を賜りますよう伏して懇願申し上げます。

昭和四十九年吉日

成寿山善光寺開創五周年記念事業委員会

発起人代表 桜井信平

発起人一同

光は光を呼ぶ——私を信じ、寺に親しんでくださる地域の方が口コミで二人と増えていきました。五年たつたばかりの寺への、尊いご支援、最初はゼロだったお檀家も、五年、十年、ご近所の熱心な檀信徒のみなさまにお力もいただきついに、釈迦殿の建立誓願を起すことになりました。

成寿山善光寺釈迦殿建立大勸進趣意書

善光寺住職 黒田武志 敬白

恭しく惟れば、大聖釈迦牟尼世尊竺土に大悲の願を發せ給い、無明惑業の



釈迦殿落成式

巷ちまた生死しんじに苦惱くこうする諸もろ々の衆生しゆじやうを転迷てんめい開悟かいごせしめ、人天にんてん菩薩ぼさつの樂土らくどに引撰いんじやうせさせ給たまひてより二千五百歳さい、中国ちゆうごくを経てわが日本にっぽんに伝来でんらいして一千三百年せんぱんねん、仏陀ぶつだの聖教しやうきやうはわが国文化こくぶんかの源泉げんせんとなり、国民精神こくみんしんしんの活力かつりきとなつて、甘露かんろの慈雨じうは周あまねく衆生しゆじやうの苦難くなんを救済きうさいして、津々浦々つつうらうらに宝塔ほうとうは浴あまねく今日の仏果ぶつかをおさめてまいりました。

然しかりと雖いえども、時に薄福はくふく少徳しやうとくの衆生しゆじやうあつて佛法ぶつぽふを冒瀆ぼうとくし、罪障ざいじやうなお深くして三宝さんぼうを謗そしり正法しやうぽふを危殆きたいに頻ひんせしむるの憂うれいなしとしないのであります。世情せじやうの危あやうきを思おもへば転自誠てんじじやう懺悔さいげの涙なみだを禁かぎじ得ぬえものがあります。

沙門しゃもん黒田武志くろだぶし深くこれを憂うれえ、具ぐに慮うれり、非才ひさいを顧かえりみず仏恩ぶつじんにむくいたてまつらんことを發願はつがんいたしました。武志ぶしさきに駒沢大学こまざくだいがく仏教学部ぶつがくぶ並びに全大学院ぜんだいがくいんに禪学ぜんがくを修しゆめ、両大本山りやうだほんさんに安居修行あんきやうじゆし、ついで托鉢行脚たくはつぎやくによる日本一周にっぽんしゆうを決行けつぎやうし、再度たうど大本山だほんさん總持寺すうぢじに拝登はいとうして特別僧堂てつべつしやうだうに掛搭かたすることにより本山修行ほんさんじゆぎやう前後通算ぜんごうつうさん五年ごねん、さらにタイ国たいこくワットパクナムわつとぱくなんむに在あつて南伝なんでん佛教ぶつがくの比丘びく行ぎやうを履踐りせんして一ケ年いっけねん、帰国きこくして管長くわんぢやう高階かうかい禅師ぜんじの侍者しやくしや一年いっねん、そしてアメリカ、ロスアンゼルスロスあんじやるす禅センターぜんせんたーに在あつて弁道べんどうし、異邦いぱう碧眼へきがんの衆しゆに菩提達磨ぼだいだるまの禅ぜんを説せついて二年にねん、かくして内外ないげの行ぎやうを累かさね、昭和四十四年しやわしじゆしよねん帰国きこくし、横浜市よこはまし日野山ひのさん麓ふもとに成寿山じやうじゆさん善光寺ぜんくわうじを開叢かいそういたしました。開山かいさんに本師ほんし黒田白純くろだはくじゆん大和尚だいなうしやうを迎むかへ、開基かいきに篤信あつくしんの人村岡満義にむらおかみつぎ氏しを推戴すいだいし、多くの檀那だんなの淨財じやうさい施入せにゆづを受けて

法堂を創し、以て現在の寺院の結構をみるに至ったのであります。武志日夜微力を効して弁道精進して十年、檀信の施主は壹千六百余を算え、篤信の善男善女は誠心を以て三宝に皈依し、日々の光明は耀々たるを覚ゆるに至りました。

然る処、參集する堂宇は漸く狹隘を覚え、葬儀、法要、その他諸々の行事に支障多くして困難著しく、位牌、安骨の堂も既に充満し、拡張を訴ふるに至りました。仍つて住持は檀信の願いを聴き、これに応えるため次の計画を立案いたしました。申し述べる迄もなくこれが実現に当つては広く檀信徒各位の参与を煩わし専門の力を藉り、慎重に調査し審議を経なければならぬこと言を俟ちません。

茲に建立される仏殿堂塔こそは、み仏の功德力、仏光明を普ねく永遠に光被せしめ、檀越各家先亡の精霊をこゝにまつり、日々飲食を供え、焼香供養して莊嚴仏土を現じ子々孫々に承け伝えて魂の依処たらしむるものであります。また參禪会、医事相談の実施、婦人会の運営等により心身両面の健康増進、信心の培養、道念淨行の高揚をはかり、ひいては世界の平和、人類の福祉に貢献せんとするものであります。

如上の趣意を深く肝銘せられまして布施、勸進の淨行にご賛同あらせられますよう伏而懇請申し上げ勸進の趣意といたします。



タイ国ワットバクナムにて

維時 昭和五十五年四月吉日

別記

善光寺釈迦殿建立計画

一、堂宇の名称、規模

釈迦殿、禪堂、庫院、衆寮、舍利堂、その他

総延面積 五四〇・二四平米（一六三・四〇坪）

（一F 二四一・四四平米、二F 二四一・四四平米）

二、建築の様式

鉄筋、鉄骨コンクリート全二階建

三、設備及び機能要領

（イ）大須弥壇中央釈迦如来安置、左右に仏祖及び先亡精霊位牌安置等

（ロ）禪堂 坐禪諸設備一式収容見込 一〇〇人

（ハ）庫院 僧侶、檀信徒用接待、集会用諸設備

（ニ）衆寮 住侶並客僧の接遇諸設備

（ホ）舍利殿 位牌、安骨等の諸設備

（ヘ）各種莊嚴一式 仏具、仏典、宝物資料等の格納設備

（ト）事務所、機械室、倉庫等施設



昭和五十五年三月より善光寺機関紙「拈華」を發行

肅 啓

この度成寿山善光寺におきましては、仏事法要、坐禅会、青年会、婦人会、その他大小の集會に、現在堂宇の狹隘なるを痛切に感じられ、また、位牌、安骨堂は既に充満して拡張を必要とする状態となり、寺としては今後の寺院活動等を考慮せられまして、住職黒田武志方丈様は別紙趣意書のとおり新たに伽藍釈迦殿を建立する計画を樹てられました。

このことは、私共檀信徒といたしましてもまことに時宜を得たお企てであり、是非これを達成していただきたいと念願するものであります。

ご承知のように、菩提寺は、み仏の功德力を仰ぐ心の依所であり、永遠に先祖のみ魂を祀り、供養いたします霊堂でありますから、私共檀信徒の合力によってなすとげたいと思うのであります。是非みなさま方の篤信のご協力をお願い申し上げます。

何れ詳しい計画内容はお知らせ申し上げますが、昭和五十五年よりおおむね三ヶ年計画をもって浄財のご寄進を仰ぎたいという考えであります。

檀信徒の皆さまにおかせられては色々ご意見やご事情もあおりかと存上げますが、それらを忌憚なく委員会へお漏しいたゞきたくお願い申し上げます。寺といたしましても機会をつくり各家を順次お訪ね申し上げご説明ご理解を得たいというのでありますのでご了承賜りたいと存じます。

以上申し述べまして新伽藍建立への格別のご援助を賜りますようお願いしてお願い申し上げます。

昭和五十五年五月吉日

成寿山善光寺釈迦殿建設委員会

委員長 西島 一郎

昭和五十七年十一月には釈迦殿の落慶式がとり行われました。

成寿山善光寺 開創十五周年記念事業特別勧募について

今年、成寿山善光寺開創十五周年にあたります。寺基愈々堅く、寺運益々興隆のこの機に、記念事業として、釈迦殿本尊の脇仏と『大般若経』六百巻の勧請を発願いたしました。

つきましては檀信徒の皆様のご浄信をいただき、勧請発願を円成いたしたく奇特の御協賛を賜りますようお願い申し上げます。

一、釈迦殿本尊脇仏の勧請

釈迦殿の本尊は申すまでもなく、釈迦牟尼仏であります。お寺の本尊には脇仏が必要なのであります。そして釈迦牟尼仏の脇仏は、文殊・普賢の両菩薩であります。



開創十五周年記念式典

仏様の御徳は悲智円満といわれ、慈悲と智慧とを円満に兼ね具えているのであって、それを、文殊菩薩が智慧、普賢菩薩が慈悲を象徴しているのであります。脇仏を随えてこそ、本尊仏として御威光がいよいよ輝きを増すのであります。寺壇の今後一層の繁栄を祈念して本尊脇仏の勧請を發願した次第であります。二、『大般若経』六百卷の勧請

『大般若経』は、仏教経典の中でもっとも長いものであり、且又、靈験のあらたかなること経中の王と称されており、わが国では古来より、鎮護国家の御祈禱から庶民の除災招福の祈願のために大般若会が修行されて参りました。身代り不動明王を奉祀しております当山においては、従来『大般若経』第五百七十八卷「理趣分」を誦するだけで祈禱をおこなって参りましたが、『大般若経』六百卷の転読が伴わないと大般若会としての真の儀式作法とは申されません。

その広大なる功德力を仰ぎ、檀信徒各家の弥栄を祈願いたしたく『大般若経』六百卷の勧請を發願いたしました。

昭和五十八年九月吉祥日

善光寺住職 黒田 武志（大圓）

このように開創して十五年の間に、本殿および客殿が完成し、昭和五十七年



昭和60年11月28日
本尊脇仏開眼

(一九八二年)にはかねてから念願だった釈迦殿を建立。大般若経六百巻もそろいました。

昭和五十九年九月、開創十五年目にあたる年には、ひ緋おんえの恩衣をを着用することができ、栄誉に浴しました。(注・恩衣は、資格衣、または道具衣ともいい、導師となる資格を具備した人だけが着用できる衣。緋衣・黄衣・赤紫衣があり、緋衣は四十五歳以上で優れた経験のある人にだけ資格が付与される。)

これらはひとえに、み仏の教導と檀信徒のみなさまのご信心のおかげと肝に命じました。緋恩衣特許せられる八カ月前。その年の新年に、「ちょうど十五周年という節目を迎え、何とかみなさまにご恩返しができないものか」と考え続けておりました。

私は、ご報恩行の一端として海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって、仏教を振興し、世界の平和、人類の推進に寄与したいと発願。

海外留学僧派遣育英会(後に横浜善光寺留学僧育英会と改称)はこうして昭和五十九年(一九八四年)一月十五日に発足したのでした。私はその年に緋恩衣の着衣が許されたのも、私の念願成就に対し、み仏の力強い応援のように感じたものでした。

昭和六十四年(平成元年)には、人間でいえば成人式にあたる、開創二十周年を迎えることができました。この時の思いを次のように趣意書にまとめました。



昭和59年 托鉢行

開創二十周年記念事業趣意書

この地に在った小庵を譲り受けて仮本堂を建てたのは今から十九年前のこととあります。正にゼロからの出発でしたがみ仏の御加護と檀信徒の皆様の絶大なる御協力御支援により今日の盛栄を招来することができ感激にたえないところとあります。

思えば昭和五十七年に釈迦殿が完成して当寺は面目を一新し、翌年開創十五周年記念として釈迦殿本尊の脇仏の制作及び大般若経六百巻を新添し五十九年には海外留学僧派遣育英会の設立、そして六十年より留学僧の派遣実施という数々の事業を展開し、今や当寺は国内外から注目を浴びております。

さて、明年は開創満二十周年に正当します。これは人間でいえば成人でありますので、この節目を記念して次の事業を実施いたしました。今後さらに一段の進展を期する跳躍台としたい所存であります。

その事業の一環としてまず昨年、身代不動明王の眷属、矜羯羅、制陀迦の二童子像の制作を大仏師錦戸新観先生に依頼し、昨年十一月二十八日、開眼供養をおこないました。

次に、タイ国ワット・パクナムより釈迦牟尼仏の尊像をご寄付いたゞきましたので、四月二日に開眼供養を厳修いたしました。又、かねてより依頼しておりました大日如来尊像が完成しこの秋不動殿に奉安いたしました。これ

仏師・錦戸新観師と黒田方丈



タイ国釈迦牟尼仏



も偏えに皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。

就きましては、右記念事業展開のため、未だお申込み頂かない方は何卒御協賛ください、浄財の御喜捨を伏してお願いする次第であります。

昭和六十三年十二月吉日

善光寺住職 黒田 武志

実行委員長 富永 豊重

これに応え、快くご協力してくださった皆様のおかげをもちまして、二十周年記念事業の数々は首尾よく円成することができました。五月二十四日にはその締めくくりといたしまして、大雄山最乗寺山主余語翠巖老師を大導師に拝請し、また、文学博士・東隆眞先生に記念講演をお願いして、二十周年式典法要を実施いたしました。二十年という、人生でいえば大きな節目となる年に、「平成」という新しい年号となり、気持ち新たに、そしてさらに引き締まった思いがしたものでした。

そして五年たち、開創二十五年。このときは、四半世紀という月日の重みを感じました。二十五周年記念事業趣意書には、次のように書かせていただきました。



二十周年記念式典

開創二十五周年記念事業趣意書

坂本堂を建てて「善光寺」と命名してより、はや四半世紀を閲しました。まことに光陰矢の如しというべく、月日のたつのは早いものであります。

今日を迎えられましたこともこれひとえに仏天の加護のもと、檀徒の皆様
の絶大なる御協力ご支援の賜物で、感謝感激にたえないところであります。

思えば開創して十五年間は釈迦殿の建立整備に向つての寺檀一体の精進の日々でした。

昭和五十七年めでたく釈迦殿が完成しましたので、翌年開創十五周年を記念して、本尊脇仏造顕、大般若経六百巻を勧請し、その報恩行の一端として翌々五十九年に海外留学僧派遣育英会を設立し、六十年より留学僧を派遣し今日に及んでおります。

ついで平成元年、開創二十周年にあたり、主として不動殿の整備を記念事業とし、大日如来像をはじめ、薬師・阿弥陀の二如来像及び不動明王眷属、けんぞく 矜羯羅、こんがら 制陀迦の二童子像の造立・須弥壇の整備等をおこないました。

何しろ三百年五百年の歴史を持つ寺々の間に伍したことでありますので、矢継ぎ早やではありましたが、さいわい檀家の皆様の御協力により目的を達成することができました。

さて本年は開創二十五周年記念にあたりますので、これまでの締めくくり



台湾短期工業大学で講演後

として次の記念事業を目論んでおります。

一、開創二十五周年記念式典の実施

なるべく大勢の方々にご参加いただくため、五月三十日、大本山總持寺を会場として、梅田禪師様御親修法要と祝宴を予定しております。

二、善光寺留学僧育英会設立十周年記念式典の実施

大韓民国、仏宝宗刹、通度寺方丈老天月下猊下を拝請、三月末当山において実施の予定

三、記念出版物の刊行

イ、留学僧派遣、関係十カ国訪問記、留学僧論文集第二集の刊行

ロ、東野光生先生「臨照図」制作依頼

ハ、「善光寺の歌」CD及びカセット・テープの作成

四、内外の整備

建物・什物等の小修理

就きましては右記念事業実施のため、総額三千万円の予算を計上いたしましたので、何卒ご協賛くだされ、浄財の御喜捨を伏せてお願い申上げる次第であります。

二十五周年式典は大本山總持寺で次のような内容でとりおこなわれました。



「善光寺の歌」CD

開創二十五周年記念の祝典

「法燈の国際化」に称賛

成寿山善光寺開創二十五周年の記念式典が五月三十日午前十一時から、横浜・鶴見の大本山總持寺において、檀信徒五百人余の皆様が参集して盛大に行われました。

善光寺は昭和四十四年、ゼロから出発して二十五年の間に、幅広い活動とともに、開創十五周年を記念して設立した「横浜善光寺留学僧育英会」を通して国際的な育英事業を展開しており、日本佛教の新しい生き方として海外からも注目されています。

總持寺大祖堂で記念法要

記念行事は、總持寺大祖堂での記念法要で始まりました。法要に先だつて、留学僧育英会常務理事の佐藤俊明老師（千葉県柏市・龍光寺住職）が法話を言い、引き続き大本山總持寺貫首・梅田信隆禪師さまの御親修により法要が営まれ、『修証義』読誦の中を参列した檀信徒全員が、佛祖の真前に焼香しました。

記念式典

大祖堂地下の瑞応殿での記念式典は、式典副委員長の越石周平氏（善光寺護寺会長）が開式の言葉を述べ、まず、来賓として出席された大本山總持寺



開創二十五周年記念式典
（總持寺瑞応殿）

の齋藤信義監院が總持寺と善光寺の深い因縁を話して次のように祝辞を述べられました。

「善光寺開山の黒田白純老師は昭和二十六年に總持寺副監院として、当時の渡辺玄宗禪師、大道英仙監院をお支えいただいた。

本山が能登からこの地へ移って八十四年の歴史がある。戦後一番苦勞されたのが渡辺禪師であり、弧峰智璨禪師だ。その時に黒田老師が御尽力された。この方が善光寺の御開山でありその心を継いだお弟子様方が、善光寺方丈をはじめ皆さん御活躍されている。

善光寺様は法燈の国際化を目指して育英会をやっておられる。このような華々しい活躍をしているのは宗門では善光寺様だけだ。この瑞応殿に「法堂上に鍬を挿む人を見る」という瑩山禪師の最期のお言葉が掛かっており、日々この言葉を重く受けとめているが、善光寺様はこれを実践しておられる」

また鶴見大学の高崎直道学長は、

「欧米では二十五年を区切りとして銀の祝いとする。本日は善光寺とお檀家さんの銀婚式だ。新しい寺を開かれ、しかも二十五年の間に檀信徒三千家を持たれたことは大変なこと。行の実践は当然のことのように見えて、なかなかできない。発菩提心の人を菩薩というが、菩薩の行を実践しておられるのが黒田老師である。法華経の中に常不輕菩薩という方がある。黒田老師は、

全ての人に佛の心があり、共どもに世の中をよくしていこうという願いを持っておられる方だ」

と、黒田住職の願行を讀えました。

さらに、天台宗総本山比叡山延暦寺の今出川行雲教化部長は、故・山田恵諦座主と善光寺との法縁に触れながら、

「山田座主は世界に向かって佛教者は何を成すべきかを常に説かれていた。そして善光寺留学僧育英会に注目し、私を身代わりにして黒田さんに急接近した。黒田さんの仕事は世界に向けての人づくりだと思う」

と、善光寺の育英会を高く評価して、祝意を表わしました。

開基家の村岡有尚氏、総代表の伊藤喜三郎氏、檀信徒代表の大津正二氏らに感謝状、表彰状が贈呈された後、善光寺総代で防衛医科大学教授の中村治雄氏が、「長生きの秘訣」と題して記念講演を行いました。

中村氏は、①塩分をできるだけ控える。②油の質を選び、固まっている油は減らす。③繊維の多い野菜・果物をたくさん食べる。④できるだけ身体を動かす——などユーモアを交えて健康の基本を話しました。

式典委員長の伊藤喜三郎氏が「日本の佛教の中でも善光寺ほど檀信徒が増えた寺はないそうだ。育英会に対する方丈様の情熱が実を結んできた。必ずや世界平和に貢献すると思う」と挨拶し、本寺の栃木県大田原市・光真寺住

職黒田俊雄老師は「皆さんの御理解と情熱に心から御礼申し上げます。善光寺方丈とは兄弟だが、育英会の浄行に対して感謝している」とお礼の言葉を述べました。

祝電はタイ国ワット・パクナムのプラ・タム・パンヤー・ボデー住職、韓国曹溪宗通度寺の老天月下方丈、ロサンゼルス禅センターの前角博雄主管、曹洞宗ハワイ開教總監部の松浦玉英総監、南米開教總監部の森山大行総監など海外からも寄せられました。

記念の祝宴

三松閣に会場を移しての祝宴では、開基家・村岡弘義氏の挨拶に続いて黒田住職が、

「皆さん本当に有り難うございました」と感極まった様子で謝辞を述べ、善光寺育英会十周年の記念出版『法燈の国際化をめざして』を手がけた神奈川新聞社出版局長の宮川康吉氏が開創二十五周年を祝う乾杯の発声を行いました。

そしてとうとう今年・平成十一年、三十周年という年を迎えることとなりました。はじめに、言葉ではいい尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいですと書きましたが、まさに、みなさまのおかげで生かされ育てられ、しみじみありがたく、幸福な思いに満たさせていただいております。



開創二十五周年を記念し「法燈は海を越えて」を發刊

善光寺が三十周年を迎えると同時に、留学僧を派遣して、世界平和に寄与したいという大誓願を立てたときのように、信念を持って、大きな記念事業を実施していきたいと願ひ、趣意書を書かせていただきました。

これから三十五年、四十年、半世紀へと向かつて、初心を忘れることなく、生かされている生命を仏法のため、人のために使い、一滴残らず使い切つてから一生を閉じたいと思います。

身をけずり人に尽くさんすりこぎの

その味知れる人ぞ尊し

佛教の興隆による世界平和を実現する人材づくり——この事業を今後さらに発展させ次代の若者に引き継ぐため、善光寺一丸となつて一層の努力を続けてまいります。法縁で結ばれた皆様の厳しい叱咤激励、変わらぬ温かいご支援を心よりお願い申し上げる次第でございます。

善光寺 開創三十周年 育英会十五周年 記念事業趣意書

「宗祖を通して釈尊に還れ」を宗教的原点として、まだ右も左も分からぬこの地に善光寺を開創したのは昭和四十四年。あれから三十年の月日が流れたとは、あまりの早さに、ふと信じられないような気持ちになることがあります。開創当初に、『仏教を通しての世界平和に貢献していきたい』という大誓願を立てた時の気持ちを持ち続けていられるのも、三十年間一歩一歩着実に目標に向かって歩んでこられましたのも、ひとえに、み仏のお導きと心温かい檀徒のみなさまの絶大なるお力添えのお陰。振り返り、数々のご支援を思い出す度に感謝と感激で胸がいっぱいになります。

まさに、激動の三十年でした。寺檀一体となって開創以来十五年目の昭和五十七年には釈迦殿が完成致しました。報恩行として横浜善光寺留学僧育英会を発足、これまでに世界十八ヶ国（一地域）、延べ八十八人の優秀な留学僧を送り出すことができました。この育英会事業が評価され、平成十年六月には、スリランカ政府公認の慈善団体『サラナンダ財団』から、「国際荣誉賞」を受賞いたしました。これは、私自身だけではなく、ご協力くださった檀徒のみなさま一人ひとりが受けた賞として、この法幸を大変嬉しく誇りに感じております。

さて三十周年という節目の年を迎え、これまでの締め括りと致しまして次の様な記念事業を実施し、さらに大きく飛躍していきたくいと願っております。

一、開創三十周年記念式典及び横浜善光寺留学僧育英会十五周年式典の開催

なるべく多くの方々にご参加頂きたい為、平成十一年五月二十八日、横浜プリンスホテルの会場を予定しています。

二、善光寺墓地「横浜やすらぎの郷」開園

今まで善光寺には墓地がなく、このほどのどかな田園地帯の一角、横浜市旭区上川井町に霊園を開園いたします。さらに霊園完成の成功を祈って、「十一面観音」建立を誓願致しました。

三、三十周年行事として高祖道元禪師が若き日に留学修行した中国の天童禪寺参拝

(平成十一年四月九日～十四日)

平成十四年に大本山永平寺において開かれる道元禪師七百五十回大遠忌には曹洞宗の一寺院として善光寺でも協賛させていただきます。

四、育英会十五周年行事として、ワットパクナム(タイ国)訪問(平成十一年十月予定)

五、十八羅漢の屏風製作。中国上海人民美術出版社、画家周穎先生に依頼。

六、鶴見大学に歯科用カメラを寄贈

七、開創三十周年育英会十五周年記念出版物の刊行。

八、釈迦殿等内外の修復

つきましては、右事業実施のため、総額五千万円の予算を計上致しましたので、何卒ご協賛ください、浄財の御喜捨を伏してお願い申し上げます。

平成十年十一月吉日

善光寺住職 黒田 武志

式典委員長

越石 周平

実行委員

土屋 武彌

式典副委員長

大津 正二

〃

池田 耕三

〃

中村 治雄

実行委員長

富永 豊重

実行委員

熊谷 豊太郎

総務局長

下田 恒治

〃

仲田 清祐

事務局長

山口 義男

〃

細井 勉

育英会事務局長

新美 昌道

〃

遠藤 清勇

事務局

瀧澤 武雄

〃

伊礼 盛寿

〃

宮本 路朗

〃

城下 栄三郎

〃

伊藤 興郎

〃

森川 裕也

〃

桐元 大智

〃

関川 良制

〃

蒔田 恭治

〃

広木 理郎

〃

福田 孝雄

〃

国広 敏郎

〃

福田 孝雄



明王菩薩摩訶薩

明王菩薩摩訶薩

東野光生 水墨画の世界

善光寺開創25周年記念事業の一貫として東野光生先生に制作を依頼。この図は河出書房新社から出版された「涅槃 東野光生 寺院水墨画の世界」にも掲載され、私たちに感動を与えてくれている。

客殿



釈迦殿

東野光生 (とうの こうせい)

昭和21年和歌山県生まれ。故内山雨海氏に師事。昭和59年、長編小説「浅黄の帽子」を河出書房新社より刊行。同年より1年間、国際交流基金の支給を受けて米国フロリダ州立大学美術学部客員教授。昭和61年より、白韻会主宰。



臨照図 りんしょうず
2.6m×15.3m 壁画（部分）



（全景）





残雪 ざんせつ
187cm×127cm

横浜善光寺留学僧育英会十五年のあゆみ

日本は世界最大の仏教国。しかし遺憾ながら、仏教界の現状は、依然として直接収入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるかのように受け止めている。世界の犬勢に即応して教化の実をあげる態勢がまだまだできていないのです。さまざまな宗派に枝分かれた現在の日本では、信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、なかなか各宗派が一丸となって事にあたるのはむずかしい。私たちが忘れてならないことは、現実を踏まえ、過去をかえりみ、未来の方向を見直すことです。人々の安心・平和・幸福を導く伝導界の改革はおろか、世界が滅びの道を突き進むのを止めることはできません。少しでも、その速度をゆるやかにするために、一人でも多くの人が力を合わせて、礎いしづえを築く必要があります。

私も新寺建立の初心に立ち還り、釈尊の教え——「眞実」の教えが絶えることなく伝わっていくようにするために、いまこそ、世界的視野に立ち教化できる人材育成こそ急務と観じ、「海外留学僧派遣」という大誓願を立てたのでした。所謂ひとりの仕事には限りがある。多くのあらゆる分野・衆知を集めねばなりません。しかし宗務当局や本山ならいざしらず、金もない力もない一寺の住職

がそのような壮大な大誓願を立てそれを実行することはいささか僭越がある、それだけに心配してくださる方、また、

「そんなことができるわけない」

という声も設立当初は囁かれました。関心をもってくださる方には、ありがたいと思っておりました。でも、これは私が賦与された天の使命。生まれたときから、私の歩むべき道があった。私は自分の歩むべき道を一所懸命歩く。私の運命と思い唯ひたすら歩いてきた。何事も信念を持って行えば必ず実を結ぶと信じて歩いてきました。「法輪転ずるところ食輪転ず」と言われます。私は檀信徒のみなさまに、「毎度の食事ごとにおかず一口分だけ減らしてご協力してください。それで熱意のある若者を留学させたいのです。世界に仏法を広げる人づくりのために。未来の平和のために！」とお願ひし一人一仏と続けて参りました。共鳴し援助してくださる檀信徒のみなさまこそ、まさに仏そのものでした。そして、昭和五十九年一月、東隆眞、黒田俊雄、佐藤俊明、鷲見透玄、中村治雄、奈良康明という各先生方を育英会設立準備委員（後に理事）とし、最高の頭脳と活動力を得て、昭和六十年、記念すべき留学僧第一回生二名をタイのワット・パクナムへ留学させることができたのです。半年後、ワット・パクナムの住職に、「二人は稀にみる熱心で模範的な留学僧だ」と称賛され、私のよろこびは計り知れないものでありました。



第一回育英生に辞令交付

翌年、アメリカとインド、スリランカへ四名。その翌年は、アメリカ、タイ、インドへ五名、中国から一人受入れ：第四回、五回、六回と、留学僧の派遣が実現し、立派に成長した留学僧の各方面での活躍は頼母しい限り、あれから十五年の月日がたち、留学僧はのべ八十八名にのぼりました。日本の若者を海外に派遣するばかりでなく、海外から日本に受入れる人数も増えて参りました。

育英会の関係国はすでに十八カ国（一地域）、派遣国は十三カ国（アメリカ・タイ・インド・スリランカ・イギリス・フランス・イタリア・オランダ・韓国・カンボジア・ドイツ・スイス・オーストリア）。受入れ国は九カ国・一地域（アメリカ・スリランカ・韓国・中国・フランス・バングラディシュ・日本・台湾・ポーランド・ベトナム）になっています。

留学僧の募集の範囲は、宗派を問わず、場合によつては僧籍がなくてもよし。学業操作とも優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るがないこと。仏法のため、人のためなら、自らの身命も惜しまずの人材——そうした日本および世界の若者を選んで、留学中の旅費、生活費を負担。よくもまあ今日までこの至難の「行」が出来たことと不思議でなりません。「檀家を敬うこと仏のごとくすべし」という瑩山禅師の教えに従い、留学僧派遣・受入れという一大事業の実現こそみ仏の成せるお力と思わずにはおられません。

寺檀一体となつて各国に派遣された留学僧たちは、それぞれの立場で物を見、

考え、修行にとりくんでおります。彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、それはまったく未知数ですが、必ずや宗教宗派意識を越えて釈尊の教えを忠実に情熱を持って布教化する国際的宗教者となつてくれるであろうと私は信じています。やがて十年後、二十年後の世界に生き活きたとした仏法の泉を湧かせてくれることを思うとき、私の限りある生命が、世の中のなにかの役に立ち、一隅を照らすことができればよろこびです。

育英生たちには学んだことにつきレポートの提出を義務づけております。

世界平和と仏教徒の誓願

第十二回生 清水 晶子

(イギリス・ケンブリッジ大学留学)

(抜粋) 私たちは国際社会の大きな連帯と影響の中で生活している。そういう状況下では、お互い相手の立場を認めて理解し合い、異なる文化に対して寛容でなければならぬ。相互に誤解や障害を取り除くような努力を重ねていけば、そこには譲りあえる点が必要と見いだせるはずである。

人間は心の持ち方で生き方が変えられる。釈尊の説いた慈悲の精神は、私たちに示された、平和を樹立するための英知である。私たちは、この精神を誇り高く掲げて、不戦・恒久の平和の誓願を世界へ向けて伝えたい。



第八回育英生辞令交付式

留学僧として私はこれを学びたい

第十四回生 ウイリアム隆賢ダンカン

(日本・上智大学留学)

(抜粋) 日本の高校で東洋思想の授業を受けて以来禅に興味をもつようになり、その後アメリカの大学に進学しましたが、禅の修行を続け、大学二年の冬には故前角博雄老師の弟子である大道・ローリー先生が指導する禅マウンテン・モナストリーで修行するという機会を持つことができました。

そして大学三年の夏、日本で仏教英語研究会に出席した際、駒澤大学の小笠原隆元教授に出会いました。禅僧と大学教授という二つの役割をバランスよく果たす様子は、人生の多様性を考える上で私に深い示唆を与えてくれました。英国人と日本人の血が流れる私は、自分自身のアイデンティティの確立に悩んでいましたが、先生と会い、また禅を学んで以来一つの集団とか地位とかいうものから解放されたところに自己のアイデンティティを見いだせるのではないかと思うようになりました。

こうした留学僧たちの論文は必ず論文集としてまとめて刊行するようにしてきました。世界中から寄せられる真摯な論文に目を通すたびに、若い力が育ち成長していることを実感することができず。そして彼らが今後どんなに困難

な壁に突き当たろうともそれを乗り越えて、必ず花を咲かせ実を結び、また新たな種を彼らは蒔いてくれるであろう、と。

留学僧育英会は、檀家の方々の尊い援助と、すべて無給、この難事業に知恵と力を貸してくださる顧問、役員のご尽力に支えられてここまで成長してきました。ただただ感謝のほかはありません。

何年続かわからないという声のある中、応援、励ましのお言葉が、どれほど精神的支えになってくれたかわかりません。そして、十年という年月の達成は、感無量であり、感謝ばかりです。

十周年記念——さらなる努力を

「横浜善光寺留学僧育英会十周年式典」は平成六年三月に、善光寺釈迦殿で挙行されました。法要導師は駒澤大学の櫻井秀雄総長、式典には韓国国の三大寺刹の一つ、靈鷲叢林通度寺から老天月下方丈、底岳泰應住寺、釈梵河宝物館長の三人が来日して参列し、老天月下方丈が「伝統は常に新たな創造の根源」と題して講演してくださいました。

「横浜善光寺のご住職であり、かつ、育英会の理事長であられる黒田老師が世界の仏教文化の発展と興隆に大きく貢献されていらっしゃるの、日本仏教界

だけでなく、韓国仏教界にも広く知られております。黒田老師の偉大なお力に深い敬意を表します。一昨年は、黒田御老師夫妻と、佐藤俊明老師、東隆眞老師の四人の先生方が私の通度寺をお訪ねくださり、金欄袈裟や大本山永平寺蔵版『正法眼蔵』九十五巻をご寄贈くださいましたことをこの席を借りてもう一度御礼申し上げます」そして、「昔の伝統は常に新しい創造の根源であるので、戒律を厳しく守ることがすなわち仏陀精神の根本であることを自覚し、通度寺の開創精神を守ってまいります」と述べられ、最後に頌偈（じゅげ・仏の徳や教えを讃える四句の詩）を贈ってくださいました。その中に、

—— 参禅在起疑团、疑去疑来似火团

（禅を学ぶには、まず問題意識を抱くことがもつとも肝要である。普段に問題意識を興して修行する情熱的でありさまは火のかたまりにも似ている）

—— 横拈拄杖参方去、气似将军战一场

（思う存分に拄杖——師を訪ね道を求めて行脚するときに携える杖——を手に持って、諸方を歴参する勇壮な気概は、まるで歴戦の將軍が戦場で戦うのに似ている）

という詩があり、育英会を創立してからの十年を振り返り胸が熱くなりました。

他の来賓の方々からも、多くの温かい励ましのお言葉をいただきました。



平成3年10月15日
韓国・通度寺にて

ロサンゼルス禅センターから駆けつけてくれた次兄・前角博雄主管からは、「育英会を理解し支えてくださる方々のお力と、向学心に燃え護法の念に燃えている留学僧の方々なくしてはできないことだ。たった十年でこれだけの仕事をしている。『世界一花』の言葉があるが、今後も二倍、五倍の花弁をつけ、これが法の華となって、世界中に芳しい香りを漂わせていただきたい」。

駒澤大学の鈴木格禅教授からは、

「道元禅師は五年の中国留学からお帰りになって『空手還郷』といわれた。当山の黒田方丈は空手にしてこの地に立たれた。普通なら何かつかもうともがくが、黒田方丈は手を放ち、心を開いた、そのことがすぐれた縁を抱くことになった。

宗教は人によって興り、人によって滅ぶ。仏教も人により時代に生き、地上に生きる。黒田方丈は仏教の原点に立って、真の人材を打ち出そうと発願された。そして、檀信徒に呼びかけられた。育英会の誕生である。

大財閥がしているのではない。何も持たずこの地に立った空手の原点を忘れず、それに共鳴された檀家の方々により歩みを始められた。そこには黒田方丈の祈りと誓願と回向の行持、行実の真があつたからである。ロウソクは自分の体を燃やすことよって周りを照らす。線香は身を焼くことよって豊かな香りを漂わせる。この会に育てられた方々は、黒田方丈の願いを願いとし、祈り

を祈りとして、学問、実践の分野で表に立ち、また地の塩となって人の世を照らす大いなる灯火となり、暗闇を救う妙香となっていたいただきたいと切に願う」。

第九回採用の留学僧であるスリランカ僧侶キリネティヤネ・ヴィマラワンサ師は、

「黒田先生にお目にかかって、本当にお坊さんらしく大きな活動をしておられる立派な方と思った。民族・文化の違いはあるが、仏陀の教えから見るととき壁はないことが日本に来てよくわかった。奨学金のおかげで、研究ができたことに感謝している。留学生は自分の国に帰ったとき、黒田先生のように世界のために生きることを願っている」。

と決意の言葉を述べてくれました。

みなさんの言葉を聞きながら、唯々合掌。仕事というものは自分がしたくするものではない、世間さまがさせてくださるものだとつくづく思いつつ、さらに努力していくことを誓っておりました。

現在までの主だったできごと

平成十一年には、善光寺留学僧育英会も、早や十五周年を迎えることとなります。第一回生を派遣したときの感激、顧みますに昨日のここのように、しみじみと思い出すことができます。まさに、激動の十五年間でした。

留学僧募集要項



十五年の中で特記すべき事項をここで振り返りまとめてみたいと思います。

● 第一回派遣僧の帰国、第二回派遣二師の休暇帰国を機に昭和六十一年八月二十八日「第一回総会」を開催して以来、十四回、毎年総会を開催して今日に至る。

● 昭和六十二（一九八七）年十二月八日、上智大学アジア文化研究所とフランス・パリ第七大学主催による「第二回日仏セミナー」がパリ第一大学において開催。出席要請を受け、「新しい寺院経営を求めて」というテーマのもと一時間半講演。草稿はほぼ全文が『中外日報』に掲載。それを読んだ上智大学の安齋伸教授が「理想実現の実例に学ぶ」と題して同紙に記事を発表。

● 同年より、佐藤俊明常務理事とともに二人連れで、インドを振り出しに、スリランカ、マレーシア、タイ、ミャンマー、カンボジア、中国、台湾、韓国、アメリカ関係各国を歴訪。

● 昭和六十三（一九八八）年、タイ国ワット・パクナムより釈迦牟尼仏の尊像が寄進される。その四月、ワット・パクナム住職を招き、世界仏教徒連盟本部事務次長小谷亀太郎先生のお世話で黒田住職の息子四人が善光寺においてタイ式の得度式を挙げる。これは日本で初めてのことであり、タイ仏教親善友好にきわめて意義深いものと評される。

● 平成元（一九八九）年八月二十九日、第四回総会において、細則中、これま



日仏セミナー（パリ第七大
学会議場）

で留学僧の派遣先がタイとアメリカに限定されていたが、要望に鑑み、新たに「理事会においてその必要を認めるその他の国に所在する研究機関」の一項を加えた。さらに、留学僧の受け入れ先からの要請もあり、また、今後の推移を考え、第十一条として、「必要に応じ海外留学僧を講師として受け入れ先に派遣する」との規定を設けた。

なお平成二年、総会において、留学生のうち、大学の教授、助教授クラスは育英会の講師とすると決められた。

●平成三（一九九一）年十二月八日、『善光寺海外留学僧育英会論文集』第一集刊行。また、育英会発足に備えて、育英会設立の一年前に『成寿』の発行を企画し、以来年二〜三回発刊、今日までに二十八巻を数えており、留学僧派遣に關する記事はその都度同誌で報告している。

●平成五（一九九三）年二月六日、海外からの日本留学希望者が多くなってきたことから、第八回総会において、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称を「横浜善光寺留学僧育英会」に変更。新名称決定と同時に、名誉顧問、顧問、理事、参与が新たに委嘱された。

●平成六（一九九四）年一月、「育英会十年の歩み」と題して台湾大学にて講演。三月三十日、「横浜善光寺留学僧育英会設立十周年記念式典」挙行。四月、『法燈の国際化をめざして』発刊。五月三十日、「善光寺開創二十五周年記念式典」



子息四人のタイ式得度式

を挙行。八月、権大教師に補任。十月二十四日、二十六日、通度寺にて記念講演のため渡韓。十一月、ワット・パクナム留学生訪問、インドネシア・ボロブドールに参拝のため一週間の予定でタイとインドネシアへ。

●平成七（一九九五）年二月十日、白純大和尚十七回忌法要。三月、当山開基家ナリス化粧品株式会社社長村岡有尚氏逝去。四月、国際仏教興隆協会評議員に就任。五月、ロサンゼルス禅センター主管ならびに善光寺育英会顧問・前角博雄老師急逝。七月、アメリカの各禅センター訪問、講演のため一週間渡米。十月、ワット・パクナム表敬訪問とバンコク仏跡参拝のため渡タイ。

●平成八（一九九六）年三月三日、総代伊藤喜三郎（三喜庵）先生逝去。五月八日、『育英会論文集』第二集刊行。十一日、十三日、タイ国ワット・パクナム住職ソムデッド副法王就任祝賀会に日本代表として出席。六月、大本山總持寺余語翠巖老師副貫首就任式に出席。八月、韓国釜山へ育英会打合せのため渡韓。十一月十三日、メモリアル横浜において、「今あなたは幸福ですか？ 豊かな人生とは」を講演。

●平成九（一九九七）年二月十四日、富山県小矢部市教育委員会の依頼により、「心やわらかに生きる」を講演。四月六日、日本テレビ『宗教の時間』にて、「己を捨ててこそ——わが修行時代の原点」をテーマに対談・放映。十八日より一週間、北米開教七十五周年式典参列のため渡米。七月二十五日より一週間、

平成元年3月
タイ国ワット・パクナムにて



平成5年10月
中国・天童寺監院老師と



アメリカ禅センター三十周年記念講演のため渡米。十月十三日、SZIワークショップ企画シンポジウムで「海外開教師支援について」をテーマにパネラー出演。十二月十一日より六日間、スイスローザンヌ大学仏像・仏書贈呈式のため渡瑞。『仏教思想』等四十八書の書籍を贈呈。

●平成十（一九九八）年二月、第十二回留学僧育英会総会ならびに第十四回育英生辞令交付式開催（育英会総会、育英生辞令交付式は毎年の定例行事）。

（四育英生に辞令交付（成寿より））

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は、第十二回総会と第十四回育英生の四人に対する辞令交付式を二月七日、善光寺で執り行った。総会ではニューヨーク州立大学教授の伊藤博氏が「国際化への反論」と題して卓話を行い、どの国にもともにプラスになるように地球的規模で考え行動すべき時代であることを訴えた。

総会では新しく育英生に採用された四氏のうち、すでにタイ国ワットパクナムに留学している一人を除く三人が、今後の抱負を語った。

黒田理事長は、「初心を忘れず誓願を成就していただきたい。そして皆さんの力で世界平和を実現してください」と激励し、光真寺の黒田俊雄老師は、「善光寺の方丈は利他行の人だ。利行は一法なりというが、人に尽くす



平成7年8月
ニューヨークマウンテン
インセンター主管と共に

ことがこれからの道だと思っっている」と挨拶した。

六月、スリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」と「称号」を受賞（別記）。九月、『横浜善光寺留学僧育英会論文集』第三集刊行（全三二二ページ）。

まだまだ他にも印象に残った行事・できごとは多いのですが、おおまかに今までの流れをまとめてみました。

論文集も三巻そろい、その中ですばらしい先生方に序文を寄せていただきました。次のような多くのご文章をいただいたことが、どれほどの励みとなったことでしょうか。

駒沢女子大学学長 東 隆 眞

そもそもこの育英会は、理事長黒田武志（大圓）師の発案、企画、実行に始まる。育英会の本質、性格、特色ないし方向性は、師の学問、修行の経歴、または善光寺住職としての運営の実績にもとづくものである。

黒田師は、みずから求めて苦難の中に飛び込み、自らの道を開拓してきた。師は寺に生まれた寺の子ではあるが、葬式、法事しかしなくなった職業的僧侶とは質を異にするので、あるいは一種の異端児かもしれない。それゆえ、ときにはやっかみ半分で、非難中傷を浴びながら、忍の一字をまもり、信じる道を選んできた。このような波瀾万丈の道程を厳しい体験を通じて、グロ―バルな視野に立つ佛教の興隆、世界平和を実現したいという夢が、育英会誕生の契機となったのだろうと私は受け止めている。

この育英会は、善光寺一カ寺の企てである。全佛教団、一宗全体の大事業ではない。しかも留学僧は宗祖を通して釈尊にかえるという着眼点に立ち、一定の資格と志さえあれば、所属の宗派を問わないのである。

このような破格の企てを、寡聞にして、私はほかに知らない。この聖業を多くの人が知っていただきたい。同時に黒田師の壮挙を高く評価したい。

東京大学名誉教授・東方学院院长 中村 元

長年にわたって単独の寺院が外国へ留学僧を送り続けるというのはいへんなこととあります。このたび横浜善光寺留学僧育英会は、昭和六十年度の第一回生から数えて平成十年度の第十四回までに、のべ八十八人の留学育英生を送ることになりました。その派遣国も世界十三カ国、受け入れ国は九カ

国一地域に及ぶと聞いています。同会の黒田武志理事長をはじめとする関係各位の方々のご熱意とご浄行には感嘆の念を禁じえないものがあります。

このたび、《横浜善光寺留学僧育英会論文集》第三巻が刊行される運びとなりました。本巻はアメリカ篇の特集です。とりわけアメリカ禅の新しいいきを感じていただきたい。第一巻、第二巻に引き続き、第三巻刊行というその麗しいご浄行を壽ぎ、かつ留学僧育英会のさらなるご発展を祈念して、一文を草した次第であります。

こうした、留学僧育英会を温かく見守り、ご支援してくださる先生方に支えられ、私は生かされてまいりました。

この十五年間、若さと情熱を秘めた覇気ある国内外の男女と、力強い支援者ならびに受入れ国の高い評価に支えられて、育英会は順調に発展してまいりました。まさに仏天のご加護としかいいようがありません。

サラナンダ財団から国際栄誉賞と称号を受賞

平成十年六月。善光寺開創三十周年を迎えようとする節目の年に、みなさま方のおかげで、人生の記念に残るすばらしい賞をいただくことができました。

『中外日報』では次のように報じられました。

スリランカで長年にわたり、教育・文化・宗教活動を展開した高僧、ウド
ウヌワラ・サラナンダ・セロの業績を世に広めるために創設された政府公認
の慈善団体「サラナンダ財団」は「国際栄誉賞」として、日本の横浜善光寺
留学僧育英会理事長の黒田武志氏（曹洞宗善光寺住職）と、法華仏教国際交
流協会の石井英雄会長（日蓮宗長照寺住職）をはじめ四人を選んだ。授賞式
は六月二十日に現地で行われた。

財団では、毎年、若い僧侶や社会活動家、学者、仏教の外護に尽くした信
徒などをえらんで「栄誉賞」を贈り、その業績を称えている。

今年度の受賞者は十一人で、そのうち、日本人からは黒田氏と、石井氏は
じめ協会のメンバー四人。黒田氏は横浜善光寺留学僧育英会を設立し、仏教
を学ぶ僧侶や研究生を支援する育英事業を長年続けて、これまで世界十三カ
国に日本の留学生を送りだし、九カ国一地域から外国人留学生を受け入れて
きた。留学生には育英金と滞在に必要な経費と往復旅費を支給している。ス
リランカから日本への留学生は三人、日本からスリランカへの留学生は四人
にのぼっている。授賞理由の中で、財団は黒田氏に対し、「この育英会は世界
の仏教修学僧に奨学金を与えている。これまで師はスリランカに対する七人
の者に留学奨学金を与えさらに、他の十三カ国へも八十八人に奨学金を提供
している。われわれは尊師の活動と献身を評価する」と称えている。



昭和63年8月28日
マウンテンセンター禅堂

授賞式は、シンハラ王国の首都だったクルネーガラ市の公会堂で挙行され、会場には千人を越える僧侶や信徒が参集し、スリランカ仏教の最長老であるマハナヤカ派のウエヴェデラニヤ・メダランカラ大僧正、ラタナヤケ国会議長、ロクバンダラ前文化教育宗教大臣、セクラジャパティ中央議長、財団のゲムノアビスヌル理事長、クレトウンガ文化教育宗教大臣、シニセーティクレ建設大臣ら要人が列席した。

盛大な歓迎を受けて式典に臨んだ受賞者は、ラタナヤケ国会議長から一人ずつ団扇のかたちをした記念楯（アルアッタ）と表彰状を授与された。

受賞者を代表して日本の黒田氏が謝辞を述べ、「伝統ある古い都で榮譽ある賞を受けたことを光榮に思う。日本とスリランカは共に仏教の国であり、釈尊の教えを信奉している。人類が釈尊の教えにより平和になるようお願い、ブツダの心で生きていきたい」と決意を披瀝した。

私は代表して受けましたが、この「国際榮譽賞」は、真剣に世界平和を願う歴代育英生、育英会に絶大なるお力を貸してくださった先生方、檀家のみならず一人ひとりが受けた賞として、この法幸をたいへん嬉しく、そして誇りに感じております。また今年二月には曹洞宗管長より育英会事業に対し管長賞を



授賞式にて

いただいた。この思いを善光寺発行の機関誌『成寿』の巻頭言に載せさせていただきますました。

巻頭言

善光寺住職 黒田 武志

此の度、スリランカ政府公認の慈善団体「サラナンダ財団」より——仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学と、外国から日本への留学生を支援する育英事業を高く評価する——との理由で国際部門の『栄誉賞と称号』を授与されました。称号は「ダルマ・ケールティ・スリ・ローカルタ・チャリエ」(Dharma Keerthi Sri Lokartha Charie)で、仏教の発展に寄与し世界人類の幸福と繁栄に尽くす、という意味であります。

これはひとえに育英会に関係された方々、又檀信徒の皆さまのご尽力の賜であり、深謝し心から厚くお礼を申し上げます。

去る五月には、ロサンゼルス禅センターの開創三十周年の式典に参列いたしました。前角博雄老師亡き後も、禅がアメリカに根強く息づいていることをひしひしと感じて帰りました。

成願寺山口晴通住職は白人社会での禅修行の実態を見聞しともに禅を語り合い「亜米利加の禅堂を訪う」と題して、



拈來公案共論禪 公案を拈じ來つて共に禪を論じ

碧眼僧衆衣鉢伝 碧眼の僧衆衣鉢伝う

誰識往時開教志 誰か識る往時開教の志

坐堂窓外聽清泉 坐堂窓外清泉を聴く

と感激をよまれておりました。

また、今回、宗門関係の大学めぐりは、東北福祉大学をたずねました。萩野浩基学長は「二十一世紀は心の時代であり、大自然、大宇宙から逆に自己を照らし出し、自己をふりかえり、責任ある実践が明日の道」と語っておられます。

釈尊は『足ることを知るものは心安らかなり、足ることを知らざるものは、富ありといえども貧し』と申されております。日々の生活を反省し、心して生きて行きたいものであります。

今こそ、我々は心から「社会」との調和をはかり、生きとし生けるものの生命と自然を大切にし、国際社会の平和と繁栄と人類の幸福に向けて、皆様と共に大いに貢献をいたしたいと念じております。

世界中の若き僧侶が、互いに異国の文化習慣を理解し尊重し合い、仏教の原点に立ち還り、世界平和の実現に寄与することを願ってスタートして十五年。

今なお世界のあちこちで、武力行使によって相手を屈しさせる方法で平和へと導こうとしている報道が流れています。たとえ一瞬争いがおさまっても、それは真の平和とはいえないでしょう。屈辱の炎がくすぶり続ける小さな、そして誇りある民族は、再び「自分たちの平和」のために立ち上がり、そしてまた大國が押さえつけ、いつまでも悲劇は繰り返される……。わたしの願いは、真の平和に満たされた二十一世紀を迎えることです。そのためには、真の教え——すばらしい釈尊の教えを後世に残すような人材を育て続けるしかないという信念を持っております。二十一世紀をはばたく、真の平和の使者となる仏教徒たちに、私の願い・命すべてをバトンタッチできる日まで立ち止まることなく、たとえ艱難な道でも一歩一歩前へ進んでいきたいと思っています。悲劇のない未来に向かつて。

(育英会十五周年の道のり)

出会いは一生の財産となる

「人は他者とともに生き、出会った数ほどその人生がある。出会いとは、他者を通じた自己との出会いである」という言葉があります。人との出会い——出会いがよろこびであり、私も最善の時に最善の場所で最善の人に出会ってき

た。そして最善の仕事が与えられた。これこそ人間のはからいではなく、大なるみ仏の導きであると、この三十年痛感して参りました。決して人は一人で生きているのではない。仏として有縁無縁の多くの人によって生かされているのです。たとえ、み仏の仏弟子となって召され、この世での別れがあったとしても、護られ続けているのを感じることが出来ます。

禅の国際化に生涯をかけた兄

平成七年（一九九五年）五月、私の人生の方向づけをしてくれ、いつも心の支えとなってくれた兄前角博雄老師が遷化されました。四十年という長きにわたって、アメリカという多種多様の人種・宗教・言葉・習慣・文化の混じり合う巨大な未知の国で身を粉にして禅の精神を伝導し、多くの外国人師弟を育てあげた偉大な師でありました。

いつもいつも、私にとってケタはずれにスケールの大きい兄……そんな兄から、私は生涯の宝となる手紙をいただきました。

「宗祖を通して釈尊に還れ」の命題は、方丈の多年の宿願と拝察しております。一宗一派の信条を越えた菩薩行は、日本の僧侶学者のみならず、他国の有力な人材を含め、着々とその輪を世界各地に広げておられ、その偉業は



故前角博雄老師

称賛に堪えません。国際性と、国際性に輪をかけたグローバルな視座と、それにとまなう実動の必要性が痛感され、また、叫ばれる昨今、善光寺の留学僧派遣の理念が年を逐って実現を増幅し、その檀那波羅蜜多に応える逸材が着実にその成果を具象化している次第を有り難く感得しております。

若い頃はただかわいがられ、諭されてばかりの私が、やっと兄に認めてもらえるようになったと感激の涙が流れたものでした。

育ての親・ナリス化粧品皆さま

善光寺の開基となつてくださったのが、大阪の(株)成寿堂本舗(現・株式会社ナリス化粧品)社長・村岡満義氏です。私が大本山總持寺でまだ修行中の頃。夏季摂心(五日間の連続坐禅)に社員の方々とともに参加しておられたのが私との出会いです。

まさに、恵まれた出会いでした。このときのことを回想し、常務取締役・東郷敏氏は、善光寺開創十五周年式典で次のように述べられました。

「私が黒田武志先生とめぐり合わせていただいたのは、昭和三十八年、總持寺の夏季摂心であったと思います。私は社長に連れられはじめての参禅でした。ただ、給料のためにとイヤイヤながらの坐禅、時に私は人より体が固く人並み



總持寺修行時代
参禅指導

に坐れない、余程姿勢が悪かったのでしょう。指導してくださる或る雲水の方が、私のゆがんだ身心を見抜かれたのか、格別な指導と警策を打ち下して下さる。お前、死ねなどと、それはもう大変でした。私は少々恨みを持ってその御当人を確認させていただいたのですが、その方が、黒田先生だったわけです。

さて、いよいよ打ち上げの日。私は社長や息子の専務とともに帰り支度をしておりました。そこへあの厳しい雲水がシャシャと飛び込んで来たのです。私にとって許し難いこの雲水、恨みも消えておりませんでしたので、申し上げたのです。

「先生、悟りというものは何ですか」
すると先生はワツハツハと豪快に笑って、そこにドツカと坐り、ツルツル頭を掻きながら

「私も修行の身、悟りがわかれば、こんな所にはおりませんよ」とおっしゃる。呆氣にとられてしまいました。この人はお坊さんんだけど悟りもわからん。なんたること。禪堂とは別人、底抜けに明るく天真爛漫、何とも温もり溢れる人間味、この新鮮な感動に震えてしまいました。われわれといっしょだったんだなあ。そう思ったとたん何ともいえない安堵感と、そして親しみが湧いてきたのです。ひよっとして、この先生、将来一緒なら何かいいことがあるのではないか…そんな気がしたのでした。

そこで社長に、「あの警策の打ちおろしは、尋常ではありません。何かワケがあるのではないか。ぜひ会社にお呼びして坐禪の指導をしていただきたいものです」と言いますと、それもいいということでお願ひしましたところ、「いつでもか」とおっしゃる。いつでも結構ですと申し上げると、「じゃ明日お伺いしましょう」とすぐのご返事。会社は突然の臨時休業二泊三日、全社員参加で、坐禪指導をいただくことになりました。

私は、打ちのめされたことに対してお返しをしたい気持ちがありました。幹部社員十五人くらいで打合せをし、先生をこらしめるにはこれしかない、ということ、参禪中合掌し続けることにしたのです。そうすれば先生は叩き続けなければなりません。先生もきっと参るだろう、と思ったのです。それからもう戦争です。私たちの衣服は裂け血がしたり、警策棒も折れ飛んで何本あっても足りるものではありませんでした。先生は手を抜かず叩き続け、手のひらの豆がはじけ真つ赤。その内手もとが狂い、ハアハアと息遣いが堂にも響いている。社長が突然「お前らは坐禪ではない。喧嘩だ、やめろ！」とどなっている。仕方なく途中でやめてしまいました。もしも止められなかったらどうなっていたことか。

しかし、お互い本気で真剣に向かい合い、傷だらけの中でつちかわれた心と心の結び合い、終って抱き合い、「共に生きたい！」と瞬時に方向を共有してい

ました。

間もなく總持寺の修行を終えた先生は、「インドとタイで修行したい」「アメリカで坐禪の布教をしたい」などと申し出られ、都度、修行の御金をお運びになる。先生が来ると、ゾツとすることばかりが続く。けれども社長は、何も言わずに申し出に従いこの方に、この方に、ということとで工面しておいででした。先生との御縁により、何故か会社の空気も高まり、社内は結束、営業の成績もどんどん上がっていく。不思議と会社は、黒田先生を知ることによって黒字続き、思わぬ利益も上げさせていただきました。従って先生とのご縁はさらに深まり、佛道を通じて先生のご貢献は大きく、これまで何かと多大な御力添えいただいたわけです。

私たちは商人でございますから、儲けることを第一とします。しかし儲けても世の為、人の為に使うということは簡単なようでも難しいことです。先生は使い方を教えてくださる。まことに以っていい関係。自発共鳴と申しますか、まことに人のご縁、出会いというものは異なるものでございます」。

その後、昭和四十四（一九六九）年、善光寺スタートから三十年たった今日まで、ナリス化粧品の方々が皆さんが一丸となって護りご支援してくださってきたのは前述した通りです。

人生の師・伊藤三喜庵先生

現代日本を代表する建築設計家でもあり、日本南画の大家でもある伊藤三喜庵先生との出会いは、今から三十数年前。若い僧たちで、インド仏蹟巡拝の旅に行く途中の飛行機の中でした。以来さまざまなかたちで、善光寺の護持に尽力していただきました。

善光寺十五周年を記念した機関誌『成寿』は、二十八巻となりましたが、発行当初から伊藤先生には表紙の絵、本文中さし絵、題字を描いていただき、全国読者のみなさんから絶賛をいただきました。お忙しい身だというのに、先生も『成寿』に描くことを、ご自分のライフワークとして楽しみにしてきたと言ってください、一度も休まずに続けてくださいました。先生は「人間、嫌なことをやるのではなく、やらねばならないことが好きになる、これが人生だ」と言う。ほかに、魂が包み込まれるような水墨画を数々残されました。いつか私は、伊藤先生の作品を集め回顧展を開きたいと思っています。開創十五年目に建立した壮大な釈迦殿も、伊藤先生の設計によるもの、まさに、善光寺の頭脳中枢というべき尊師であり、私は父のように慕わせていただきました。

平成八年三月、八十二年の生涯を閉じられましたが、最期まで、二十一世紀へのメッセージを伝え、学ぶ心や情熱を失わなかった伊藤先生の精神は、私の



故伊藤三喜庵先生

心の中に生き続けています。

この世に生を受けて六十二年、そして開創して三十年……他にも尊い仏縁をたくさんいただきました。

今日、善光寺の歴史はいつもご指導ご鞭撻くださる先生方。私の手となり、足となって、私の足りない部分を精いっぱい補ってくださる善光寺で働いてくださっている方々。また温かい慈悲の心でご支援くださる檀家のみなさま。

そして、どん底の中で私とともに苦難の道を歩んでくれ、常に精神的支えとなってくれ昼夜を分かたず身を粉にして寺院運営の実務を担当してくれた私にとってかけがえのない観世音菩薩。妻、倫子。今日あるは私だけが知る尊い存在であり歴史です。

私は非力な人間です。ひとりではやることはまことに小さく、限りがあります。これまで多くの恵まれた出会いによって生かされ、救われてきました。一度決心したことは最後までやり抜いて参ります。何をしても始める人は多い、しかし続ける人は少ない。続いてこそその道。私は今に人生のすべてを託し精一杯生命の完全燃焼を遂げる決意です。これまでの経験を生涯忘れることなく、大きな目的のためにさらに精進したいと願ってやみません。



はばたけ！ 新世紀へ

開創三十周年、育英会設立十五周年

駒沢女子大学長
文学博士 東 隆 眞

成寿山善光寺は、昭和四十四年（一九六九）、黒田武志老師が御師父・黒田白純老師（栃木県大田原市、光真寺中興三十六世）を御開山に拝請して開創され、本年は、三十周年を迎える。

横浜善光寺留学僧育英会は、善光寺開創十五周年の昭和五十八年（一九八三）、現住黒田武志老師が発願して設立されたので、まさに十五周年を閲する。育英会は、寺檀一体の結晶として、この年、釈迦殿が完成し、その報恩行としての

記念事業であったのである。

黒田老師は、善光寺開創の主旨を、釈迦殿の建立に寄せて、「釈迦殿の竣工は、宗祖を通して釈尊に還るといふ私の念願のあらわれであり、今後は釈迦殿を拠点とし、釈尊のみ教えを体して布教教化活動の充実に弄精魂の智をもって邁進する所存」だと明言する。

すなわち、善光寺は、釈迦殿を拠点として、第一に「宗祖（日本の曹洞宗においては、高祖



道元禪師と太祖瑩山禪師の両祖がこのことばに相当する)を通して「釈尊に還る」ということ、第二に「釈尊のみ教えを体し」、第三に

「布教教化活動の充実」に邁進するところに、その存在意義があると喝破している。これは、まさに、黒田老師、渾身心の誓願である。

この善光寺開創の根本精神は、大本山總持寺開山瑩山禪師の「瑩山今生の仏法修行は、この檀越の信心によって成就す……この故に、師檀和合して親しく水魚の昵をなし、来際一如にして骨肉の思いをいたすべし」の示訓にもとづいて、「寺とお檀家は水魚の交わり、骨肉の至情をもつて堅く結ばれなくてはなりません。私も努力します。精進します」という運営の妙諦によってのみ実現するという信念である。

しかし、宣言、信念があつて実践、行動がなければ、それは虚言、画餅にひとしい。老師は、一にも二にも実行の人であり、果断の人である。その一端を、善光寺発行の『成寿』誌第六号(昭和六十二年一月二十日発行)によって見れば、

行事・日時

新年祈禱会

一月十日(土) 午前十一時

節分会

二月三日(火) 午前十一時

開山忌

二月七日(土) 午後二時

青年会総会

二月二十一日(土) 午後二時

春彼岸法会

三月十九日(木) 午前十一時・午後二時

花まつり法会（婦人会総会）

四月八日（水）午前十一時

婦人会研修会

五月九日（土）

不動明王大祭 大般若法会

五月二十八日（木）午前十一時

大施餓鬼法会

七月九日（木）午前十一時・午後二時

七月十日（金）午前十一時・（初盆）

柵経（お盆供養）

七月十三日（月）～十六日（木）

光真寺参拝

七月二十三日（木）～二十四日（金）

医事・身上相談

九月十五日（火）午前十一時～午後一時

秋彼岸法会

九月二十一日（月）午前十一時・午後二時

七五三祈禱会

十一月十五日（日）午後二時

お茶会

十一月二十五日（水）午後一時～四時

成道会

十二月八日（火）午前十一時

写経会

毎月第二土曜日午後二時

参禅会

毎月第二日曜日午前六時

茶道教室（裏千家）

毎月第一・第三日曜日午後一時

書道教室

毎月第二・第四土曜日午後二時

成寿発行 年二回発行不定期

また、善光寺が頒布している『平成十一年不

動明王運勢暦』には、

善光寺総代会 善光寺旅行会

善光寺護持会 善光寺福祉相談所

善光寺不動明王奉讃会 善光寺子供会
善光寺参禅会 善光寺茶道会
善光寺写経会 善光寺書道会
善光寺青年会 善光寺仏典研究会
善光寺婦人会 善光寺出版部
横浜善光寺留学僧育英会

など、諸行事、諸活動が掲げられている。

これらの布教化活動を不退転の決意で実施し、継続して、文字どおり門前市をなす寺門の繁栄を招き、気がついてみれば檀信徒数千戸を数え、またたく間に横浜随一の活気あふれる善光寺となった。

横浜善光寺留学僧育英会は、「人材の育成をはかり、仏教を振興し、世界の平和と人類の進運に寄与しよう」という老師の宿願の実現である。若きころのタイ王国、ワット・パクナムでの僧院生活と、アメリカ合衆国、偉大なる開教伝道

者、肉兄の前角博雄老師開創のロサンゼルス禅センターにおける開教従事の貴重な体験と将来の仏教界のあるべき方向性を洞察しての決断である。今や、世界十八か国（一地域）、延べ九十三人の留学育英生を数えるに至った。さらに、逐年、増員するから、近く百名に至り、百名を越えるだろう。善光寺一か寺の企てで、世界の潮流である国際交流理解を具体的に進めている日本仏教の典型がここにある。さらには、日本の善光寺を本拠地として、タイの上座仏教、アメリカ、ヨーロッパの禅センターないし研究機関を結ぶ世界的視野と国際的規模をもった仏教研修のシステムがここにある。まさに、日本仏教が現代の国際社会に自信をもって発信する聖業であると私はうけとめている。平成十年（一九九八）、スリランカ政府公認の慈善団体サラナング財団は、黒田老師に国際栄誉賞を贈って、永年の努力を高く評価した。また、平成十一年

(一九九九)、曹洞宗管長は、老師を表彰して、その労苦をたたえた。

ところで、西暦二〇〇〇年すなわち平成十二年は、わが曹洞宗高祖道元禪師のご生誕八〇〇年である。西暦二〇〇二年平成十二年は、道元禪師七五〇回大遠忌に相当する。いわゆる二〇世紀は道元禪師をもっておさめ、二一世紀は道元禪師をもってはじめなければならぬと私は理解する。

この八〇〇年、七五〇年を迎えるにあたって、私どもは私どもの過去をどのように懺悔し、現状をどのように把握し、来るべき新世紀にどのような夢を実現しようとするのか。

このたび、開創三十周年、育英会設立十五周年の記念事業として、善光寺では開創三十周年式典、育英会設立十五周年式典、記念誌刊行、釈迦殿等修復、中国人画家周穎先生の十八羅漢屏風制作、墓地「横浜やすらぎの里」開園、ワッ

ト・バクナム訪問、中国天童山参拝などを計画しているということである。これ、また、いずれも、開創三十周年、育英会設立十五周年にふさわしい大事業である。

さて、三十周年以後はどうするのか。十五年以後はどうするのか。

黒田老師は、私の大学、大学院時代の同窓、同学の畏友である。一緒に講義を受けた小川弘貫先生は、早稲田でも慶応でもそうだ、私立学校が名実ともにととのうには百年はかかるといわれた。

私立学校といっても学校差はあるし、寺院(宗教法入)と学校(学校法人など)とは基本的に異なる点がある。それはそのとおりだが、私は、黒田老師、善光寺を考えるとき、なぜか小川弘貫先生のことを想起する。

考えようによつては、三十周年、十五周年は、まだまだ若い。これから五十周年、百周年、さ

らには五百周年、千周年を迎えなければならぬのである。

善光寺黒田武志老師は、倫子夫人の最高、最大のご協力を基礎に、開基家、本寺、檀信徒、宗門、内外の關係各方面の總力を結集して、前進し、充実していつてほしい。それは、開創、設立の原点を確かめ、時代に即応し、時代をリ-

ドしていく以外にみちはないであろう。つねにグローバルな視野に立ち、宗祖を通して釈尊のこころを学び、釈尊の教えを広め、自他ともに救われていく——善光寺の使命がここにある。耳を澄ませば、そのきざしの樂の音が、いよいよはつきりと天から聞こえてくる。

はばたけ！ 新世紀へ。

善光寺開創三十周年誌慶

正法久住

天童禪寺廣修



横浜善光寺十八羅漢

「羅漢^{らかん}」とは、たいへん厳しい修行の結果、「阿羅漢果^{あらかんか}」という最高の悟りの境地を得た、尊敬に値する人のことをいいます。その意味ではお釈迦さまは、最初の羅漢となった方です。完全な悟りを開かれたお釈迦さまは、さらに別格の「仏陀」と呼ばれるようになり、生前のお釈迦さまに直接説法を聞いて悟った十六人の高弟たちのことを「羅漢」と呼ぶようになりました。お釈迦さまの教えをまとめた最初の経典をつくった方々でもあります。

坐禅瞑想をする禅宗は、お釈迦さま当時の雰囲気の色濃く残している宗派で、後に羅漢像は、禅宗関係の寺でよく見うけられるようになりました。その像は一体ではなく、十六羅漢とか五百羅漢という名で数多く作られたり、描かれたりします。涅槃^{ねはん}に入らず仏法を護持し、すべての人びとを救う使命をお釈迦さまから託され

た十六羅漢は、そもそも玄奘の訳した『法住記』(阿羅漢難提蜜多羅所說法住記)にもとづいて、唐代に絵画や彫刻に表されるようになりました。道元禪師も中国の天台山や天童寺などの寺院の羅漢像を見て、帰国後ご自分の寺にもまつられました。

羅漢像には禅月様、張玄様といった二人の高僧の図様が中心ですが、どの羅漢も、とても怪異で奇妙なお姿をしています。菩薩のように美しい崇高なお姿とはまた違って、妙に人間臭くて、不思議な親近感を感じる表情をしています。だからかえて民衆に広く信仰され愛されるようになったのでしょうか。

さて、十六羅漢とは、どのような方々だったのでしょうか。親しみやすく、羅漢さんとお呼びしてご紹介しましょう。

第一尊者は、賓度羅跋囉惰闍尊者です。おピンズルさまと違ってよくお堂の隅に、台所にいらっしゃいます。台所——つまり財政を護る羅漢さん、また、痛いところを直してくれる羅漢さんとされています。十六人の中でも一番有名で人気のある方で、しばんだ目の底の深い光が、「クヨクヨつまらんことを考えるんじゃないよ」と語ってくれているようです。この尊者が、「常に世にあつて涅槃に入らず、正法を護持すべし」と他の羅漢さんたちに命じられたそうです。

第二尊者は、迦諾迦伐蹉尊者です。全身しわだらけでにこやかな笑みを称えています。枯れ木のように静かに、安らかで、とらわれのない心を教えてくれます。

第三尊者は、迦諾迦伐釐墮闍(迦諾迦跋釐惰闍)尊者です。我忘の境地、精神の

空白、放心状態——空気と溶け合う一体感を教えてくださいます。

第四尊者は蘇頻陀尊者です。十年、二十年、百年、千年…宇宙の始まりから終わりまで永遠にお座り続けている様なお姿です。肩はまるで植物のように動きません。尊者自身、一つの植物と同化していらつしやるようです。

第五尊者は、諾距羅（諾矩羅）尊者です。私たちの心の内の暗いもの——苦惱、不安、恐怖、羞恥、それらはすべて実は存在しないものなんだよと教えてくださいます。

第六尊者は、跋陀羅尊者です。すべて我々は人間であり、豚であり、同時に宇宙であり仏なんだよと語っているかのようにです。

第七尊者は、迦哩迦（迦理迦）尊者です。その長い眉毛を宇宙意識とのアンテナにしているようです。宇宙と我々は同根であるという真理を感じ取られています。

第八尊者は、伐闍羅弗多羅尊者です。仏滅するのち、古代インドにおいて、千人の従者を従えて仏法の守護と人々の救済に任じた羅漢さんです。

第九尊者は、戍博迦尊者です。「人間は自分中心にしか物を見ようとしませんが、それではいけない。別の反面、自然の側・無の側から物を見よ。そのとき物の価値観は全く転換するのだよ」と教えてくれています。

第十尊者は、半托迦（半託迦）尊者です。仏舍利を供養するとき、その仏舍利が光明を発するという不思議な力の持ち主です。愚鈍といわれた注荼半托迦（周利槃

特）尊者の兄で、この兄弟は故郷の路上に産み落とされたそうです。深い悲しみを超越した悟りの境地に至ったとき、龍を制するほどの神通力が授けられたといいます。

第十一尊者は、囉怛羅（羅怛羅）尊者です。悪や不正、邪悪な心に対して、怒りを表す羅漢さんです。いい加減な生き方、命を尊ばない生き方をする人間に、ものすごい気迫で、喝！——強烈な叱責を与えてくれます。この羅漢さんは、実は生前のお釈迦様の長男です。成道後、帰郷したお釈迦さまによって出家させられ、二十歳で具足戒を受けました。仏十大弟子の一人で、密行第一と称せられました。修行時代、便所に宿泊し囉怛羅のために、仏が廁屋根にて説法した話が伝えられています。

第十二尊者は、那迦犀那（那伽犀那）尊者です。「人間というのは天地の創造物。それはすばらしいことじゃないか。そのすばらしさを天地に代わって祝福しよう」といつてくれているようです。紀元前二世紀後半のインドの仏教僧で、バラモンの教えに意義を見いだせず、尊者ローハナのもとで修行し、ついには三蔵を修めたといわれます。ギリシャ人のバクトリア王メナンドロスと討論をして、仏教に帰依させたという記録が残っています。

第十三尊者は、因掲陀尊者です。己の中の欲望をこらしめる「杖」、知恵を磨く「本」、そして仏の慈悲の象徴である「数珠」という三つの道具を持っています。ひととき

もとどまらない厳しい自省の心を持つ羅漢さんです。

第十四尊者は、伐那婆斯尊者です。どんなに悲しい思いも、憎しみやみにくい嫉妬も、すべての煩惱は、ただこの羅漢さんの前にいるだけで消えていくといえます。

第十五尊者は、阿此多（阿氏多）尊者です。弥勒が当来成仏の記（予言）を受けるとき、自ら転輪聖王たらんことを志願したといわれます。宇宙の流れの中で自然に生きている羅漢さんで、子どもから知識人まで、すべての人が魅きつけられます。

第十六尊者は、注茶半托迦（周利槃特）尊者です。兄の半托迦とともに仏弟子となりましたが、兄が聡明なのに比べて愚鈍であったので、愚路と呼ばれました。しかしこの尊者十六羅漢さんの中でもとくに親しまれ、人気があるといわれています。注茶半托迦は、あまりにも覚えが悪いので、修行する資格がないといわれ、寺から追い出されそうになりました。お釈迦さまは哀れに思い、一本のホウキを与え、「塵を払い、垢を除く」と唱えて、毎日掃除だけ一所懸命にしなさい」と教えました。いわれた通りに毎日毎日朝から晩まで、その言葉を唱えながら掃除に励むうちに、あるとき、「塵や垢は心の煩惱である」という悟りの境地に達することができました。こうして、どんなに愚かな者でも、修行と努力によって悟りを得ることができるのだということを教えてくれる羅漢さんとなりました。

以上、十六人の羅漢さんはそれぞれに、仏法の真理、宇宙の真理を私たちに教え

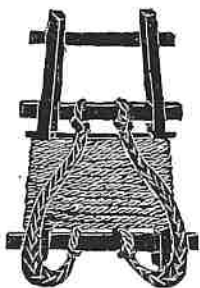


周穎先生

てくださっています。

横浜善光寺では創立三十周年を記念いたしましたして、十六羅漢に、最強で最高の聖獣といわれ、雲を呼ぶ龍、百獣の王であり風を呼ぶ虎、この最も強いものとされる仏教の守護神・龍虎の雄々しい姿を組み合わせ、『横浜善光寺十八羅漢』の屏風を制作いたしました。これは、中国の若手の中でも、最も現代感覚の優れた画家で、中国上海人民美術出版社の周穎先生に描いていただいたもので、今までとはまた違った斬新な羅漢像が見事に示された四枚の作品に仕上げていただきました。

一人一人の羅漢さんが、今にも目の前にいる私たちに語りかけてきてくれそうな、そんなふうに感じていただけることと思います。



横浜善光寺十八羅漢圖題辭



横浜成寿山善光寺自昭和四十四年開創以來、已歷時三十春秋矣。為慶賀開創三十周年及育英會設立十五周年之盛典、住職黒田武志老師發願請繪十八羅漢圖入寺供養、余乃奉囑恭請中國上海畫師周穎先生為之、得以玉成也。蓋羅漢圖者、史伝有二大流、一者貫休、二者李竜眠也。而周此画当属前者、此十八尊者皆胡貌梵僧、骨相嶙峋、微妙難

言也。周擅花卉、鳥獸、魚蟲、山水、尤精於人物。其筆墨清雅、画意高遠。斯作深得禪月精髓、良可寶之。再者、大凡羅漢圖多為十六応真、而此作繪成十八、更為罕也。羅漢者、乃為聖教真僧、諸漏悉尽、具大神通、若有發心供養者、其人福德不可計量也。黒田堂頭荷佛慧命、披忍辱鎧、道心高邈、願憑斯因、冀世界平和、佛法昌隆、善光寺

法水長流、法燈永明、所願如是也。

平成十一年歲次己卯正月初一日

法音奉囑拜題

横浜成寿山善光寺は昭和四十四年開創以来、すでに時は三十の春秋をへたり。開創三十周年及び育英会設立十五周年の盛典を慶賀する為、住職黒田武志老師が發願し、十八羅漢図の絵を入寺供養を欲せんと、余が乃ち囑を奉じて、これを成すことを中国上海画師周穎先生に恭請し、以って玉成することを得た。蓋し羅漢図という者は、史に二大の流れがあり、一つは貫休、二つは李竜眠なり。しかも周のこの画がまさに前者に属し、この十八羅漢は皆胡貌梵僧であり、骨相は嶙峋として、微妙にして言い難く。周は花卉、鳥獸、魚蟲、

山水を擅し、尤に人物に精した。その筆墨が清雅で、画意は高遠である。斯の作は禅月の精髓を深く得て、まさにこれを寶にするべし。なお、大凡、羅漢図は十六応真のが多い、しかし、この作は十八と成し、更にまれであろう。羅漢というのは、すなわち聖教の真僧であり、諸漏悉く尽し、大神通を具する。若し發心して供養する者が在れば、其の人の福德は計らざるべからずなり、黒田堂頭は、佛の慧命を荷い、人辱の鎧を披り、道心が高邈たり、願わくは、この勝因をたよつて、世界平和、佛法昌隆、善光寺法水長流、法燈永明を冀う。所願如是なり。

平成十一年歲次己卯正月初一日

法音囑を奉じて拜題す。

南伝大藏經の経蔵完成

「ブツダモントン」に世界最大の経蔵

〜タイ・今世紀最高の偉業にわく〜

日本バクナム会会長 黒田武志

平成十年（一九九八年）十二月二十七日から

今年一月一日にかけて、私は仏教の聖地・タイ国へ、ワット・パクナムの招待を受け訪問してまいりました。インドシナ半島の中心に位置し、日本の約一・五倍の広さを持つこの国の国民の九十五パーセントは敬虔な仏教徒。人々の信仰心の深さには、タイを訪れるたびに感動させら

れます。

ドン・ムアン空港から市街地とは反対方向、新しく完成した高速道路で三十分ばかりの郊外（ナコン・パトム）に、二・五キロ四方の土地にブツダモントンと呼ばれる場所があります。この地は仏暦二五〇〇年（一九五七年）を記念して、タイ国政府と国民が一体となって、仏教

関係の施設を建立発願した所であります。いったんは工事を中断したものの、その後計画は順調に進み、半世紀の歳月をかけて、一部の建物をのぞき完成いたしました。

その施設を簡単に説明しますと、土地の中心地には約十六メートルの黄金の仏陀の立像がおさめられ、その周りには数多くの建物、仏教研究に関するセンター、瞑想、仏道センター、集会ホール、仏教博物館等完成し、今図書館が建築中であります。

そして昨年の秋には、ワット・パクナムの力で十年の歳月をかけて、今世紀最高の偉業と思われる『南伝大蔵経』の経・律・論の三蔵を大理石の板碑にきざみ、それをおさめる経蔵が完成し、落慶式がとり行われました。この式典に招待いただき列席いたしました。

瞑想の寺ワット・パクナムの僧侶たちが、大理石の石板にパーリ語で一字一字、精根こめて

手彫りし、十年間かかって完成させたものです。板碑一枚の大きさは、横一・一メートル縦二メートル、その数、表裏合わせて一四一八枚。二枚の大理石を張り合わせて七〇九枚の石碑がまるで遠く続く続壁のようにズラリと並び、一枚一枚に隙間なくびっしりと書かれたパーリ語の教典―忍耐と努力の結晶と言えましょう。

大理石の上方には、お釈迦さまの前世の物語である『ジャータカ物語』から、現代のワット・パクナムのご住職の一代記までが絵物語として鮮やかな色彩で描かれています。

私は、その崇高な空間にしばらく呆然と立ちすくんでしまいました。経蔵内の板碑から、絵物語から、そして全体を包み込む聖なる空気から、ふるえるような感銘を受けていました。まるで宇宙との一体感を味わっているような…。

一カ寺の発願で、このような偉業を成し遂げるとは！改めて、若き日修行したワット・パ

クナムのすばらしさを思い起こしたのでした。

タイ国には約二万五千のワット（僧院）があり、僧侶の数は二十万人にのぼります。この国では一生に一度、二十歳に達する男子が剃髪して得度出家し、僧侶の生活を経験する習慣があります。だいたい七月から十月までの雨期に出家する一時僧が増えるため、その数は三十万人に高まることもあります。このような生活習慣がなぜあるかは後で記すとして、とにかくその膨大な数のワットの中でもワット・パクナムは「瞑想修行のメッカ」として知られており、また、日本とタイとの仏教交流の要ともなっているお寺なのです。

私が修行いたしましたのは昭和三十八年（一九六三年）、大本山總持寺の特別僧堂第一期生としての修行を終えて、インド仏蹟巡拝に参加したその足で、同安居の石附周行師とそのままタイ国ワット・パクナムで得度、修行生活に入り

ました。ワット・パクナムは、バンコクにつぐ都市トンブリにあります。バンコクとは少し離れた静かさをまだ持っています。私がいた頃も、川に浮かぶ舟上で生活する人々がほのぼのと暮らしていました。朝は手の平の線が見える頃に托鉢し、早朝と正午の食事以外は、瞑想と、仏教学、パーリ語学等の学習をする生活でした。寺の中に典座寮（食堂）があるのは、ワット・パクナムのロンポー（父）と呼ばれるチャオ・クン前任職（プラ・モコン・テムニー師、独自の瞑想法の実践により、涅槃を得る道を弟子やたくさんのお信者に伝導した）がタイで初めての大改革をしたもので、修行僧たちが托鉢に費やす時間を瞑想・修行弁道にあてられるようお願いをこめて作られたのです。おかげで思う存分学ぶことができました。上座部仏教、大乘仏教の教えを越えて感じた事は登る道は違えど頂点——真理——は一つ。宗祖を通して釈尊に還れを

私の宗教生活の原点とすることに決めたのでした。

ワット・パクナムで得た尊い修行体験を、後に続く修行者にぜひ味わってもらいたいと思いは、その後、善光寺留学僧育英会を設立してからは、十数人の若き僧侶を派遣し、タイ国からも修行僧を受け入れてきました。日本とタイとの相互理解と仏教文化の交流の一環として、善光寺開創二十周年記念には、プミポン陛下還暦記念に出版したタイ語パーリ大蔵経をいただきました。

又、「日本文庫」を多くの方々の協力を得てワット・パクナムに開設いたしました。そして私の息子四人もワット・パクナムご住職プラ・マハージャマンガチャラ殿下に得度していただきました。いつでもご住職は私をわが子のように温かく迎えてくださり、日本という国にも大変親しみを感じてくださるようになりました。

大本山總持寺宝物館にあるタイの仏像は、親善の意味でワット・パクナムから贈呈されたものであり、大本山總持寺としては、当時の貫首岩本勝俊禪師が『南伝大蔵経』（昭和十年に印度学仏教学者高楠順次郎博士が国訳し全六十五卷七十冊）を進呈し、又、昭和五十五年前後四年間に約十名近くの雲衲の方々が、タイ国世界仏教徒連盟事務次長小谷亀太郎先生のお世話で、タイ国ワット・パクナムで得度・安居いたしました。

タイと日本の親睦の象徴のようなパーリ語『南伝大蔵経』のすべてが、今、大理石に刻み込まれ、目の前に広がっている。感無量でありました。この世界最高の経蔵を包み込む「ブツダ・モントン」のスケールの大きさ、偉大さ：日本ではとても考えられないことです。タイ国民の聖なる魂が込められているということを深く感じました。仏教—仏陀の教えは、二千数百

年の時を越えてもなお、当時と同じように民衆の心の中に生き続けているのです。

仏陀とは、「真理に達せる人」という意味で、仏教の開祖をゴータマ・ブツダといい、釈迦族出身の聖者ということで、尊称として釈尊（釈迦牟尼世尊）と呼んでいます。

釈尊は、「あらゆる存在は生滅変化して、永遠に存続するものではなく、すべてが苦であり、煩惱^{ぼんのう}を断じ、真理と合一した境地、涅槃こそが理想の境地である」と説かれました。すべて欲望を捨て正しく生きることによって、苦の世界から解脱することができるとタイの人々は思っています。また、輪廻し来世で生まれ変わることを自然に信じていて、来世で苦しまず幸福になるために、現世で一所懸命に徳を積もうとするのです。このことをタイの人は「タンブン（積善）」（タンは積む、行う、ブンは功德の意味）といい、小さな種が大きな樹木となるように、



ささやかなりとも精一杯の供養の種を蒔けば、必ず大きな幸福が約束されることを深く信じて生きています。特に仏法僧の三宝に供養することを重視しています。

タンブンの中で最高にして最善の行いとされているのが、出家することで、男子は成人すると出家する習慣があるのはそのためなのです。女性は「メーチ」と呼ばれる女子修行者にはなれても出家して僧侶となることはできないため、托鉢僧に喜捨することでタンブンします。施しを与えるというのではなく、「タンブンさせていただき救われました。心から感謝いたします。」という気持ちの持ち方が、どれほどタイの社会を穏やかに、心豊かにし、人々の目を輝かしていることでしょうか。

そして、こうした国中の人々の心が一つにな

ったからこそ、「ブツダモントン」が完成に至ったものと信じています。

十二月二十九日の式典には、タイ国中の高僧五百人、三十一日にも僧侶五百人と数千人の在家信者が集まり、ブツダモントンの南伝大蔵経経蔵の完成を祝いました。人々の純粋な喜びの波動が私の心にじかに伝わってまいりました。この国には、釈尊の魂がそのまま生きています。それをまざまざと感じさせられた一瞬でした。

私たち日本人は、すばらしい偉業を成し遂げたすばらしいタイの人々と共に、釈尊の教えを後世に伝えたい。今を生きる私たちの一番大切な使命であると、経蔵内の板碑を前にして、あらためて胸に刻みこんだのでした。

南伝大蔵経の経蔵完成
「ブッダモントン」に世界最大の経蔵

タイ・今世紀最高の偉業にわく



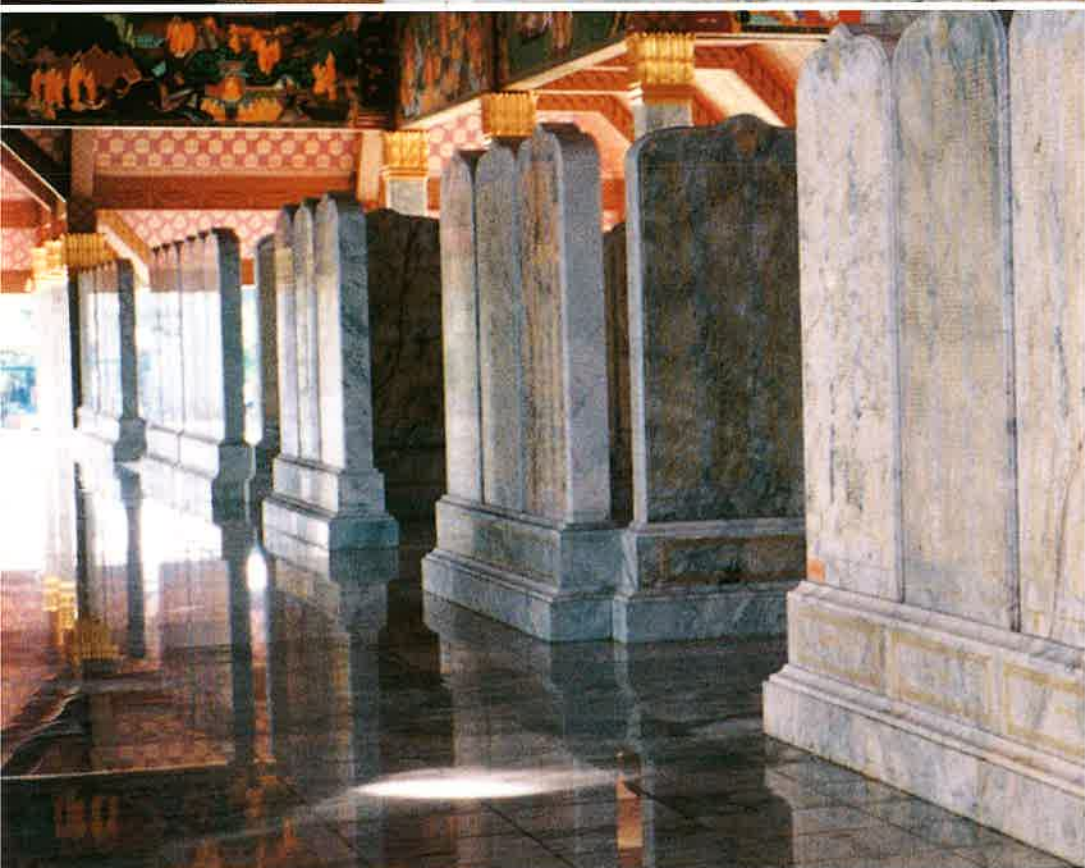
経蔵内部

極彩色の壁面と天井



板碑の前にて







全景



経蔵正面入口

祝典会場に向かう人たち





壁画に描かれたプミボン国王出家の図



ブッダモントンのシンボルとなる16体の仏陀像



祝典参列の記念にタラパットをいただく



祝典・法要には多数の僧侶が参集されました







12月29日・祝典法要

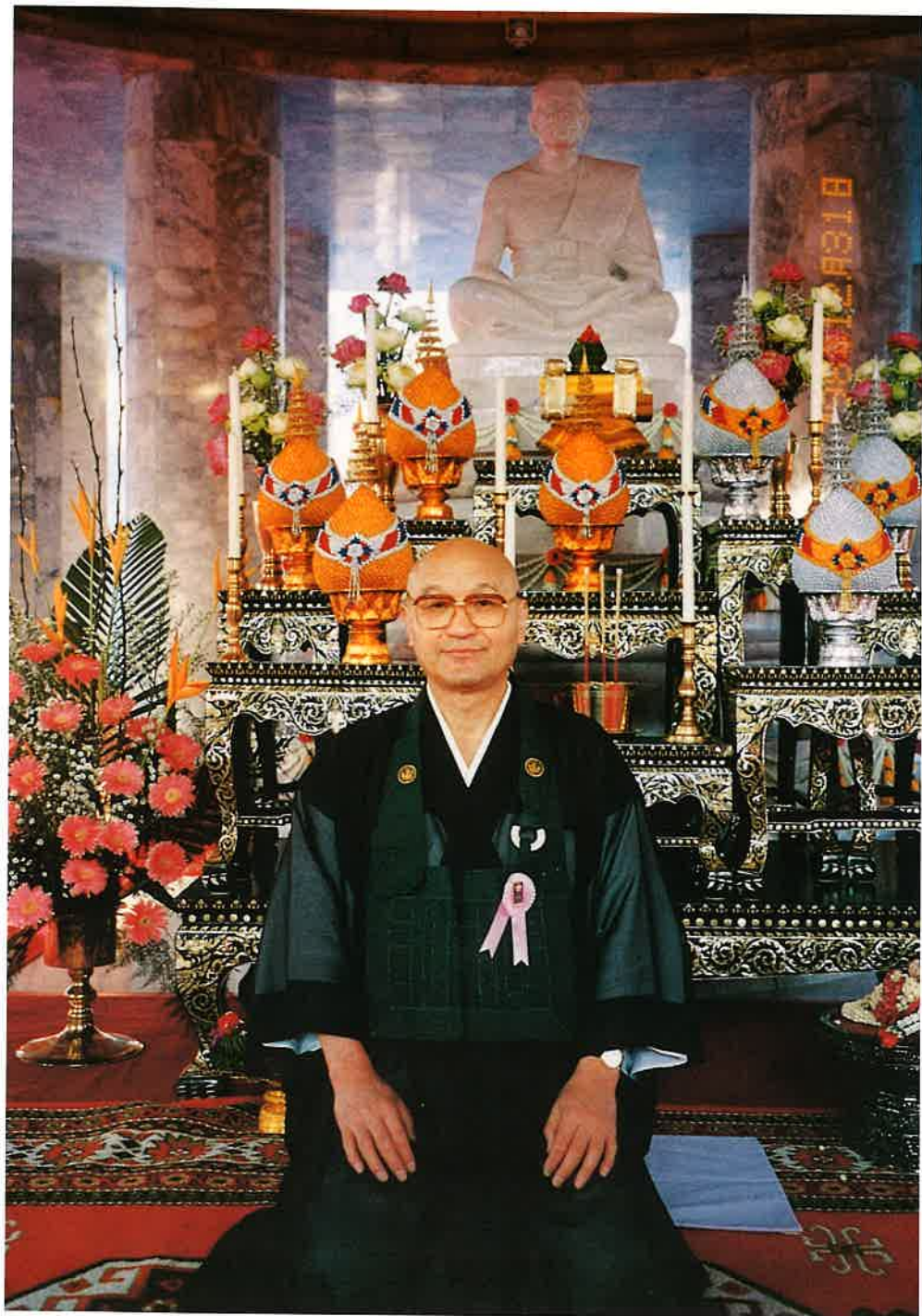




ワット・パクナムご住職プラ・マハージャマンガチャラ 猊下と黒田住職

祝典に招待された外国人僧侶の皆様





大法要が行われた御堂にて

堂内の天井図





タイ僧の友人と再会を喜ぶ

十二月三十一日・祝典



設計者や篤信の方々と

善光寺留学僧真野順治氏（後列中央）と





善光寺に贈られたパーリ大蔵経

ワットパクナムにアーチャンを訪ねる



小谷亀太郎氏の奥様（前列右から2人目）とのひととき



■リポート■

タイに巨大な仏教施設「ブツダモントン」

経蔵落慶式を厳修

形山俊彦

世紀最大の仏教遺産

一九五七年、タイは国を挙げて仏紀二五〇〇年の式典を開催した。その前年、現在のプミポン国王はタイ王室の習慣に従って一時出家を行なった。タイは国民の九五％が仏教を信奉しており、これは一国としては最大の仏教徒人口である。王族や高官が一時的であれ出家し比丘と

しての修行生活を経験することが尊ばれている国はほかにない。タイは世界で最大の仏教王国といつてよい。

そのタイ国政府と国民が一体となって計画した建造物が「ブツダモントン」である。仏陀を記念するためにこのような大事業が国家プロジェクトとして計画されたことは、熱心な仏教国ならではのといふほかない。プミポン国王は仏紀

二四九八（西曆一九五五）年七月二十九日、中心となる建造物の定礎式を自ら主宰して執り行つた。

事業は建設委員会のもとで二年間、つまり仏紀二五〇〇年まで続けられるが、西曆一九七六年までの二十一年間は中断した。その後再開され、現在も工事は進行中である。しかし、すでに中心となる仏陀像や主要な施設は完成しており、全仏教徒に開放される国家施設「ブッダモントン」の全容が設備されるのは時間の問題とみられる。

「ブッダモントン」計画の目的は、この地を広大な仏教の総合センターとすることにある。バンコクから西へ約六〇^{キロ}のところになコン・パトムという町がある。伸びやかな田園風景が広がるこの地はタイに仏教が初めて伝来したところといわれ、古くから仏教の聖地として知られる。「ブッダモントン」はまさにこの土地を選

んで計画されたものである。

敷地は二五〇〇ライ（およそ二・五^{キロ}四方）という広さで中心部に高さ一六^{メートル}の遊行の仏陀像が立つ。「ブッダモントン」のシンボルとなるブロンズ像で、著名な芸術家であるシルパ・ピラスリ教授がデザインした。一帯は竹林、マンガーの林、ニグローダの林、タマリンドの林、シュロの林、繁用植物の林などの樹木が生い茂り、花の苑にはさまざまな草花が咲いている。池の周囲に緑の芝生を敷きつめた庭園が配され、さながら自然公園の趣である。

ここは仏教徒に安らぎの場所として開放され、さまざまな施設は仏教研究や瞑想と実践のセンターとして利用される。

点とする建物は、精舎、タイ様式の居住施設、長老のための住居、来訪者用の宿泊所、食堂付きの集会ホール、僧侶の食堂、円筒形の公共用ビル、通信報道関係者の会見センター、訪問者

休憩所、八つの瞑想ホール、二つの健康のためのホール、ブッダモントンの事務局支所、水道施設、什物保管庫、仏教図書館、博物館、そして経蔵。

「ブツダモンソンは、仏教僧への供食や僧伽への供養などの功德を積むために全ての仏教徒に開放されている」と解説書に記されている。

午前五時から午後七時まで、訪問者は自由に敷地内へ入り、施設を利用することができる。

入場者が守らなければならない規則及び注意事項も定められているが、それは次のような、ごく基本的な事柄と行ってよい内容である。

「訪問者は相応しい服装であること」「この聖域内では威儀を正し、不謹慎な行動をとらないこと」「構内で自動車を運転したり、禁止された場所に駐車してはならない」「樹木を伐採し、また小枝を折ったり花を摘んではならない」「いかなる酒類も飲んだり販売してはならない」「動物

を連れ込んだり放してはならない」「凧やグライダー、飛行機などを飛ばして遊んではならない」「地域内で写真やビデオを撮影してはならない」

ヴィーサカ（仏誕）祭やマカ（万仏）祭、アーサルハ（三宝）祭など仏教の聖日ばかりでなく、タイの伝統的な季節ごとの祝祭日、たとえば正月行事のソンクラーン、十一月の満月の夜のロイカトンの祭りなどにも、この場所で僧侶による説法が行なわれる。その時には仏殿で僧侶への食供養や祈りの行事が執り行なわれる。

ワットパクナムの偉業

これらの施設の中でもパーリ語蔵経（いわゆる南伝大蔵経）の経蔵は極めて大きな意味をもつ。石に刻まれた大蔵経は中国の房山石経が有名であり、また韓国海印寺にある板木に刻まれた大蔵経は第一級の文化財として世界遺産に



経 蔵

指定されている。タイ国が政府と国民の力を合
わせて大理石の板碑に経・律・論の聖典を刻ん
だ偉業は、後世に二十世紀最大の仏教遺産とし
て伝えられるだろう。

特筆すべきは、「ブツダモントン」の諸施設の
中でも、この経蔵と図書館はワットパクナムが
手がけたということである。タイ仏教における
ワットパクナムの急成長ぶりがうかがえる。経
蔵は完成までに十年の歳月を要している。大理
石の板碑一枚一枚に一切経を刻む作業に多くの
比丘たちが打ち込んだ。その過程はすべてカラ
ー印刷された一冊の豪華な記念誌に記録されて
いるが、一つ一つが入魂の仕事であった。

板碑の大きさは縦二・四横一・一。その数は
七百九基。経文は碑の表と裏に刻まれているか
ら、碑面は千四百十八枚を数える。経蔵の内部
は森厳な空気がただよい、「碑林」という言葉が
想起される。外の強い日差しは遮断され、涼し

い風が流れている。

見上げると、欄間の部分に極彩色の絵巻物が繰り広げられている。釈迦の前世物語であるジャータカ（本生譚）や仏伝、ワットパクナムの中興の祖から現任職に至る歴史、僧侶と多くの信徒が心を一つにして経蔵建立のために力を尽くす信仰の姿などが壮大な歴史絵巻として色鮮やかに描かれている。靴を脱ぎ、大理石のひやりと冷たい床を踏みながら堂内を歩くと、さながら極楽世界の回廊をめぐる聖者の気分にもなる。

経蔵の中心部に金色燦然たる仏塔を戴く大理石の仏殿があり、ドーム型の天井の真下にワットパクナム中興の祖、ロンポー（父）と呼ばれるチャオ・クン前住職をかたどったビルマ産大理石の等身大の坐像が安置されている。ロンポーは、ワットパクナムを「托鉢の寺」から「瞑想の寺」に変えた高僧である。

経蔵は、遊行の仏陀像の後方、湖に浮かぶ島の上に建つ幾何学模様の建物である。菱形をした藍色の屋根の組み合わせと、その中央に突き出した金色の仏塔のコントラスト。鮮やかに輝く全容は、湖の上に組み立てられた宇宙基地のようなイメージを与える。

経蔵落慶式典に

日本人僧五人も参列

経蔵落慶の記念行事は昨年十二月二十九日から新年元旦にかけて執り行なわれた。スリランカやミャンマー、日本など海外からも僧侶が参列し、招待された日本人僧は、かつてワットパクナムで得度修行した経験を持つ高野山真言宗の高野山堀川別院主監・佐々木弘伝氏（京都市）、真言寺住職・資延憲英氏（北海道深川市）、開龍寺住職・教海俊應氏（岡山県笠岡市）、曹同宗の善光寺住職・黒田武志氏（横浜市）、日蓮宗の本

長寺住職・従野公徹氏（横浜市）の五人。

ワットパクナムのプラ・マハージャマンガチャラ住職から、わが子のようにかわいがられ、ワットパクナムへ留学僧を派遣するなど日本とタイの仏教交流に尽くしている善光寺の黒田住職は、壮大な「ブツダモントン」とパーリ蔵經の板碑完成の歴史的意義を日本から世界へ紹介しようと話し、記念すべき式典に記者を同行させた結果がこのリポートである。

メインの式典は十二月二十九日と三十一日の二日間にわたって挙行された。両日ともタイ全土から五百人ずつ延べ千人の僧侶が参集する盛儀で、随喜した在家信徒は数千人にのぼったと見られる。

プラ・マハージャマンガチャラ住職は在家信徒に五戒を授け、ロンポーの業績を偲び、説法が行なわれ、仏殿を埋めた五百人の黄衣のタイ人僧がいつせいに読経した。

読経が終わると、信徒たちは僧侶に法衣と記念品を施した。タン・ブン（積徳）と呼ばれるタイの供養の姿である。さらに、八万四千個の小さな仏像のお守りを求めて布施し、そのお守りを願い事と一緒に空中ケープルで仏塔内に奉納する。仏教に救いと安樂を求める信徒たちの無数の願いが込められた。

巨大な信仰エネルギー

タイの仏教を垣間見るたびに多くのことを考えさせられる。第一に日本仏教との比較である。上座仏教のタイと、極大乘といわれる宗派仏教の日本仏教とを安易に比べることが危険であることは承知している。しかし、いま考えようとするのは、仏教史の流れとして上座部から大衆部が生まれてゆく時間的経過をなぞることではない。

タイ仏教も、あるいはスリランカやミャンマ

一の仏教も、中国や韓国やチベットの仏教も、過去の歴史の中に位置づけて考えるのなら、それぞれが異質のものでしかない。そうではなくて、視点をこの二十世紀に同時存在している仏教のあり方としてとらえてみることはできないかということである。

タイの仏教と日本仏教の根本的な違いは、いうまでもなく戒律の問題にある。戒律が守られ、それによって僧伽が維持されているからこそ、仏法僧の三宝は篤く敬われている。僧侶に供養し、タン・ブンすることに對して、タイの人たちは無条件の帰依とも見える熱意を見せる。施すことが喜びであることこそ豊かさといえるものではないだろうか。

「ブツダモントン」に注がれた政府と国民の信仰のエネルギーは、人間が生きていくことの意味や喜びの所在を改めて教えてくれているように思える。



くらしの中で読む『正法眼蔵』

―面授の巻― その五（『成寿』第二十三号の続き）

小倉 玄 照

〈本文〉

しかあればすなはち、千年万年、百劫億劫といへども、この面授これ釈迦牟尼仏の面授成授なり。この仏祖現成せるには、世尊・迦葉、五十一世、七代祖宗の影現なり。光現成なり、身現成なり、心現成なり。尖脚来なり、尖鼻来なり。一言いまだ領覽せず、半句いまだ会せずといふとも、師すでに裏頭より弟子をみ、弟子すでに頂頼より師を拝しきたれるは、正伝の面授なり。

〈現代語私訳〉

そういう次第であるから、千年とか万年とか、あるいは想像を絶する無限の歳月を隔てたとしても、この面授はまさに釈迦牟尼仏のいのちが面から面に伝えられることなのである。面授のとき仏祖となるのであるが、それはまさに世尊となることであり、迦葉、そしてそのいのちを継いで我が師である如浄禅師に至る五十一世の仏祖のかたがた、或いはいわゆる七仏祖宗という釈尊以前の永遠の過去に連なる仏祖方のいのちがいま生きる面としてそこに立ちあらわれる

のである。それは光のごとくそこに出現する、
(それはたちまちに消えてしまうから、一見何
の変哲もないように見えるが) 師と弟子のから
だとして出現しているし、その心にも出現して
いる。脚あしのつま先から、鼻の端はしまで仏そのもの
となるのである。たとい一言もよくはわからず、
たった半句をも臍はそおちさせていなくとも、師が
すでに心にこだわることなく弟子を見つめ、弟
子がすでに師の眼を受けとめて素直に頭のとつ
ぺんを師の眼に向けて礼拝を行ずれば、それが
まさに正伝の面授なのである。

一言も半句も必要なし

人間は、言語を中心に生活を営む動物です。
ところで私は英語を始めとして外国語の一切に
ついて殆ど会話不能です。これは国際性が欠如
している人間の証明ですからあまり自慢になり
ませんが、こういう人間が何かの拍子で外国を

訪ねますと言語が人間生活の基軸になっている
ことを身にしみて感じます。通訳がついていた
り、日本人の仲間が何人かいたりすればそれほ
ど感じないのですが、一人で外国の街を歩いて
いると孤独感を味わうこと切なるものがありま
す。言葉が通じなければ、生きて行くことすら
不可能だとさえ思われて来ます。

考えてみれば、いわゆる文明は、言語を中心
に発達して来ました。けれども言語中心の感の
ある現代は、大きな問題点も秘めています。

言語は、抽象性を本質とします。「草を取る」
という表現からテレビに写る草取り風景をイメ
ージして解ったとうなづく人もいます。「草を取
る」ということばの解釈としてはそれで間違っ
ていません。ところが「草を取る」ということ
ばの真実は、実際に炎天下に畑で、或いはお寺
の樹陰で、草を取ることをやってみた人でない
とわからないはず。根気もいるし、手も汚

れる。汗もかく。腰も痛くなる。それでいて、草取りが一段落して仕事のあとを一蔑した時の爽快な気分もまた何とも表現できない。そんなこんなな直接体験の裏づけのない、いうなれば画面としての草取り風景だけしかイメージできない人間ばかりになったらどうでしょうか。

禅門では、つとにそのことの危さに警告を發して来ました。「教外別伝」とか「不立文字」とかいう言葉は、端的にそのことを示しています。これは、文字が必要だと言っているわけではありません。文字は、抽象性を帯びているから、直接体験によってその奥に潜む真実を把握しておかないと、とんでもない誤りを犯しかねませんよ、という警告なのです。「教外別伝」にしても同じこと。書物を読んだり、偉い人の話を聴いたりして、つまり、ことばだけで解ったつもりでいても、それは駄目なのであって、直接体験による教義の理解がどうしても必要なので

す。

もちろん、膨大な文字を重ねて著述された仏典祖録の一々の言語の意味を直接体験によって確認することは不可能です。何か一つの修行をからだによって徹底してやりぬくとき、直接体験のない言語表現であっても、その奥に秘められた真意が類推できるようになるのです。「草取り」を徹底してやってみれば、「汗」「太陽」「土」「水」「虫」「清浄」「涼」「影」「冷」……実にさまざまな言葉の真実が臍おちできるし、それを手がかりにして未経験の語彙についても当たらずとも遠からずの類推が可能となります。

今、学校制度が危機に頻しているようです。なぜ、学校が制度疲労を起してしまったのでしょうか。その原因についても、言語の問題が中心にどっかりと存在しているように思えます。学校制度は、昔から「読み・書き・そろばん」を中心に運営されて来ました。つまり、言語と

数字が、学校教育の中枢ちゅうを占めていると言って
も言い過ぎではないでしょう。

それゆえに、言語と数字を正確に客観的に扱
う方法を追求して行くと、人間のあいまいさよ
りもコンピューターやビデオによる方が勝れて
いるのではないか、ということになります。た
しかに未熟な人間が記憶をたよりに教えるより
も、練りにねった完璧に近い内容をビデオに収
録し、それを生徒に見せた方が誤りは少いと言
えましょう。

しかし、教える知識が正確であることと、多
少の誤った知識が含まれていても、教師の人生
観や生きざまを迫力を以て受けとめることと、
どちらが生徒にとって重要であるか、と言えば、
それはもう当然後者に軍配をあげざるを得ない
でしょう。人間は、知識だけでは生きられない
のです。生きる意欲があつてこそ知識が生きる
のです。

今、学校教育が制度疲労を起こしているのは、
一にこのことと関わっています。知識は、より
よき生き方をするための手段に過ぎません。一
番肝腎なのは、よりよき生き方をしたいと願う
意欲なのです。

よき生き方は、モデルの人間が実在して初め
て自分にとって意味を持ちます。歴史上の人物
もモデルにはなり得るのですが、自分が今生き
ている現実の社会に生きている人間を媒介ばいにし
なければ、それは殆ど不可能なことです。観念
だけでは生きる原動力は生じないのです。

それはそうでしょう。釈迦牟尼仏の理想の生
きざまを知識として完璧に学んでも現実の
社会に生きることは出来ません。むしろ、釈迦
牟尼仏の理想化された生き方の知識あしかせが足枷あしかせにな
って、現実社会を生きぬく力を喪失させてしま
うことすら珍しくありません。現実の人間社会
は矛盾だらけです。理想はとかく綻ほころびてしま

がちなのです。よりよき生き方を努めている人は、矛盾だらけの中で綻びてしまう理想の生き方を、怠ることなく縫い合わせて、何とか自分なりに整合性を見出そうと努力している人と言ってもよいでしょう。

いわゆる「面授」は、そのことを問題にしているのです。師の「面」^{かお}は、理想と矛盾の葛藤の中で、それを整合しています。眼が澄み切っているのは得難く尊いことですが、水晶玉のように陰りなく澄み切っているだけでは、面授も面受も不可能です。水晶玉を眼にはめ込んだ木仏^{かぶつ}、金仏^{かなぶつ}と対面していても面授は成就しないのです。その眼底には、現実生活を生きる時に生じるさまざまな矛盾との葛藤のあとかたが沈澱していません。

説得と受容

師が「裏頭より」弟子をみるということは、



つまるるところそのような葛藤を内に秘めたまなざしで弟子をみるということでしよう。いうまでもないことですが「みる」は、「かたる」ことではありません。

人間は、他者に影響力を発揮することを生きがいとする動物です。他者との関わりが一切なくなってしまうえば、モノと同じです。人間ではありません。

他者にどのような手段で影響を与えるか。現代人は、ことばを中心にして相手に影響力を発揮しようとするのが一番多いのではないかという気がします。「かたる」ことがすべてに優先しているようなのです。いわゆる「説得」が幅を効かせていると言ってもよいでしょう。仏教では、衆生を教化するために古来「説教」を重視して来ましたが、これも「説得」の一つのかたちです。

ところが、師が黙って弟子をみ、弟子は黙っ

て師をみて礼拝を行ずるといふかたちで互いに影響力を発揮しあう、いわゆる「面授」には、ことばによる語りはありません。明らかに「説得」とは異質です。「面授」という、師と弟子との関わり方は、言ってみれば、師が支え役になって弟子を暖かく見つめることのほかではないでしょう。黙って対面しているだけで、弟子の方が自らの生き方を発見するのが面授であり、受面なのです。

カウンセリングをこととする人たちは「受容」ということの大切さを強調します。面授は言ってみれば、受容に近いかも知れません。「受容」は、受け入れることです。カウンセリングの専門用語としてそれをを用いる時は「聞くこと」を意味するようです。

受容とはどのようなものかについて、あるカウンセラーは、次のように書いています。

「知りたがりもしない風の子どもに、もっ

と知りたがりなさいと強要して、知識を教え込もうとする「説得」が、ことば遣い^{づか}として、もつぱら「ひっぱり役」の言い方になるわけである。それに対し、子どもの実感はこうだとまず分つてやろうと努めるだけにとどめる。子どもの心の動きを見守っていると、

子どもは確認してもらえた故の充実感をもたにして、思わず知らず次の一步に自ら進んでいく余裕が持てる。「受容」ができれば、常に親は、子の心の発達の「支え役」になり続けることができる。」（伊藤友宣『家庭のなかの対話——話しあえない父親のために』中公新書）

面授と受容は、もちろん同じではありません。しかし、ことばによる説得についてその効果を疑問視する点で、両者には共通点があると言えましょう。

但し、受容は、親と子、或いは師と弟子につ

いて、単に一对一の関係で問題が考えられていきます。ところが、面授は、受容する師や親の背後に、父母未生以前の長い歴史の積み重ねがあることを重視します。そういうものを無視したら面授ではなくってしまふのです。

弟子をみる師のまなざしの奥（いわゆる裏頭）に、矛盾だらけの実人生を生きぬいて来た（釈尊以来の）多くの先人たちの体験が、目には見えない、意識にも上って来ない、伝承として薄い膜を積み重ねるように沈潜しているのです。そうです。面授は、歴史によって受容されることだと言つてよいでしょう。

刹那的な生き方と面授は相入れません。遠い過去から永遠の未来まで、いのちをつないで生きて行くことに価値を認める者のみが、面授の意義とその重み、その尊さに気づくことができます。

庶民に根づく寺参り

ベトナムを旅して

ニューヨーク州立大学教授 伊藤 博

ベトナム社会主義共和国は九州を除く日本の面積と同じで、南北にS字型に細長く延びています。約七千四百万の人口のうち、七〇%以上が農村に住んでいます。特に北部红河デルタと南部メコンデルタに集中しています。ベトナムの北部は日本の田園風景に似ており、首都ハノイは中国の雲南省にまでさかのぼる红河デルタの中にあり、湖の多い静かな街です。特に、ホアンキエム湖上には、文学の神や十三世紀にモンゴルの侵略を撃退した英雄たちを祀った王

山祠があり、ハノイ市民の憩いの中心地になっています。

ハノイの東百キロ、トンキン湾に北ベトナム最大の港・ハイフォンがあります。その北端にある海の桂林と喩えられるハロン湾は風光明媚で有名です。大小数百もの石灰岩が風雨に浸食され、沖の海面に連立し墨絵の様な奇岩となっています。その間を行きかう帆船は山水画になる程です。

「北属南進」と植民地化

ベトナムは約九〇%のキン族（又はベト族とも言う）と五十以上の少数民族から成る多民族の国です。キン族は主に平野部に、少数民族の多くは山地に住んできました。でも最近、平地部の人口過剰を減らし、又山間部の経済開発の為に、キン族も山間部に移住させられてきたそうです。

秦始皇帝の南方征服（紀元前二一四年）にベトナム人のことが記されていますが、ベトナム人の起源は、紀元前四世紀頃、中国浙江省の北部に居た越が楚に亡ぼされ、その一部が今の北ベトナムに移住してきたことに始まると言われています。又、「北属南進」の言葉にも表わされているように、中国朝廷の干渉を撃退しつつ、同時に南方の他民族を支配し、拡大し続けてきました。ベトナム中央部に位置するダナンはイ

ンドネシア系土着民であるチャム人の王国チャンパの首府として栄えていましたが、十五世紀末、南下してきたベトナム人に滅ぼされました。十八世紀半ばにはカンボジア系のクメール王国も征服され、メコンデルタ地域は完全にベトナムに統合されました。征服人と非征服者との混血の結果、現在のベトナム人にはチャム人やクメール人の血と文化が加わっています。

ペリーの黒船が日本に來航してから五年後（一八五八年）、フランス軍艦がダナン港に侵入し、植民地化が始まりました。ダナンと古都フエの間に眺望の良いハイヴァン峠があります。昔からの軍事上の要塞で第二次大戦中、日本軍も通ったことがあります。

一九七五年四月、北の軍事力によって統一され、長い外国による支配が終わりました。旧南ベトナムの社会主義体制への編入と人々の再教育は色々な形で行なわれてきました。元サイゴ

ンと呼ばれたホーチミン市にある旧大統領官邸は統一会堂と呼ばれ、迎賓館として使われていますが、同時に、旧ブルジョアがいかに人民とかけ離れた贅沢な暮らしをしていたかを見せる教育の道具ともなっています。又、米軍の戦車や大砲を展示した戦争犯罪館や、対照的に立派なホーチミン記念館が目を引きまます。

ハノイ市

ベトナム国家の形成は中国を単に模倣したのではなく、王権と族長それに農民とが、中国と朝貢関係を保ちつつ、政治・経済・文化の面でベトナム独自のものを築きあげました。他面、日本同様、古代ベトナムは中国の制度を大規模に摂取してきたことは自明の事実です。千年以上も中国の支配下にあったベトナムでもハノイが一番その影響を反映しています。ハノイ市内にある文廟は十一世紀に建てられたベトナム最

古の儒学に基づいた大学ですが、その構内にある小判形の屋根瓦を葺いた美しい奎文閣には官吏の登龍門であった科挙試験に合格した者の名前が彫ってあります。十五世紀から三百年間もの間行われたテストに受かったたくさんの名前は八十二もの石碑に彫ってあり、その一つ一つは異なった顔をした亀の石台の上に乗っているというユーモラスなものです。これらの高級官吏が安南王朝の中央政府を取り仕切っていたわけですが、地方の村落では国の農地を村役人に委ねていました。村の長老も一般農民も封建制の中では村の集りに参加しましたが、連帯責任の方が重く、内には一致団結、外には無関心と閉鎖性を固持しました。ベトナム社会主義政権の下、もはや村の実力者は地主や儒学者ではありませんが、この伝統的な村意識が国家建設の妨げにもなっております。

安南王朝は一〇〇〇年から一九四五年まで四



朝もの長い間続きましたが、その中心地は最後のグエン朝を除いてトンキンでした。従って安南仏教を物語るベトナムの大乗仏教の遺跡はハノイ近郊に散在しています。その代表的なものの一つが一〇四九年に建てられたハノイの延祐寺（別名一柱寺）です。一本の柱の上に建てられている木造の一風変わった寺で、その由来は先の太宗が夢の中で、蓮華の上に乗った観音を見た。そして、一人の子供を夢の中でさすけられたそうです。あるいは、観音が太宗を蓮華の上に招いたとも言われています。この夢を見られたことを感謝して、蓮華に見たてた寺を建てられたそうです。

元「フランス極東学院」の建物にあるハノイ博物館には種々の仏教遺品が展示してあります。十一世紀の仏像はベトナム女性を型どったかのように、しなやかな体形で腰まわりが細くくびれているのが印象的です。他にドンソン朝

の銅器は高度の技術をしのばせます。銅鼓はもと銅釜として使われていましたが、後に葬式、儀礼や雨乞いなどにも使われ、幾何学文様や鳥の羽をまとった人物なども彫ってあります。銅の棺や舟形棺もあります。さらに、安南焼きの陶磁器は日本でも出土されているようで、十六世紀に栄えたホイアン日本人町と共に当時ベトナムと交易のあったことを物語っています。

ホーチミン市

ホーチミン市内北部にある永厳寺は修道僧も居る大きなお寺で、たえず参拝客で賑わっています。特に七重の塔は大きく、各層には仏像が安置され花が添えてあります。その塔の反対側の境内には京都で鑄造され一九六九年、鶴見の總持寺より寄贈された「平和の鐘」がひっそりとつりさがっています。鐘には「日本の佛子こ

ぞりて捧げる。平和の鐘はベトナムに鳴る」と彫られています。鐘堂の左中央は本堂で入口の「万古弗諼、永巖家風、千秋番火」の額がこのお寺の心を物語っています。本堂の裏側には、線香や御供え物を持った老若男女がお祈りしています。広い境内では、小鳥屋から買った檻の中の小鳥をお祈りの後、ふたを開けて逃がしてやり、功德をつむ姿も見えます。

ベトナムの旧暦の一日と十五日に近所のお寺にお参りに行く週間は社会主義政権の下でも行なわれています。三十^{セツ}もある中国式線香を焚き、年寄りには長生きや健康を、商人は商売繁盛を祈ります。チヨン中国人街にはたくさんのお寺があり、天后聖母を祀るキエンハオ寺（別名・天后宮）は螺旋状の一^ルもある線香が無数に天井からつり下がって煙でもうとうとしています。お寺に行かない人たちも店頭でお祈りするのが日常行事になっています。但し家の中に

仏壇は見られず、亡くなった家族の写真が飾ってあるだけです。葬儀にはお坊さんを家に呼んでお経をあげることがありますが、都会ではそうしない家族も多くあります。仏教の葬儀は東南アジア特有で派手です。死者との関係で白黄赤等の異なった色の鉢巻をした子供たちが墓地に向かう行列の先導となり、黒か茶色の喪服の大人たちが「千秋永別」とか「四方極楽」と書いた派手なノボリを持って、静かに歩きます。そして最後に柩を担いだ男たちが土葬の地に向かいます。遺体は三年後に掘り出され、古い墓地に移されます。

永巖寺で若い修道僧に英語を教えるグエン・カオ・ヒーさんも一九七五年以降の社会主義教育を受けた一人ですが、ベトナムの宗教の自由はそれ以降確立されたとのこと。共産党は人々の信仰を完全に禁止すると庶民を苛立たせるため、社会主義のイデオロギーに著しく反さない

限り許しているものと思われれます。そして僧侶は自分たちで食事を作ったり、信者からの供え物に頼り、お経の勉強と念仏に努めています。

市の北外れにあるホーチミン歴史博物館には青銅の観音像が展示されていますが、頭上に化仏を乗せ二本ないし四本の臂（かいな、うで）にして、上半身が裸で、中国南部に栄た大理国（十―十三世紀）の観音像にも似ていると言われています。さらに、二世紀に南部ベトナムからカンボジアにかけて勢力を誇った扶南国の貿易の中心と考えられるオケオ遺跡からの発掘品もたくさんあります。インドが地中海の諸国と交易した品々、特にローマ帝国の遺品や中国の後漢時代の鏡を見ると、ベトナムが海のシルクロードとしても活躍したことが窺えます。

古都フエとチャム文化

フエ市はフォン川の川辺にある静かな落ち着

いた古い都です。ここにある王宮にはグエン王朝の九帝王が住みました。フエ出身で越南高等仏教院に勤めていたホアン・トロン・ソウさんは横浜善光寺留学僧育英会の援助でベトナム仏教の研究を日本でしている方ですが、彼の弟さんにフエを案内してもらうことが出来ました。

グエン朝のジャロン帝が一八〇九年に建てた国旗掲揚塔が目印の王宮がベトナム王朝と文化の遺産です。中国の紫禁城を真似て作った正面の大和殿は帝王への拝殿です。そこに入る石畳は三段で、位に応じて、貴族が並びました。拝殿の内部には、グエン朝の即位に使った金箔の椅子と台が置いてあります。その左裏のお城の形をした建物は王朝の菩提寺である顕臨閣であり、内部には歴代の皇帝の幟と車が展示され、庭には各王の偉大さや善徳・輝き等をシンボルで彫った巨大な青銅の鼎が九つ置かれています。いずれも王朝を正統化し、不動なものとする

る祈願を表しています。

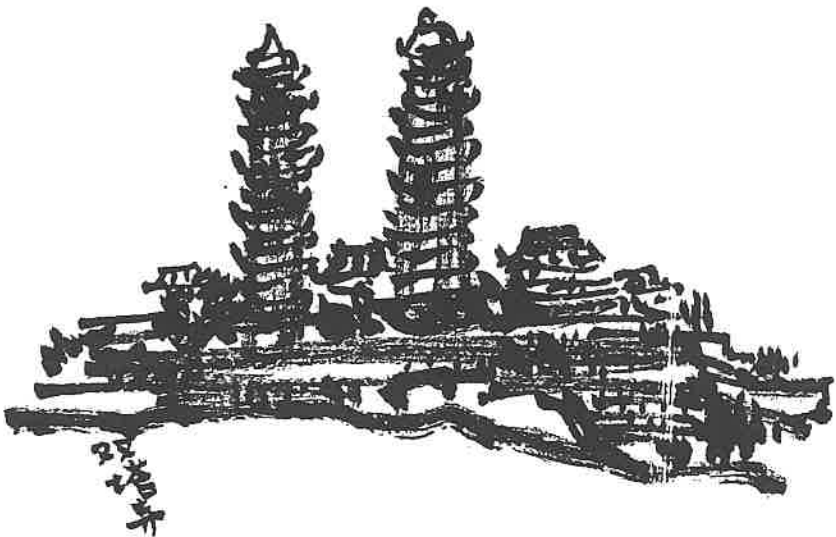
しかし、フエを中心とするグエン朝の傑作は周辺にある六代の霊廟にあります。皇帝の在世中から造られ、権力と統率力を示す廟は三つの部分から成り立っています。先ず入口に一番近い所には、皇帝の功績をたたえる石碑が立ち、二番目に祭壇と寺院があり、最後にお墓があります。又、必ず、極楽を象徴する蓮池が作られています。特にトゥドウック帝廟（二八六四年）の池は有名で、門を入ると、正面に大きな蓮池と釣殿が見え、池の左手に皇帝を祀る大きな寺とその隣に石碑のある中庭、その奥にお墓があります。次に、カイディン帝廟は西洋風で知られています。山の急な丘陵を利用したこの廟に登るには長い石段を使いますが、その手すりには竜が刻まれ、階段の上の広場には馬や象や番人の石像が廟を守っています。一番高い所の墓の内部には金箔を捺した青銅製のカイディン帝

王の像があり、壁や天井は磁気やガラスでステンドグラスのように飾られており、目を見張る程の豪華さがあります。チュウチ帝の廟ははるかに小さく質素ですが、偶然、ベトナムの尼僧の一行が訪れており、このグエン廟が一層引き立って見えました。この廟のフォン川の対岸には高さ二十一メートルもある七層の美しい八角形のテイエンムー寺が見えます。一番上の階には釈迦牟尼仏像が安置されていますが、中心となる釈迦は青銅の仏像です。この仏像はタイソン党を破りグエン朝のジャロン帝を助け出したポルトガル人により造られたそうです。

古都フエはユネスコの世界文化遺産に指定されており、その中心の安南文化は中国の強い影響によるものですが、ベトナムのもう一つの文化はインドの影響の濃いチャム文明です。チャムパ国に遺跡はベトナム東海岸にそって散在していますが、遺構はレンガの積み上げで建てら

れ、塔堂（カラン）がその特徴です。カンボジアのクメール塔堂に似ており、砂岩の彫刻もかなり残っています。ダナン市内のハン川の畔にあるチャム美術館は世界的に知られ、チャンパの信仰したヒンドゥー教の神シバの石像など時代別に七ないし十四世紀のものが展示されています。例外として、ドン・ドゥオン地方からは青銅製の六ないし九世紀の作と思われる美しい仏陀像が発見され、これは南インド又はスリランカのアヌラダプラ期のものに似ているという人もいます。チャンパの諸王がヒンドゥー教に帰依したなか、八七五年、インドラヴァルマン二世が熱心な大乘仏教徒になったことが仏教遺構の起因になっていると思われる。高い椅子に坐り両手を両膝の上に乗せた仏像をチャム美術館で見ることが出来ます。

ベトナムはラオスとカンボジアと共にインドシナを構成していますが、インドとシナ（中国）



の両面の影響を受けていることを意味します。ベトナムの安南文化とチャム文化はその一例ですが、ベトナムの仏教は日本同様大乘仏教であり、ラオスやカンボジアの小乗仏教よりも親しみぶかいものです。

カオダイ教

形式的であれ、八〇%のベトナム人が仏教徒だそうですが、十六世紀にフランシスコ派宣教師によって伝道されたカトリックは南ベトナム社会を中心に根づき、今でも三百万人程の信者がおります。土曜の夜や日曜の朝など、ホーチミン市の統一会堂などでミサに参加する人々をたくさん見かけます。

さらに、教義のはっきりしないホアハオ教やカオダイ教のような新興宗教も南ベトナムに広まっています。特にメコンデルタに始まったカオダイ教は三百万の信者がいると言われています。

す。

一日四回行なう儀式には神として上台に坐る男女一人ずつの他に、九つの位に分かれた信者たちがバンドをかなで、シンバルが鳴りひびくなか、土下坐して礼拝します。建物のあちこちに描いてある聖なる「目」が見下ろす本部には観音様やマリアの像が置かれ、有名なベトナム人やレーニン、ビクトル・ユゴーそしてジャンヌ・ダルクらの写真が飾ってあります。混合宗教のため、仏教の業と輪廻、道教の神秘、儒教の倫理、カトリックの儀式を取り入れ、さらに道教や回教までも混ぜた奇妙なものです。教義はこれらの歴史上の預言者の生霊を通じて、神や死者とも連絡がとれると教えています。

カオダイ教は一九二六年、当地フランス植民地政府の公務員、ノー・バン・チューが始め、植民地主義に反対していたインテリや上層階級の間にも広まってゆきました。又、農民の中にも

植民地大農園主に農地を取られてしまうことへの反感から信者になりました。しかし、ベトナムも統一され社会主義になった今、信者の数はかなり減ったそうです。

ベトナムの社会経済

ベトナムは年間一人当たり三百ドルの国内総生産しかない貧しい国です。工業化と近代化を目指して、大統領や首相等の幹部の世代交代を計って、一九八六年以来の改革・開放路線（ドイモイ）を推進してきました。市場経済の導入や積極的対外開放の結果、一九八九年頃より成果が上がり、高度経済成長を達成しましたが、最近のアジア通貨不安定の悪影響が徐々に発生し、一九九七年以降外国投資の伸び悩みや輸出のにぶりが見られます。主要産業である農水産業や原油の輸出を活性化すべく国際化を進め、一九九五年には東南アジア諸国連合に、又アジ

ア太平洋経済協力にも加盟を認められ、中国とも友好関係を回復しました。さらに日本やアメリカをはじめ西側との国交改善の結果、援助も増えています。特に、日本はベトナムの最大の貿易相手国と援助国になりました。日本政府の開発援助の三分の一が対ベトナムに当てられています。

ベトナムの経済発展と共に汚職や麻薬それに貧困も悪化しました。一九九七年中頃より、地方役人の腐敗や生活困窮から農民暴動も散発的に発生しています。共産党一党体制を堅持しているベトナム政権は軍イデオロギー畑出身の党書記長を選び、反体制思想の抑圧と「和平演変」を取り締まるため警戒を強め始めました。又、経済復興よりもベトナムの伝統的思想や精神生活を重視する方向に向かっています。これが仏教をはじめとするベトナムの宗教界にどのような結果を及ぼすか注目する必要があるでしょう。

詩と禪

成願寺住職 山口晴通

今回、はからずも、この地において、皆様にお目にかかる御縁を得ましたことを、非常に光榮に存じます。

私は、約半世紀前に出家をしました。以来、師匠のもとでの修行を基本として大本山永平寺をはじめ、各種僧堂の行事に参加しました。

また、駒澤大学におきまして、永年、禪学を中心に研究してまいりました。

そこで本日は、私のこれまでの体験を通しての事柄が、日夜、参禪を心がけている皆様に、

少しでも御参考になれば、有難いことと思えます。

皆様には、すでに御承知のことではありますが、禪と中国の詩とは、非常に密接な関係にあります。

それは本来、詩そのものが、国家や民族を超越して、それぞれの言語生活の発達につれて、自然発生的に成立したものと思われま

す。それは、時には自然界を恐れる、祈りの詩うたであり、愛を告白する心の叫びでもあります。

ヨーロッパにおける、各民族の伝承せる詩につきましては、皆様よく御承知のことと思います。

日本においても、イギリスのシェークスピアをはじめ、バイロンやローズワース、アメリカのエマソン、ホイットマン、デイキンソン等の詩人の名が、よく知られています。

そこで、中国の例をとりますと、実に紀元前十一世紀から、紀元前六世紀におよぶ多くの詩から、三百首を選定したものが『詩経』として成立しております。編集されたのは、紀元前四七五年とのことです。

伝える所によりますと、古代中国では「採詩の官」という役職がおかれました。

王様から命令をうけた役人が、各地方に派遣され、その土地で歌われている民衆の詩を採録することにより、政治状況の適不適や、庶民の生活の幸不幸を判断するための、参考資料になりました。

それほど為政者にとつても、民衆における詩と生活とは、表裏一体となっております。

こうして、いかなる民族でも、詩の歴史は伝承され、現代に到達したといえましょう。

そこで本日は、私の感じた「詩と禪」について述べてみたいと思います。

まず、「禪と中国の詩」についての関係であります。

中国では、西紀六一八年に唐の王朝が成立しました。

その治世三百年間において、中国の詩は、内容、形態ともに完成されました。

李白、杜甫をはじめ、有名な詩人が、満天の星のように輝き、多くの秀れた作品を残しております。

実践の面からも、この中国の詩の完成と、禪が思想の面からも、飛躍的に発展した時期とが、一つの時代に遭遇したことは、お互いに幸



せであつたと言えましよう。

従来、中国の文学を専攻する人達は、文字通り、その文学的方面のみを強調し、禪文学と呼ばれる、禪門関係の詩文には、きわめて冷淡でありました。

一方、禪門の歴史や思想を研究するグループは、もっぱら超世間的な奥義を究めんとして、中国の詩文、または一般社会の文学は、とかく無視をしてきました。

この事情は、当然と言えば当然であります。しかし、将来は、この両者を関連させることにより、文学的視野も開け、より深い禪の精神も、研究することが可能であると思われまます。

これは、二十一世紀に向かつての、大きな課題であります。

例えば玄奘三蔵は、唐朝二代皇帝の六二九年インドに渡り、多くの經典を将来して長安に帰国しました。

そして、皇帝の絶大なる庇護のもと、般若經をはじめとする、多くの經典を翻訳いたしました。

唐王朝の建国当初におけるこの事實は、その後の禪門にも、大きな影響を与えております。

中国における禪は、不立文字を標榜しながらも、達磨大師より三祖僧璨に至るまでは、楞伽經を所依の經典としました。

四祖道信に至って、般若經を所依の經典としましたが、これは禪の思想界における一大転換であります。

よく知られているように、五祖弘忍は、七百人の門弟の中より、達磨正伝の佛法を伝授するにあたり、弟子達に各自の所得した禪にたいする感想を、「詩」に托して呈出させました。

この際、「文章」ではなく、短かい「詩」によって表現させたことに、大きな意義があると思えます。

時に弘忍門下で、嗣法の弟子であると、もつとも囑望されていた神秀上座は、自分の悟りの気持ちをおのづかに表現しました。

身是菩提樹 身は是れ菩提樹

心如明鏡台 心は明鏡台の如し

時時勤拂拭 時時に勤めて拂拭せよ

莫使有塵埃 塵埃を有らしむること莫かれ

結論的に言えば、後述する六祖慧能の詩が、

五祖弘忍によって印可されたため、神秀上座の詩は、第二義的になるものとして、とかく軽視されております。

しかし、私は、悟りに到達するための一つの方便説として、立派な詩であると思います。すなわち、私達の体は、本来、悟りを開いている菩提樹であり、心は天地のあらゆるものを写し出す、素晴らしい鏡である。

ただ、時として人は、さまざまな煩惱により、美しい心の鏡も曇ってしまうことがある。

そのような時には、鏡を磨くのと同様に、自分自身の心を磨けとの指摘であります。

この禪思想は、漸悟と呼ばれ、五祖弘忍の住した黄梅山よりも北方、洛陽を中心に宣布されたので、北宗禪と称されています。

それに対して、慧能の詩は次のようになっております。

菩提本無樹 菩提もと樹なし

明鏡亦非台 明鏡も亦台に非ず

本来無一物 本来無一物

何処有塵埃 何れの処にか塵埃有らん

慧能の詩によれば、私達は本来が悟りの姿、悟りの心情そのものである。

したがって、塵埃を留めようにも、留めるべき何物も存在しない。との立場であります。

これは確かに、私達の心の眞実を表現したものと云えましょう。

この思想が、やがて禪の根幹をなすのですが、

黄梅山より南の方に発展したので「南宗禪」と呼ばれました。

また、神秀上座の「漸悟」にたいし、「頓悟」と呼ばれる所以です。

この六祖慧能による「頓悟」、すなわち、事物を直観的に把握する坐禪觀が、現今のアメリカ、ヨーロッパの参禪者達に受容されているものと思われます。

私は一九九七年十月、五祖弘忍の住した黄梅山を訪れました。

天候にも恵まれ、白い岩石と紅葉の山肌は、いかにも聖なる山と言うイメージでした。

まず、五祖弘忍の真身像に読経礼拝をしました。

その後、五祖が親しく説法をした講経台にて、往時を想像致しました。

また、何より私に強い印象を与えたのは、確房跡、すなわち米つき部屋でした。

伝える所によれば、五祖は慧能をはじめて相見した時、この人物の非凡なることを直観的に認め、意識的に米つき部屋にて、作務のみをさせました。

慧能は小男だったので、腰に重い石をつけて、お米をついたと言われています。

私は、この米つき小屋に入り、慧能が腰に下げていた石に触った時の感激は、終生、忘れることができません。

この部屋で、ある夜半に五祖は慧能にたいし、禪宗六祖としての印可証明を与えました。

他の多くの弟子たちの、羨望と嫉視を避けるため、五祖と慧能とは、密かに山を降りました。

やがて、長江の船着場に到着すると、今は六祖となった弟子の慧能を舟の中に坐らせ、五祖自らが竿をとって、対岸に渡したと伝えられています。

こうした禪門の師資相承の様子は、黄梅山を

参拝した私には、非常に印象にのこり、自然に次の詩が完成されました。

訪黄梅山 黄梅山を訪う

半夜法身さぶ篙小船 半夜法身小船に篙さし

曹溪命脈密流伝 曹溪の命脈密みつに流伝す

講經台上望南北 講經台上南北を望む

妙偈方親心豁然 妙偈方に親しく心豁然たり

私は、五祖弘忍が説法をした講經台から、更に上の山に登りました。

やがて頂上近くになると、北方の山岳も、南方の平野も見渡すことができました。

風景の南北と共に、はからずも神秀上座と六祖慧能との南北両禪を感じた次第です。

今こそ、神秀上座の詩と六祖慧能の詩とは、

私にとつては一体となり、本当に言語以前の親しさを体験致しました。

このようにして、歴代の祖師達は、各自の到達せる悟りの心情を、文章で表現すると同時に、

文章にては表現不可能な究極の見地は、詩によつて表現しております。

道元禪師も瑩山禪師も、この点は全く同じであります。

したがって、私達は従来、中国の詩、特に禪詩と呼ばれるものを中心にして、歴代祖師の思想を研究してきました。

以上は、中国の詩を中心にして考察してきた一例ですが、日本古来のものとしては、和歌があり俳句があります。

日本の僧侶は、中国の詩と共に、和歌により仏教思想を表現しました。

歌僧として有名な西行法師は、次のように歌っております。

ねがわくは 花の下にて 春死なん

そのきさらぎの 望月のころ

人生の無情を感じ、諸国を旅して到り得た心は、ついに釈尊の涅槃の日を、自己の臨終の日

として、願望するようになりました。

生も死も、全く仏の心に到達したと言えるでしょう。

良寛さんは、禪詩も沢山残していますが、次の和歌は殊に味わい深いと思います。

良寛に 辞世あるかと 人間はば

南無阿弥陀仏と いふて答へよ

良寛さんの、到り得た心情とすれば、南北の両禪どころか、禪も念仏も一つになっているとの、尊い悟りの境涯であると思います。

この良寛さんの時代になりますと、禪に参じた女性達が、和歌と同時に俳句により、悟りの道を表現した作品がみられます。

これは、日本の禪における大きな特徴と言えるでしょう。

最近、アメリカの一部の人達に、俳句が流行していることを聞きました。

先月のこと、私は偶然にも古本屋にて次の本

を見つけました。

それは W・C フラナガン氏 (William C. Flanagan. Road to the Deep North) による

松尾芭蕉、『奥の細道』の翻訳本でした。

私達、日本人にとり、日本の詩歌が、外国語に翻訳されることは、本当に嬉しいことです。

六祖慧能の詩で説明したように、直観を重んじる禪の境涯を、五・七・五の短かい定型詩によって表現することは、素晴らしいことだと思います。

皆様はどのように感じられるでしょうか。

かつて私が学生時代、鈴木大拙先生の講演を聞きました。その中で、非常に印象に残っている言葉があります。それは、「現代の若者には詩がない」と言うお話しの一説でした。他に、どのような内容の講演であったのか、今はすっかり忘れてしまいました。

しかし、『ボエム』がないとの言葉は、今でも

はつきり覚えています。

人間が人間として、よりよく生存していくためには、「詩とロマンの心」とは不可欠のように思われます。

洋の東西を問わず、新年を迎えますと、人々は新しい志を、いろいろな形で表現致します。

私は中国の詩の形により、一九九八年の元旦に次のように表現しました。

今朝観妙接新年 今朝妙をみょう観じて新年に接す

一錫遊空慕昔賢 一錫空に遊くうんで昔賢を慕う

南北東西三隻襪 南北東西三隻の襪べつ

修来證去放浪禪 修し来り證し去る放浪禪

右の詩の大意は、私は新年を迎えるにあたり、これまで以上に歴代のお祖師様方の行迹を学びたいと思います。

そのために私は、東西南北、何れの所にも、縁にしたがって出かけることでしよう。

一言でもって、私の禪の家風を表現するとす

れば、「放浪禪」と定義することができます。

どうか、禪センターの皆様も、尊い自己の参禪を通して、その心情を、それぞれの詩によって表現されますよう、心より念願する次第です。

終わりにあたり、皆様とお目にかかる、この尊いご縁を与えて頂いた、善光寺黒田先生に深く感謝申し上げます。

○

今回、アメリカの禪センターを訪問しての感激を、私は帰途、太平洋上の機内にて、次のような一詩にまとめました。

訪亜米利加禪堂 アメリカの禪堂を訪う

拈来公案共論禪 公案を拈じ来って共に禪を

論じ

碧眼僧徒衣鉢伝 碧眼の僧徒衣鉢を伝う

誰識往時開教志 誰か識る往時開教の志

坐堂窓外聽清泉 坐堂窓外清泉を聴く

禅の心を米国へ

—— 山口晴通老師らがロスを訪問 ——

横浜善光寺育英僧 遠藤博因

文化のモザイクに根付くZEN

ニューヨークに次ぐアメリカ第二の都市、ロサンゼルスには百以上の人種、言語、文化がモザイク模様のように広がっている。日米文化会館の広場いっばいに広がる盆踊りの練習風景には、日系人だけでなく、白人、ヒスパニック系の人々も結構楽しく輪の中で興じているのが目にとまる。日本とはひと味違った盆踊りの光景は、ロサンゼルスの象徴的なモザイク現象の一端まである。

住宅街の中に禅センターと書かれた看板を見ることが出来る。アメリカ社会に禅を伝えた先達者、鈴木大拙博士、千崎如玄老師をはじめ多数の指導者の遺徳によって、今日特に白人社会に“ZEN”という三文字で広く敷衍された禅仏教。これらはロサンゼルスの文化に厚みをもたらずモザイク構造の一面である。

ロサンゼルスという街は、異質なものの共存共栄を包容し、新たなものを生み出してゆく可能性に満ちた都市であり、そんなエネルギーを感じさせる街でもあるのだ。

このほど曹洞宗の山口晴通老師（神奈川県成願寺住職、駒澤大学講師）は、黒田武志老師（横浜善光寺住職）の案内で、そのようなダイナミズムにあふれるロサンゼルスのリトル東京にある禅宗寺（曹洞宗の北米開教総監部が置かれている）、そしてロサンゼルス郊外の山の中腹に二十万坪の敷地を有する禅苑、禅マウンテンセンター陽光寺で「禅と詩」と題して講演された。ご子息、勝隆君も随行し、講演とともにロサンゼルス禅センター佛心寺、新設の禅センター孤雲寺等を歴訪された。

七月二十二日、一行はロサンゼルス国際空港に到着。その足でダウンタウンに隣接する禅宗寺へ拝登。法堂で三拝の後、隣接の建物に事務所を構える曹洞宗海外開教センターを訪れ、所長の奥村正博開教師、横山泰賢開教師の歓迎を受ける。同センターは一昨年、禅宗寺の北米開教七十五周年を機に設立され、北米における宗

務庁の出先機関として全米の曹洞宗寺院、禅センター間の連絡業務と活動援助を行なっている。

所長の奥村老師は自ら各地の禅センターで行なわれる摂心会へ出向き、月の半分以上を全米各地の禅センターで提唱されるという忙しさである。

さらに一行は黒田老師の実兄である故前角博雄老師の開創されたロサンゼルス禅センター佛真寺を訪問した。住宅街の半ブロックの敷地を有するこの禅センターでは、四十人あまりの人々が隣接のアパートに住み、朝晩の坐禅に参ずるといふ、目的をともにしたサンガ（僧伽）を形成している。その後、このセンターからさほど遠くない住宅街の中に開かれた禅センター孤雲寺を訪れる。

約一年前、前角老師の法嗣の一人、ウィリアム如元師の発願により開創された禅堂は、八月

末に開単式を迎える。如元師並びに白人の弟子がきれいに頭を剃り上げ、作務衣、絡子姿で出迎えてくれた。ここでは八十年ほどたつ大型の民家を購入し、完全に修繕工事を行ない、屋根裏部屋を禅堂風に改築、白壁に化粧柱を施し、正面にニスの光沢美しい祭壇が設置された空間は、坐禅堂特有の緊張した空気を感じさせた。

二十四日はダウンタウンを出発。砂肌の大地を東へ向けて走ること一時間半、さらに南はサン・ハッシントン連峰へと連なる山道を小一時間走り、アイデルワイルドという小さな村へ辿り着く。翌朝、この村から二十分程山へ入り、講演会場の禅マウンテンセンターへ向かう。

一行は御開山である故志保見道雲老師（神戸・八王寺）及び開山故前角老師の墓前で詣塔諷経を勤めた。その後、仏殿、開山堂で一坐の諷経。白人の参籠者が如法に読経し、鐘や木魚を撞く光景には全く違和感がない。現在、この

禅センターは前角老師の法嗣、イギリス出身のチャールズ天心師と妻のアネ清泉尼によって運営されている。今春、夫婦そろっての晋山式を行なったことでも知られる。

ここでの参禅修行は禅門の規矩に従い、夜明けとともに起床し坐禅、読経を勤め、日中は作務をし、薬石（夕食）の後また坐禅を組むという一日である。

山口老師「禅と詩」について講演

午前十時から殿鐘の音とともに黒田老師の導師による諷経が坐禅堂で一坐厳修される。木魚の歯切れのよいリズムに合わせて、英訳による『参同契』が読経される。この後、黒田老師が今回の講演の機縁について話され、山口老師はアメリカで禅を修行する人々の前で話すご縁をいただいたことに感謝する主旨を述べ、「禅と詩」について講演された。

まず山口老師は、詩そのものについて、洋の東西を問わず、国家や民族を超越して、それぞれの言語生活の発達につれて自然発生的に成立する。そして詩は時に自然界を恐れる祈りであり、愛を告白する心の叫びでもあり、深く我々の感情表現や実生活に根ざしていることを論じた。

さらに漢詩と禪の結びつきについて、神秀と六祖慧能の偈を引用され、同じ修行の境地を詩によって表現したけれども、六祖慧能のほうが禪的立場から物事を直感的に把握していることを説明された。最後に、学生時代に鈴木大拙博士の講演で聞いた「いまの若者には詩がない」という言葉がいまだに心に残っていることを語られ「人間の向上に詩とロマンの心は不可欠である」という言葉をもって講演を締めくくられた。

質疑応答では、詩というものは習うものか、

それとも坐禅をしていて、時がくれば浮かんでくるものか、詩が参禅修行の場において古くから使われていることを再認識した、また寒山拾得について説明を請われるなど、聴講者の意識の高さが伺われた。

二十六日から山口老師は禅宗寺本堂で、日系人の方々を対象に講演された。曹洞宗の北米開教の歴史は、先の大戦以前にさかのぼる。移民第一世の方々が幾多の苦難の中、心の拠り所として守り抜いてきた寺院である。現在も二世、三世そして新一世と呼ばれる方々を中心に、日系人の信仰の場として、葬儀、年回法要はもとより、お盆祭り、坐禅会、文化教室等のコミュニケーション活動が盛んに行われている。

放浪禅を説く

漢詩の手ほどきも

黒田老師は三十三年前、当時開教師だった実

兄前角老師を頼って渡米し、禅宗寺の坐禅会の指導に当たった思い出などを語られた。山口老師は、ここでは自身の体験を通して、詩に親しむ人々との交わりの中で感じ取った喜び、そして自作の漢詩を例にとり、詠むだけでなく作る楽しさの実践的な手ほどきをされた。

また中国禅宗の五祖弘忍が六祖慧能に印可証明を与え、両者とも密かに山を下りた逸話の中で、自身が実際にかの地・黄梅山を訪ねた時の境地を詠み、禅門においては各自の到達した悟りの心情を究極の詩によって表現してきたことを説かれた。

聴講者の質問にも丁寧な答えながら講演は進められた。詩吟を学んでいる方々からは、専門的な韻や平仄についての質問がなされ、時代を反映してか、コンピューターを用いた漢詩作成の可能性について質問が飛び出したりした。山口老師は、そのようなことも可能であるが、詰

まるところ心が入っていないものになってしまふと断言された。

最後に、新年の所感を詠んだ次のような自作の詩を紹介し、自らの禅の家風を「放浪禅」と定義され、歴代の祖師方の行履を学ぶためには、東西南北いずれの地にも縁のあるところへ出かけるでしょうという言葉で講演を締めくくられた。

今朝観妙接新年

一錫遊空慕昔賢

南北東西三隻菴

修來證去放浪禪

（今朝妙を觀じて新年に接す／一錫空に遊んで昔賢を慕う／南北東西三隻の菴／修し來たり證し去る放浪禪）

(目 的)

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

(派 遣 先)

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)
"923 S.Normandie Ave LA. CA. 90006 197SA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
"Box 197, Mt. Tremper, NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

(派 遣 期 間)

平成12年4月より1年間

(給 費)

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

(提出書類)

1. 論文 (次項による)

○ 論題

- ① これからの国際興隆と仏教の役割
- ② 世界平和と仏教徒の誓願
- ③ 留学僧として私はこれを学びたい
- ④ 異文化の中で仏教を学ぶ

いずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上 (A4版タテ書き)

2. 保証人と連署した願書 3. 卒業証明書

4. 履歴書 5. 推薦書 6. 健康診断書

(募集人数)

平成11年度 2～3名

平成11年12月10日、事務局必着のこと

(発 表)

平成12年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号

TEL. 045-845-1371 FAX. 045-846-2000

第 16 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成12年度・2000

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

禅院での体験

アンゲリカ・ゼンジョー

禅定——仏陀たること

我々は休養を取るために坐禅をするのではない。勿論、必要かつ求められるべきある種の休養はあるが、しかし我々の坐禅は力を得ることである。我々は努力をする。我々は仏陀と相見することを望む。その仏陀は、まさに我々と共に坐している。仏陀が坐するが故に我々も坐しているのである。我々は仏陀を完成させ、完全

ならしめたいのである。坐禅を通じて我々が行うことは、まさにそのことなのである。しかし、何よりも先に、我々は我々と共に坐している仏陀がいるということを知る必要がある。内部にこの確信を持つには、時間を要する。それは我々の努力や多くの営為（つまり問い掛けや疑問や誤りがなされ、深い矛盾での喪失などであるが）を必要とする。しかし、それにも拘らずなされる。（または、意識的になすことを拒絶する）。

それによって時間が経って眼は澄み、やがて、我々がそうであるから、坐している仏陀を観るようになるのである。そして、我々の凡ての努力が、肉体的にも、精神的にもそして全方向において、我々が認識可能な凡ての次元において、完全にこの仏陀と適合一致することになるのである。そして、時として他者と、そしてまさに「仏陀」だと思いが、と相見することを忘れてしまうことがある。そして「我ではない」（無我）状態が実現する。

そして我々と凡てのものが、まさに区別がなくなる。「我でない」「私自身の外の仏陀や全世界が直接的に実存となり、我々の坐蒲の上に坐するのである。このことは、まさに「力」が必要であることの証明ではないだろうか。しかしいかなる種類の力なのだろうか。肉体的か、精神的か、私にとってある種のエネルギーのようなものは、私の体験におけるあらゆる種類の実践

に対する強い願望や仏道における自信の増大と共に起るものを通して作り出されるのである。そして、そのエネルギーは、我々が鐘を鳴らし、経を誦し、献香する時に使われ、そして発生する力とまったく同じものなのである。

作務——法界に跡を残さず

寺院の生活の中における我々の凡ての行い、凡ての仕事、それぞれの活動は、「足跡を残さず生きる」との意味である。「淨行」又は「正しき行い」と言われる実践である。このことは道元禪師の『坐禅箴』の中で、美しく述べられている。

「水清んで底に徹って魚の行くこと遅し。

空闊くして涯りなければ、鳥の飛ぶこと杳々なり。」と。

そしてまた同様に坐禪と作務の相関関係が示され、それは坐の瞑想の継続として述べられるのである。上述の態度をもつて行うことは、仏法、僧への帰依と同様なる我々の純潔を継続することを意味している。

それはまた、我々が発生している事柄について、あれこれ思慮をめぐらし、何か意見を述べたり、何か観念したりすることなく、完全に只管に為すべきことを作すことを意味している。

「お、木々の葉に輝く太陽の光の何と美しいことか」とかその類の肯定的なことでもなく、また「私は今ここで何をしているのだろうか。こんなことは何の意義も価値もないことだ。家に帰った方がましだ」というような否定的なことでもない。そのような判断も捨てて、我々の全身心を挙げて完全に行う。これが行動における集中である。散漫になることなく、罣礙もなく、この一瞬の生における凡ての部分、凡て

の種類のものを行うことであり、自身を他の側に移して、種々の思慮をめぐらさざることである。信ずることなく、あれこれそれ以上の自己の判断によつて不必要な行動を取らざることであり、それは我々の生活をあれこれ思いわずらわれないことを意味する。そのようにして我々は未知なるものを解明し、そして(願わくば)我々の妄想を超克することなのである。それは実に単純に聞こえる。一度、我々がそれをいかに感じ、何をなすべきかを知れば、我々の頭脳を状況にいかかに注意してめぐらすか、いかにして我々を自らの身体に戻すかがわかる。我々の感覚の覚醒を我々の触れる対象に戻すことを通して、身体は動くがままに呼吸は出入のままになされる。細心の注意を拂う実践、注意深き行動は思惟と行動のバランスを保つことに役立つのである。

応量器による食事の修行——調和のある

生活を創り出す

坐禪と作務の中間に我々の食事の修行が位置している。それは「坐する仏陀」と「跡なき行動」を結合させる。複雑な儀式を通して、我々の手は多数の細々した動作を行っている間、全身心は坐したままである。(最初の中は我々の頭脳はまったく忙しく働いているのだが)。凡てのものは、そこに在る凡ての人々と調和を保つ「所作は所作にあらざる状態」のものを作り出す周囲の空気を乱すことのないよう最も敬虔に注意と用心をもって扱われる。勿論、口と感覚は活動している。彼等は、その食物の状態、堅さ、温度とその食物の味を確認しつつ、その食事の好し悪しを判定したり評価したりすることなく、ただありのままに注意を拂いながら食事に向うのである。このことは「空」を意味し、「確

認すること」とは実在を意味している。「評価意見なきこと」は、それが起るがままにまかせることを意味している。

このような方法で食事をすることは、殺さざること、盗まざること、誤用せざること、などの戒律の実践に通ずる。このような態度は我々が愛用する凡てのものに対して深甚なる感謝をもって臨むことから結果するのである。我々の身体は我々の為に用意され、我々に与えられたこの食物によって維持されるのである。そのお返しとしての我々の感謝は思いやりや慈愛や慈悲を与えるのであり、かくして全生命が支えられるのである。

◇ 私 は、読む人の感想を求めたいのです。

この稿は不完全なものであり、多分誤っているかも知れない。たった一年半歳の日本の禪院での私の生活で理解した限りのことを簡単に纏

めたに過ぎないからである。

慧海是松先生に対し、「蓮の友」の会報誌上に先生の求めに応じて拙文を書かせて頂いたこと、また一昨年の夏以来私を励まし、私の拙ない修行をお支え頂いたことに対し深謝いたします。



仏法弘道の為に御尽力のわが師森山大行老師のたゆまざる御努力と偉大なる御慈悲に感謝申し上げます。

そしてまた、ドイツにあるわが家族と友人達の愛と理解とに対し、感謝いたします。

合掌

上座部の修行

第十四回育英生

真野大成

(タイ国ワットパクナム)

今日、日本でも原始經典の研究がさかんに行なわれ、その「教え」の部分については、人々にも次第に知られるようになってきました。しかし、その「教え」に基づいて、実際の修行がどのように行なわれていたのかという点については、まだ一般にあまり知られておらず、折角の「教え」が実際の用に立っていないという憾みがあります。

タイへ来て一年余り、私は上座部仏教で行なわれている瞑想法を中心に勉強してきました。

間もなく私にとって二度目のパンサー(雨安居)も明け、乾季には私自身も地方に遊行し、実修に取り組もうと考えています。そこで、この機会に上座部仏教の瞑想修行について今日までに知り得たところを簡単にまとめ、情報を整理するとともに、合わせて育英会のご支援に対する一年間のご報告にしたいと思います。

都市派の僧院と林住派の僧院

仏教の修行は經典の学習・研究と瞑想の実習

という二つの科目に大別されます。上座部仏教の国々では、一般にそれらの科目はそれぞれ別の僧院で独立に修習されており、タイでは經典の学習・研究を専攻する僧院は、都市の中やその近くに立地することが多いことから都市派の僧院、あるいは一般に僧院または寺院（ワット）と呼ばれ、瞑想の実践を専攻する僧院は、その立地から森林派の僧院（ワット・パー）と呼ばれています。因みに、私が現在止住するワット・パクナム（寺）は典型的な都市派僧院の一つです。

經典の学習・研究を専攻する都市派の僧院は、また同時に僧侶の基礎教育の機関でもありません。各々の僧院には教師となる先輩僧の人数や能力に応じて教室や学校（多くのクラスを持つもの）が設けられ、多くの若年の僧侶やネーン（見習い僧）が先輩僧の指導を受けています。ミャンマーやタイなどの上座部仏教の国々に

は、昔から僧侶の經典に対する理解度を試す公的な試験制度が存在します。これは、歴史的には、扶役の免除などの特権を与えられた、サンガへの徒な人口の流入を牽制する狙いを持つもので、実際にアユタヤ時代には、教法知識の十分でない僧侶が、労働力調達のために、王によって強制的に還俗させられたりしたこともあるそうです。今日でも、この試験の上級の合格者は、一般社会でキャリアとして評価されています。上記の教室や学校は、言わばこの公的な試験のための「予備校」の性格を持つもので、今日の上座部僧侶の經典学習は、専らこの試験制度に動機づけられたものになっています。

このようにその機能が主に弟子の基礎教育であるということから、都市派の僧院に止住する僧侶は原則として修学僧、そして彼らを指導する教師僧、さらに僧院の管理・運営に携わる役僧ということになります。

ワット・パクナムにおける標準的な修学僧の

日課は、夜明け前の起床に始まって、

日の出 朝食 終つて朝課

午前八時 授業（二時間）

〃 十一時 午餐

午後一時 授業（二時間）

〃 五時 晩課、終わつて寮舎での補習

と、そのほとんどが学習の時間で占められています。教師僧や、僧院の運営や信徒との応対に忙しい役僧を含めて、都市派の僧院では、瞑想の実修は限られた人数の者が、極めて限られた時間行なっているにすぎないと言つてよいでしょう。

一方、森林派の僧院では、その瞑想が日々の行持の中心になります。私自身はまだ実際に森林派の僧院ですごした経験がないのですが、去年、後で触れます「摂心会」でいっしょになつた森林派の僧によると、彼の標準的な日課は、

午前中 瞑想と各種の勉強を各一時間

午後 瞑想（三時間）

夜 瞑想（一、二時間）

ということでした。都市派の僧院で經典の学習に使われている時間が、森林派の僧院では、そつくり瞑想の時間にあてられていると考えればよいでしょう。

森林派の僧院には、また頭陀行の伝統があります。頭陀行というのは、(1) 森や墓場など人里離れたところに住し、(2) 樹下、屋外に起居し、(3) 自らが托鉢をして得たもののみを食べ、(4) 食事は一日一回のみとし、(5) おかず等を選び分けるために) バーツ以外の器を用いず、(6) 捨てられた布で作つただだ三衣のみを着し、(7) 夜も常に坐して横臥しない、等々に依る修行生活の方法のことで、一種の独居・遊行の作法と云うことができます。

經典を読むと、よく、

「誰々は）やがて独りで人々から遠ざかり、怠たることなく精勵し、専心し……そうして、聖者の一人となった。」

という記述に出会います。時代が下って、元々聚落から一定の距離をおいて建てられていた精舎が、都市の中に建てられていくように、彼らも次第に僧院を構えるようになりましたが、森林派の僧侶はそうした遊行・独居の修行者の末裔である、ということができないのではないでしょうか。

タイでは今世紀のはじめに、アーチャン・マンという傑出した瞑想僧が出、森林派の伝統を中興・鼓舞しました。師の下には、先年亡くなったアーチャン・チャーやアーチャン・テート、そして現役の最も高名な指導者の一人であるアーチャン・マハー・ブーワといった、多くの優れた弟子が輩出し、師自身も、また、釈尊と同様の涅槃に入ったと考えられています。また、



師の指導は大へん峻厳なことでも知られていました。

「摂心会」と瞑想センター

以上が僧院における、伝統的な瞑想の実修であるのに対して、今日、こちらには、僧侶と在家信者が等しく瞑想を学ぶ場として、さらに「摂心会」と瞑想センターというものがあります。近年は、こちらでも多くの在家信者が熱心に瞑想に取り組むようになって来ています。「摂心会」や瞑想センターは、おそらく、このような動きに呼応した工夫だろうと思われる。

「摂心会」はこちらでは、ガーヌフックオプロム・プラーガンマターヌ（直訳すれば、「瞑想訓練会」となります）と呼ばれています。そして、そのしくみは日本の禅宗における摂心会にたいへんよく似ています。「摂心会」には、指導者の周辺が主催し、広く一般の僧侶や在家信者が参

加する開かれた「摂心会」と、特定の団体、たとえば学生や軍人・警察官などが主催し、指導者を招請する閉じられた「摂心会」があります。このあたりの事情も日本と同様だと思えます。「摂心会」の標準的な期間は、だいたい十日から二週間前後です。また、こちらでは、瞑想は個人単位で修習するのが伝統的なやり方ですが、「摂心会」では日本の摂心会と同様、時間を定めて同じ場所に集まり、皆で一緒に坐を組みます。

ただ、日本の摂心会と大きく違うのは、その参加人数の多さです。私が去年参加した、バンコク近郊のラチャブリー県の僧院で開かれた「摂心会」には、十五日間の期間中に、述べ千人以上の僧俗が参加したと言われています。これだけの人数が集まるとなると、日本では、主催者側が宿泊施設の手当てや、食事の準備などで大わらわすところです。もちろん、こちら

でも、主催者は陰でいろいろと心を砕いているに違いありません。しかし、傍で見る限り、これらの問題は、こちらでははるかに易々と解決されているように見えます。夜は、各自で持ち寄ったり、また僧院で貸し出されたりした、グロドという一種の蚊帳を思い思いに樹の下に張って眠り、食事も近在の信者が布施に持ち寄ったものと、在家の参加者みずからの炊き出しとで賄われます。

このように、こちらで仏教関係の大きな催しが、比較的容易に開催される背景には、人々の積善（タムブン）思想に基づく、ボランティアの精神があつて、大きな働きをしているように思います。人々は僧院で行なわれる行事の流れをよく弁えており、上記のボランティア精神と合わせて、行事のあらゆる場面で主催者に協力することができます。一般に、このような催しにおける、主催者と参加者の意識の差は、こち

らでは非常に小さいものであると言つてよいと思います。

私が参加した「摂心会」のスケジュールは以下の通りです。

午前四時半 起床

〃 五時 瞑想・（終わつて）朝課

〃 八時半 瞑想・食事

午後一時 講話・行茶・グループに分

かれての瞑想指導

〃 六時 瞑想・晚課・説法

〃 十時半 消灯

一回の瞑想の時間は日本の坐禅と同様四十分前後で、日本の摂心会に比べると、瞑想実修の時間が少なく、お経や講話の時間が長いのが特徴です。また、午後の瞑想指導では、指導者による実修者への面接指導が行なわれます。

次に、瞑想センターは、この「摂心会」を「常打ち」にしたような施設です。そこで指導され

ている瞑想のメソッド等から考えると、これはどうやらミャンマーで創始されたものようです。瞑想センターには指導者が常駐していて、実修者は自分の都合のよい時にそこに出掛け瞑想の指導を受けることができます。ただし、瞑想修行が成果を上げるためには、それ相應の時間が必要であるとして、滞在期間には下限が設けられている場合が多く、一般に、二週間から一ヶ月以上の滞在修行が要求されています。瞑想センターのスケジュールには、そこで指導されているメソッドによって、皆で揃って瞑想するように細かく定められたものと、食事と面接指導の時間が定められているだけで、瞑想実修は各自の判断で行なうようなものとの二通りがあります。

今日、こちらで、瞑想センターを中心に広く普及している瞑想のメソッドに、マハーシ・サヤドウのメソッドとサヤジー・ウ・バ・キンの

メソッドがあります。いずれもミャンマーの人で、後者は在家の瞑想指導者です。はじめに、こちらでも、在家の人々が熱心に瞑想に取り組んでいるということに触れましたが、中には、このように僧俗を含めた、後進の指導をするような立場の人も出てきています。これらの瞑想センターは上座部仏教圏ばかりでなく、欧米にも多くの支部を持つっており、特に、ウ・バ・キン師のメソッドは、インド出身の、これも在家の実修者であるグエンカ師というよき後継者を得て、いま、インドを中心に普及の輪を広げています。タイ国内では、一九五六年の第六結集を契機に招致された、マハーシ・サヤドウのメソッドが瞑想センターの主流になっています。

私が、以前見学した、バンコク近郊のチョンブリー市にある瞑想センターは、林を切り拓いた広い敷地の中に、瞑想ホールを中心として実修者のクティ(庵)が建ち並び、中心になる建

物がウボソツト（布薩堂）と瞑想ホールという違いはあるものの、僧院とたいへんよく似たつくりをしていました。瞑想ホールは男女が別々の建物になっていて、それぞれ、天井の高い広々とした空間を持っています。クティの数から推すと、収容人員は百人ちよつとといったところでしょうか。センター内は周囲の喧騒と打って変わった別世界となっていました。ひとりの有力な指導者が現われると、その元に資金が集められ、このような施設がいとまたやすげに設立され維持されていく。こちらの人々の仏教に対する思い入れの深さには、いつも頭が下がる思いがします。

瞑想センターは、一般に利用料金も極めて安く、中には運営は喜捨によって、特別な料金規定を設けていないセンターもあると聞いています。また、現地のことばだけでなく、英語の通じるセンターもたくさんあります。ことば

の問題さえクリアできれば、メデイテーション・センターは一般の日本人にとつても、上座部仏教の瞑想を学ぶための、よい窓口になるのではないかと思います。因みに、ミャンマーなどでは、メデイテーション・センターで瞑想を実修することが、在家の人々の「優雅」な休暇の過ごし方のひとつにもなっているということです。

以上、こちらでの瞑想実修のようすについて、今日までに知り得たところを簡単にまとめてみました。



横浜善光寺
留学僧育英会

育英生五人に辞令

十五周年を迎える育英会

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）の第十五回育英生五人に対する辞令交付式が二月六日午後二時から、善光寺で行なわれた。この育英会は黒田理事長が善光寺開創十五周年の報恩行として設立してから今年で十五周年を迎える。式典に先立って開かれた檀信徒総代会では、善光寺開創三十周年と育英会十五周年の記念事業計画が協議・決定された。

第十五回育英生は、韓国から日本の立正大学に留学している金希泰（キム・ヒテ）さん、台湾のファ・クアン研究所に研究留学するハワイのカルマ・レーシエ・ツオモさん、タイで修行しているバングラデシュのシラモイ・スラマネーラさんが新規採用され、タイで修行中の小田嶋巖雄さんとロスアンゼルス禅センターに派遣されている真野順治さんが継続採用された。これにより昭和六十年度の第一回から今回までに海外へ派遣、または日本に受け入れた育英生は



延べ九十三人。派遣先は十三カ国、受け入れは九カ国・一地域になった。

小田原市の成願寺住職山口春通老師の導師で開山忌法要の後、辞令交付式が行なわれた。宮本延雄理事による経過報告に続いて本尊上供が営まれ、法要後、黒田理事長から育英生に辞令と記念の楯、育英金が一人ずつ手渡された。成願寺の山口住職は「昨年七月にアメリカの禅センターを訪問して育英生が一生懸命に勤めている姿を拝見し、善光寺育英会の素晴らしさを感じた。黒田先生の大きな御心に応えて研鑽されるよう願う」と祝辞を述べた。

また黒田理事長は「育英会も回を重ねること十五回になる。念ずれば花開くと思う。今日まで、仏天の御加護によるものと思う。今日まで地べたを這うようにして十五年やってきた。光陰矢の如しというのが実感だ。すべては皆さまのおかげと感謝している。世界平和のため、仏

法興隆のために、これからも命を捨てる覚悟で頑張りたい」と感謝の言葉を述べた。

なお、檀信徒総代会は、善光寺開創三十周年と育英会十五周年の記念事業として①五月二十八日に横浜プリンスホテルで記念式典を開催②善光寺墓地「横浜やすらぎの里」を開園し十一面観音を建立③道元弾師が留学修行した中国・天童寺へ参拝④秋にタイ・ワットパクナムを訪問⑤十八羅漢の屏風を制作⑥記念出版物の刊行⑦釈迦殿等内外の修復——を決めた。

次に新規採用の三人をご紹介します。

観音信仰とその伝記を研究

金希泰さんは韓国曹溪宗の出家僧。一九九七年に来日し、立正大学で仏教を学んでいる。推薦者は同大学仏教学部長の三友健容教授。日本の研究テーマは「観音信仰とその伝記」を選んでおり、「観音信仰のあるべき姿と、信仰され

ている様々な観音信仰に関する伝記を探し出して、その淵源及び時代思想、また、どのような社会的環境の下で、民衆にどのような影響を与えたか。それぞれの時代の伝記の文献学的調査をして、現在行なわれている観音信仰との対照研究をしたい」と延べている。

中国仏教の思想を究明

ツオモさんは「釈慧空」の法名をもつ仏教徒の女性。現在、ハワイ大学哲学部の博士課程で学位取得のため論文を執筆中で、台北にある仏教研究所「ファ・クアン」で中国語の仏教原典類とその註釈書類を研究することを希望。中国の仏教学者へのインタビューも予定しており、それらを通じて、死と臨終に関する中国仏教の思想と宗教的実践を究明する。

語学はチベット語、日本語、ドイツ語に堪能で、すでに二冊の出版物も上梓している。一九

八七年に「サキャディータ」と称する仏教女性の会を設立。またインドの貧困な女性のための教育プログラムを実践するなど社会的な活動家としても活躍している。

推薦者であるハワイ大学のデビット・チャペル教授は「国際的な仏教婦人の活動における彼女の指導的役割」を高く評価している。

提出論文の中でツオモさんは、仏教が今日、東京でも台北でもバンコクでも危機に瀕していることを指摘し、「今日、仏教が適合性を持つためには、単に世俗的な文化の中にある人々の要求に語りかけ、ストレスの多い物質的な生活のあり方を選ぶ道を準備するだけでなく、同時に民族主義、性差別、環境破壊、そして社会的・経済的不正など現代の社会的問題に積極的に発言しなければならぬ」として、現代世界に仏教の教えと実践が求められていることを主張している。

仏教伝道者として

スラマネーラさんはタイで留学修行し、ブツダサトウイタヤ校で勉強中の青年僧侶。仏教の伝道者として生きることを目指し、「仏陀の教説こそ人類に平和な社会を実現する可能性を与える。仏陀の五戒こそ人類に地球上の平和と友好を回復させる最も重要なものだ」「仏教は人類の幸福のための非暴力、慈悲、平等、憐憫、人類愛などについて我々に普遍的な教戒を与えてくれる世界唯一の宗教である」と仏教普及への情熱を吐露している。



タイ国チェンマイにて

歯科用カメラを贈呈

開創三十周年で鶴見大学歯学部へ三十一台

ことし開創三十周年を迎えた善光寺（黒田武志住職）は、記念事業の一環として、檀家総代の（株）アジアロイドジャパン社長・細井勉氏から提供された歯科・口腔外科用のポラロイド「インパルス―Dカメラ」三十一台を鶴見大学歯学部に贈呈し、その「拝受式」が四月二日午前十一時から、横浜市鶴見区の同大学で執り行なわれた。

善光寺はタイやアメリカでの修行体験をもつ黒田住職が昭和四十四年、日野公園墓地入り口

の現在地に開創。以来、「宗祖を通して釈尊に還る」を宗教的頂点として寺檀一体の教化活動を展開し、開創十五年目の昭和五十七年には報恩行として「横浜善光寺留学僧育英会」を設立。これまでに世界十八カ国・延べ九十三人の留学僧を日本に受け入れ、またタイや欧米に派遣してきた。

三十周年の記念事業を計画していたところ、檀家総代の細井社長から輸入事業で取り扱っているポラロイドカメラを寄贈したいとの申し出

鶴見大学へ歯科用カメラを贈呈。左から柳澤慧二歯学部長、高崎直道学長、黒田方丈、細井勉檀家総代



があり、その活用方法を話し合う中で、曹洞宗大本山總持寺を設立母体とする鶴見大学の歯学部へ、専用機種のカメラを贈呈することに決めた。

このポラロイドカメラは「インパルス—D」という型で、接写機能を限定強化した歯科・口腔外科用のカメラ。計量コンパクトで持ち運びが便利なため、歯列矯正や口腔外科に必要な高品質の接写写真を簡単な操作で撮影できる。従来のようにレントゲン室に移動しなくても、患者と対面したまま、その場で素早く写真処理ができ、等倍、二倍の撮影も可能というすぐれた機能をもっている。

一台が高価なため簡単に導入できるものではなく、寄贈の話を受けた大学側は当初、半信半疑だったという。善光寺が三十周年というだけでなく、細井総代が社長をつとめるアジアロイドジャパンも創立三十年という因縁が重なり、

横浜で唯一の歯学部である鶴見大学歯学部も昭和四十五年の開設から来年が三十年というめぐり合わせ。

三十一台もの大量寄贈に大学当局と歯学部は「今の時代に奇特なことで本当に有り難い。新年度の素晴らしいスタートができた」と大喜び。カメラは善光寺とアジアロイドジャパンの両者の



学長、歯学部長連名での感謝状

の名前で贈呈され、「拝受式」の後、高崎直道学長と柳澤慧二歯学部長の連盟で黒田・細井両氏に感謝状が贈られた。



「アメリカ禅」を特集

三巻目の論文集刊行



横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は、第十二回生から十四回生まで十三人の育英生の論文を収録した『論文集Vol.3』をこのほど刊行した。黒田理事長の実兄でロサンゼルス禅センター仏真寺を拠点にアメリカ社会へ曹洞禅を弘めた故前角博雄老師を偲ぶアメリカ禅の特集が組み込まれている。

同育英会は昭和六十年度の第一回から平成十年度の第十四回までに延べ八十八人の留学育英生を海外へ送りまた日本に受け入れてきた。派遣国は世界十三カ国、受け入れ国は九カ国・一地域に及んでいる。その歩みを記録する論文集を過去二巻刊行しており、今回で三巻目となる。いずれも中外日報社が編集・印刷。

第三集は、開創三十周年を迎えたロサンゼルス禅センター仏真寺の主管としてアメリカ社会に曹洞禅を根付かせた故前角博雄老師の足跡を記録する追悼集にもなっている。

前角老師は平成七年五月、日本滞在中に急逝し、曹洞禪の世界布教にとつて多大な損失と惜しまれた。論文集にはアメリカ各地で禪を實踐する弟子たちが追悼の言葉を寄せている。

巻頭に東方学院長の中村元博士（東京大学名誉教授）、曹洞宗の乙川良英宗務総長が序文を寄せ、黒田理事長の道業を高く評価している。

また黒田理事長は巻頭言の中で「偉大なる業績を残した我が師・我が兄前角博雄老師」とともに生きた自らの人生を振り返り、「禪が欧米社会に定着し、これほどの広がりを見せたのは、前角老師があきらめることなく何年も何年もかかって耕した畑に、さらに何年も蒔きつづけた小さな種がやつと芽を出し、花開かせたということだと思えます。念ずれば、花開く……。兄は、私に、その生き方によって真の仏の道を教えてくださいました。兄が咲かせたこの花を、決して枯らせてはならない——これは私たち後

を継ぐものの使命だと感じています」と決意を新たにしている。

育英生の論文に続いて、「アメリカ禪」の特集が組まれ、駒沢女子大学・東隆眞学長の「山の禪サンガと街の禪コミュニティ」や「定着し発展するアメリカ禪」の論文、及び「瑩山禪師と女性」と題する講演、明治大学・阿部慈園教授の「アメリカ西海岸の禪センターを訪ねて」、さらに前角老師の弟子たち九人による追悼文を収載している。

A 五判 三一二ページ 頒布価二、〇〇〇円
成寿山善光寺発行

伊藤喜三郎の世界





觀世音南無佛與佛有因與佛有緣
佛法僧緣法緣我淨願念觀音
昔者念觀世音念念從心起念念不離心

沙
三喜庵



如見五顯經皆空慶一切苦厄舍利子色不
 異空空即不異色色即空即色是也



普賢菩薩
 法門三喜庵





青面金剛

沙阿三喜庵



降三世明王圖



三喜庵

十一面觀音像



沙門王喜花



仏陀の微笑み

なんと慈悲深いやさしさに満ちた微笑みでしょうか。世の中のありとあらゆる苦しみも、この微笑みによってすべて救われる。日本画の大家・伊藤三喜庵先生の願いやメッセージがこの作品には込められているように感じます。

物が豊かになる一方で、人の心にはさまざまな欲が生まれ、それとともに妬み恨み憎しみといった、悲しい心に苦しむ人が多くなりました。しかし、どんなに急激に時代が変わろうとも、人の心の中には普遍的な仏性があり、それが必ず輝き出す未来がある。安心しなさい。お釈迦さまの微笑みは、そんなふうに私たちに語りかけてくださるように思うのです。

伊藤先生の作品と向き合うとき、まことに謙虚に心穏やかな気持ちになることができます。そして、物に振り回されることのない、真の自分の生き方を教えていたたいいことがあつたのです。



観音様とお弟子たち

現代日本を代表する建築設計家でもあり、日本画の大家でもある伊藤三喜庵先生は、そのライフワークとして、魂が包み込まれるような墨絵仏画を何百点も残されました。その中の数十点は、横浜善光寺発行の機関誌『成寿』の表紙絵、また文中挿絵として使わせていただき、全国の読者の皆様にも、長年親しまれて参りました。観音様とお弟子たち——この絵皿の絵も、きっと見覚えのある方が多かろうと思われれます。伊藤三喜庵先生が描く観音様はどれも、どんなにその時の心が荒れていようとスワツと静めてくださるような慈愛に満ちたものばかりです。特にこの作品は可愛らしさの中にも、三十三のお姿に身を現し、大慈悲の心を持って私たちを苦しみから救ってくださる観音様のお姿が見事に描かれている、まことに伊藤先生らしい墨絵の一つ。眺めているうちに、いつしか自分の心がお弟子たちの一人に溶け込み、教えを宇宙まで伝えていきたいような、そんな気持ちになっっていることに気付かされることでしょう。



宗門の誇り

東京都 山内舜雄先生

と晋住され、大慶至極にて今や世代の交代のすみやかなるを痛感すると共に、来るべき新世紀への御活動を切念するところです。

善光寺様の宗内外の御活躍はまことに宗門の誇りとも言うべきもの、殊に海外留学生へのご支援はまことに世紀の快挙として宗史に止むべきものと思われます。

宗門多端とは申せ黒田武士師如き人物が十人おりますれば、何のことはない、と私は思っています。

定年後は少閑を得て著述に邁進致しましたが積年の怠惰は如何ともなし難く遅々としてはかどらず老齡を嘆ずるのみ。

それにしても有為の宗門人材を輩出した光純師を始めとする白純老師傘下の御活躍を見るにつけ、私は宗門未だ滅びずの意を強うすると共に、私に出来ることは『眼蔵』参究以外にないと老眼をこすり

貴師の御活躍に呼応するかの如く石附周行師も大雄山へ

ながら老骨を鞭打ちながら著述に努めています。あと二、

三年はつづける所存です。白純老師の御行蹟の一端を書く責任を未だ果せないのが気にかかります。何とか果したい。とりあえず拙著への御芳志の儀重ねて御礼申し上げます。

安居修行は四人

ドイツ大悲山普門寺

アイゼンブッフ禅センター

堂頭 中川正壽老師

多大なる御支援を蒙りまして、この度本堂落慶の運びとなりました。厚く厚く御礼申し上げます。前角老師の掛軸表装有難く存じました。御本尊

様、法具類と、私たちを守って下さっています。

九月五日、渡欧中の南沢道人監院老師御一行にお越し頂いて、本堂落慶の祝典を執り行なうて頂きました。あいにく雨模様の日となりましたが、摂心参加者を中心に約七十人程が本堂に集まりました。

本堂は別館にあった屋内プールを改造したもので九八平方メートル。別館の二階は部屋数二〇で宿泊者用、一階はいま工事中で完成すれば、南の庭に面した食堂兼リビングホール、レセプション、台所となります。一階二階それぞれ

れ三二〇平方メートル、合わせて六四〇平方メートル。この工事には上下水配管取替え、暖房設備、各部屋についているトイレ洗面シャワー室、まったく新しい台所施設の設定などが含まれています。十月末までには一応の改修工事の完成を見る予定です。

そして十一月よりは、いよいよ普門寺第一回の安居修行に入るべく志を新たにしております。ただ今常住の修行者は私を入れて男ばかりの四人、堂頭、副寺、典座、直歳を勤めております。

この別館の隣にあり、将来

は衆寮、客室、第二本堂、図書室、作業室を提供する本館は、一階二階とで四八〇平方メートルありますが、これまた大変老朽しており、屋内各

所には雨漏りがあり、まずは早急に屋根の改修を必要としています。しかし、工事資金の用途はなく、引き続き各方面からの資金援助を仰いでいます。

申すまでもなく、このたび私たちが普門寺落慶の祝儀を執り行ない得ましたことは、ひとえに絶大なる御支援を賜りました宮崎奕保不老閣宛下を初めとして、全国各地からご浄財を賜りました皆様方の

ご支援に依るものであります。普門寺山内一同、ならびに有縁の参禅者一同、心より日本からのご支援に深謝申上ります。

「梵刹の現成を願せんにも、人情をめぐらすことなかれ、仏法の行持を堅固にすべきなり。修練ありて堂閣なきは古仏の道場なり。露地樹下の風とほくきこゆるなり。この処在ながく結果となる。まさに一人の行持あれば、諸仏の道場につたはるべきなり。末世の愚人、いたづらに堂閣の結構につかるることなかれ。仏祖いまだ堂閣をねがはず。自己の眼目いまだあきら

めず。いたづらに殿堂精藍を結構する、またく諸仏に仏字を供養せんとはあらず、おのれが名利の屈宅とせんがためなり。」(行持の巻、下)

不肖、学なく行疎かなる身にして、高祖道元禅師のこのみ教えに導かれて長年励んで参りましたが、二年前在独十八年目にしてこの任に当たりました。今後とも何卒より一層、ご法愛ご指導を賜り、ご支援いただけますように伏してお願ひ申し上げます。

合掌

一九九八年九月九日

うたた感慨

東京都 福井文雅先生

一昨年四月、一年有余のパリ滞在から帰国いたしました。その後すぐ、ハンガリー・ブタペストの東方学国際会議と、在仏中に娘の在学保証人であった親友宅の結婚式に招かれフランス・ブルターニュに娘連れで出かけました。その間に身辺に思いがけない変化がおこったりしまして、季節の御挨拶をさしあげる機会を逸してしまいました。長らくの御無沙汰どうかお宥し下

さい。一昨年春までのことは、

「フランス東洋学の昔と今」

（『東洋の思想と宗教』15号）、

「パリでの俺お前」（早大文学

部報『りてら』27号）、

「ベルナル・フランク教授の御葬

儀に参列して」（日仏東洋学会

通信21号）、

「フランス極東学院院長旧友ロンバル君の急

逝を悼む」（同22号）などに書

きました。娘はパリの16区

ラ・フォンテーヌ高校時代の

旧友達と文通等々で親交をつ

づけています。その姿に私は、

三十数年前にオランダ貨客船

で渡仏した自分の給費留学生

の頃を思い合わせ、うたた感

慨に堪えないものがありま

す。

どうぞお大事にお過ごし下

さい。

「大いなる仏陀の遺産」

東京都 田村 仁様

私は昨年（一九九七年）十二月から半年間、タイ、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、ラオス取材してきました。アンコール王朝の全盛期とその末裔たちの取材でした。今年中になんとか刊行した。今原稿書きをしています。十一月には双子の小象をテーマにした写真絵本を

また藤田一照師とは『大法輪』誌へ連載されていましたが文章を拝読させていただきましたのがご縁で、何回か文通させていただきました。

故志保見老師様のことは、昔、中外日報の記事で何回も拝読し、積極的で行動力ある剛僧・武道家という印象を受けておりましたが、早逝され残念でございました。神戸の地震で八王寺様は大損害を受けられました由ですが、先般立派に改築されたとの新聞記事を拝読いたしました。現住様の道元師様も、そのご令弟様も武道家であられたと存じます。

故前角老師様の永年のご努力が実を結び、米国に禅が根付きましたことを改めて知り、感動いたしました。弟子丸師の禅がフランス人のお弟子さん方により、フランス流とは存じますが、今日まで伝えられていることはすばらしいことと存じます。現在は、米国人による米国人の仏教の時代に入っております由、国情や民族性に合ったメソッドでサンガを継続・維持するという見地から、先般のご晋山式も行われましたことと拝察申し上げます。

故前角老師様のご冥福とご遺弟の方々の益々のご活躍を

心よりお祈り申し上げます。

冀掃衣奉獻

長野市 齊藤幸子様

この度、板橋興宗禅師様冀掃衣奉獻に際しまして、いろいろと御配慮をいただき誠に有難く厚く厚く御礼を申し上げます。

十年前頃梅花講員として六十片の一片を縫わせて頂いたことがあり、又、岡本好文尼の指導で絡子の講習を受け、その時三日目午後は用があり早く帰りましたので、黒田様とお逢いすることができません

んでした。その時より一番フ
 アンの板橋禅師様に糞掃衣を
 差し上げることができたらと
 心の中で思っておりました。

板橋禅師様との出会いは昭
 和五十二年十一月能登祖院
 で、当時娘の中学校PTA読
 書会で、正法眼蔵随聞記典座
 教訓の校註書を信濃教育会出
 版部より発行した元教師を月
 一回招いて講義を聞いてお
 り、その先生が夏期坐禅講習
 会の時板橋禅師様のうわさを
 耳にして、是非お目にかかり
 たいと読書会員を伴ない永平
 寺で一泊、翌日半数の同伴で
 能登祖院に参禅しました。先
 生は一度お逢いした板橋禅師

様を偉いお坊様になるとおっ
 しゃっておいででした。

昨年、副貫首になられたこ
 とが大乗寺便りでわかり、菩
 提寺も同じ、又同寺の中道会
 員でもある大越様に協力をお
 願いいたした次第です。右の
 ご縁により池沢様のお力によ
 り完成ができましたのです。
 本当にいろいろとありがとう
 ございました。

コンピューター時代こそ
 感性を豊かに

小田原市 安藤康哉老師

私たちの先人は飛花落葉に
 喜怒哀楽をうつし、しみじみ

と人生を感じ、花の心にひか
 れ、花から多くのことを学び
 大いなる自然の数々の姿をわ
 が人生と感得してまいりまし
 た。まさに「山花開いて錦に
 似たり、溪水湛えて藍のごと
 し」として人と自然とが一体
 となつて共存してきたわけで
 あります。

ところが現在、技術革新と
 いう大洪水がこの地球を大自
 然を濁流のごとくひとなめに
 しようとしています。もとも
 と人は他者との関わり合い、
 共いきの中に生存していま
 す。そしてその生存の懸け橋
 になるのが言葉です。内面的
 にせよ外面的にせよ人と人と

の交流は人の心を吐露する言葉
を媒介としてお互いの感応
道交が生まれてきます。

はじめに、ことばあり、こ
とばは神とともにあり、こと
ばは神なりき —ヨハネ伝
愛語よく廻天の力あること
を学すべきなり —道元禪師

ところが現今、この言葉に
代わってコンピューターとい
う媒介が大手を振るいはじ
め、人と自然とのきずなをロ
ボットかマシンマンのような
物体が機械的に操作をはじめ
ました。その結果、人間本来
の姿が不透明な存在として意

識されるようになってしま
いました。不透明な存在として
の人間はまさに人間失格、お
互いが信じあえない意味不明
な存在となつてしまします。
ほんとうにこんなことになつ
てしまったら人間の存在さえ
危うくなつてしまいます。で
すから私たちは真の人間性に
たちかえり、自由な天真爛漫
な心を取り戻したいと叫びた
いのです。

そこで、私は坂村真民先生
の『二度とない人生だから』
という詩を口ずさんでみまし
た。

『二度とない人生だから』
二度とない人生だから —

輪の花にも

無限の愛を そそいでゆこ

う

一羽の鳥の声にも 無心の

耳を

かたむけてゆこう

二度とない人生だから つ

ゆくさのつゆにも

めぐりあいのおしぎを思い

足をとどめてみつめていこ

う

この詩から私たちは人間の本
当の心を取り戻し、その情感
を深く味わってみたいと思
います。

私もご縁をいただき華綾の

園に奉職させていただきました。ほんとうに有り難い不思議なめぐり合いだと心より感謝しています。そして日々、

子供たちの心の純粋性に接している、自分がいつしか無心のふるさとに帰っていくような思いと、また、先生方の明るい真摯な保育の姿勢とその情熱に心熱きものを感じています。

さて今年は何に大きくはばたいて共に頑張っていきたいと思えます。一輪の花に無限の愛をそそぐように、子供たちにそうしたやさしい心で、もつともつと接していただければ、また子供たちの叫び声

や、声なき声にも無心の耳を傾けていくことができたら――ほんとうにすばらしいことです。すね。

私も大雄の森に立ち入っては少しづつ感性を取り戻し、人間の真実義を追及し続けていこうと願っています。また良寛さんが子供と手まりをして無心に遊んだ境地にまではとてまたどりつけませんが、私は今唐突な発想と思われるかも知れませんが、ピアノの勉強を始めました。ピアノの先生が七月に発表会をしようと思気込んでいますが、果たして出来るかどうか？ でも頑張ります。

今年も、和顔愛語を合い言葉に、そして感性を豊かに頑張らましよう。

素直で明るい人に

大平れい子様

黒田老師様、このたびは立派な本をありがとうございました。いつも私は心から嬉しく楽しみになります。じっくりと読ませていただきます。老師様の優しい心を私は決して忘れません。

このあいだ私は母と一緒に比叡のお山に行つて来ました。とっても嬉しく楽しかった。

たです。伝教大師最澄様が守
つてくれているような気がし
て感動しました。一隅を照ら
し己を忘れて他を利する慈悲
の極みの大切さをしみじみと
感じると共に、いつも心に受
けとめ人に愛を与える人にな
ろうと感じました。私は日蓮
上人様の「蔵の宝よりも身の
宝、身の宝よりも心の宝第一
なり」のお言葉をいつも思い
出し、実行しようと思ってい
ます。いつも仕事に行ってい
て悲しい時、辛い時は、黒田
老師様の托鉢の自己の闘いや
成寿を読み、思い出して元気
を出しています。

仕事の休みの日に母とデパ

ートに行き、レストランで食
事をしたときのことです。ド
キッとする言葉が掲げてあり
ました。「頭の良い子よりも素
直で明るい子になれ」とあり
ました。私は涙が出そうにな
りました。そのとおりです。
私はその心を忘れてしまし
た。素直で明るい心をです。
ひたすらに難を忍び正法を弘
め国を救い人々を助けて尊い
生涯を貫き通された日蓮上人
様の生き方に学び、素直で明
るい人にならなければと心か
ら思いました。



「国際荣誉賞受賞」お祝いのメッセージ

◇東京都 園部逸夫先生

過日は育英会論文集及び成寿を御恵送賜り誠に有りがたく拝受致しました。「サラナング財団」より国際部門の『荣誉賞と称号』を授賞との趣きおめでとう存じます。今後益々の御発展とご健勝祈り上げます。

◇東京都 田上太秀先生

『成寿』によりますと、黒田任職は「国際荣誉賞」を御受賞なされた由、心からお祝い、お慶び申し上げます。『論文集』では、多くの育英生の方々のご研学の様子が知られ、慶ばしく、ご同慶の至りです。

◇東京都 林 博明先生

『成寿』と『論文集』を御恵送賜りありがとうございます。いつも諸先輩・諸老師のすばらしい文章に背筋がキュッとさせられます。

黒田方丈様、サラナング財団より「国際荣誉賞」受賞おめでとうございます。仏教を学ぶ若い僧侶や研究生・海外留学と外国から日本への留学、言葉・環境・風土も違う研究生を支援す

る育英事業に、方丈様は「知行合一」で献身の姿でご活躍されていることは、ブツダの心でなければ出来ないことです。只々頭が下ります。

今回は三つのことに興味がありました。

一、ご講話「原点に戻って素直に生きて」P25達磨さんに目を入れてある顔の表情が…一心に念じている自然体である。

二、校訓「質素堅実」を高校で学び先輩から脈々と受け継がれてきた精神・薫陶が今、生かされていること。

三、人生の方向づけをしてくれた御兄さん、いつも心の友となってくれたこと。「宗祖を通して釈尊に還れ」この御言葉の重み、前角老師の残された御功績は、大なるものがあり、法燈を伝持されていることは心強いことである。

色々所感を述べさせていただきました。

◇横浜市 石澤良昭先生

黒田理事長様の「国際栄誉賞」のご受賞を心からお祝い申しあげます。留学僧育英会の活動は海外から注目されており、オープン（公正）な審査は高く評価されております。その育英会から貴重な逸材が出て活躍しており、世界へ通じる仏教教育は二十一世紀の先取りかと感服いたしました。

またスイス・ローザンヌ大学への仏教書の寄贈の件、快挙であります。今後ヨーロッパで仏

教研究が進むことでしょう。仏教哲学研究がますます根づくことでしょう。

◇ 中華民国台湾省 葉阿月先生

『成寿』と『論文集』を拝見し、黒田老師様が昨年アメリカ等諸外国へご布教訪問に、殊にスリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」を授けられましたこと拝知し、心から嬉しくお慶びを申し上げます。お陰様で小生は無事に過ごしています。王文雄様もよく老師の御恩を感謝しています。また、当地の小さい善友会（財団法人台北市浄法界善友文教基金会）も誠意をこめて、他日、老師様ご夫妻のご光臨、ご指導を嬉しく待っています。

◇ 東京都 増上寺 藤堂恭俊老師

黒田武志長老にはスリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」ご受賞なさいましたことを衷心より敬意を表しますとともに、今後益々の御活躍を御祈念申し上げます。

◇ 松戸市 石川大玄老師

「国際栄誉賞」お目出度う御座います。『論文集』と『成寿』共々内容が豊富で読みごたえがあります。老骨になると一気には読めませんが、ゆっくり拝読したいと思えます。

内地での講演、外地の布教等大活躍のご様子、くれぐれもお大事にしてください。留学育英の大事業一層の精進を祈ります。

◇横浜市 石井修道先生

父の三回忌の法要を終えて、福岡の方から帰宅しましたところ、『成寿』と『論文集』が送られておりました。黒田武志方丈様がスリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」を受賞されていることを知り、心よりお祝い申し上げます。

また、英訳も付された方丈様の「偉大な業績を残した我が兄前角博雄老師と共に生きて」を読み、前角老師の本師への尊敬と兄弟愛の深さに改めて感動すると共に、自らの父への報恩のいたらなさを反省させられています。ロスで前角老師にお会いしたときなどを思い返しながら、私に何ができるのかを一番大切にして今後生きて参りたいと思います。

◇浜松市 伊藤智雄老師

このたび、スリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」を贈られたとのこと、誠に慶賀に堪えません。その時のカラー写真がとてもよく撮れていて、よい記念になると思います。

貴師が一身をかけて留学僧を育てて下さること、歴史に残るすばらしい事業と心から敬意を表します。一層のご活躍を心からお祈りいたしております。

◇東京都 鎌田茂雄先生

国際栄誉賞ご受賞おめでとうございます。善光寺留学僧育英会の御発展を祈ってやみません。

◇町田市 角家文雄先生

スリランカ・サラナンダ財団から「国際榮譽賞」を受賞された由、おめでとうございます。また、母校の名門・大田原高校で記念講演をされたこともすばらしい事です。母校から講演を依頼されることは卒業生にとって最高の名誉だと思います。一層御自愛下さい。

◇米国マサチューセッツ州 藤田一照宗師

サラナンダ財団より「国際榮譽賞」を受賞なさったとのこと、おめでとうございます。留学僧に加えていただいた者として、心よりお喜び申し上げます。今後ともお元気にて仏教の発展に貢献し続けていかれるよう祈念致しております。

私は三つの大学での毎週一度の坐禅会に加えて九月から十二月までの一学期間、州立大学でもう一人の先生と一緒に「仏教とアメリカ文化」というコースを教えることになりました。全く新しいコースで、夏の間その先生と授業案を練り、先日第一回目のオリエンションをおこないました。これから週二回、アメリカ文化に仏教がどういうインパクトを与えているかをいくつかのトピックに添って見ていこうと思っています。今後日本でも「アメリカ仏教史」とでもいうような研究分野がインド仏教史、中国仏教史、日本仏教史…と並んで確立していくかもしれません。どんな展開をとげていくのか、その一端を目の当たりに見ることができるのは幸運だと思います。

◇立川市 伊藤 勲様

この度の国際栄誉賞受賞、誠におめでとうございます。国境を越え、長年にわたる宗教を基盤とした教育、文化活動の功績の賜であり、心よりお祝い申し上げます。

仏教に戦いの歴史はなく、新世紀を目前にした混沌の今、いよいよ心の豊かさが求められ、こうした時こそ信仰心は不可欠であると信じます。

今後とも、善光寺の皆さまのさらなるご発展と、ご住職のいよいよのご活躍を期待して止みません。

◇横浜市 山本邦法老師

『成寿』並『論文集』を賜り、有り難うございました。早速拝読と、パラパラ頁を繰っていただきましたら、二十四頁の「每朝聖徳太子さまの…」の文が目に入り驚きました。と申しますのも、九月初旬、高野山参拝に檀信徒の方々で行ってきたところで、途中明日香村の聖徳太子御誕生の地に建立された橘寺に寄り、仏法の恩人太子様の御遺徳を偲び、暫しの合掌、礼拝をしてきたからです。これも仏縁の賜、感謝申し上げます。

それに致しましても御老師様のご活躍ぶりは地球規模の広大なスケールで、只瞠目致すばかりでございます。まさに「世界は一つ」という御信念に微塵の揺るぎもなく、国際栄誉賞の御受賞もむべなるかなと存じます。遅ればせながら御受賞おめでとうございます。

今後益々のご活躍と貴山のご発展、延ては世界の平和、万民豊樂を祈念申し上げます。

◇東京都 窪田成円先生

この度は、スリランカのサラナンダ財団から国際栄誉賞を受賞され、おめでとうございます。善光寺育英会の黒田御住職様のなされておられる事業は容易な事ではございません。私どものサンスクリット語講座の講師のB・サンガ・ラタナテーク師も駒澤大学研究院生の折、奨学金を頂き大変慶んでおられました。

私どもは仏の文字の梵字を通して仏教文化の啓蒙運動をおこなっております。五年程前に駒澤大学研究院生のB・サンガ・ラタナ師が訪ねてこられて何かお手伝いをしたいと言われ、小さな講座でお釈迦様の話やサンスクリット語講座の指導をして頂いています。ただ今、スリランカのミヒンタレに日本仏教文化交流親善と梵字の記念館を建立中でございます。

善光寺様の益々の御活躍をお祈り申し上げます。

◇横浜市 高野義郎先生

『成寿』ならびに『論文集』を御恵送に与りまことにありがとうございます。早速拝読致しまして「国際栄誉賞」の御受賞をお祝い申し上げます、また御講演「心やわらかに今を生きる」に接する機会を下さいましたことに厚く御礼申し上げます。御兄君前角老師の思い出の記も心暖まるものでした。還暦を迎えられ御健勝にていよいよの御活躍をお祈り申し上げます。

◇愛知県 佐々木教悟老師

黒田御住職様がスリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」を受賞とのこと、心よりお喜び申し上げます。

尚亦、前角老師の三回忌に関する記事と共に、報恩坐禪の写真は肝に銘ずるものがありました。小生去る九月にワット・ラーチャプラナに安置されてある前任職、故プラクンチャラワット師の遺影に拝礼をとげて参りました。

◇新潟県 新井勝竜老師

此の度は長年の御努力に対し、「国際栄誉賞」を受賞されたとのことをお聞きし心からお祝い申し上げます。又『成寿』及び『論文集』を御恵送いただき誠に有難うございました。いつも檀信徒接化のための貴重な資料として活用させていただき感謝致しております。天候不順の折御法体堅固ならんことを切にお祈り申し上げます。

◇名古屋市 加藤邦康老師

スリランカより「国際栄誉賞」を受賞され、本当におめでとうございます。先般のタイ旅行に於いてタイにおいて修行されたことはお聞きしましたが、留学僧育英会を組織されておられることは全く存じませんでした。私も檀務以外に何かしなければと思いつつも平生の月経、法事、恒規、用僧に追われている始末にてなかなか余裕（精神的な）がありません。老師の益々の御活躍を念じて止まないところです。

◇東京都 中村正信様

この度の「国際栄誉賞」受賞、誠にお目出とうございます。永年に涉り国際的に大いなるご活躍をなさっておられますことの賞です。我々非力の者をお導き下さり、助けていただいている一人として心よりお祝い申し上げます。これからも更に更に御指導、御活躍を心から御願ひ祈念するものです。どうぞご健康にも一層のご注意あり、永く永く御活躍されることを祈念申し上げます。

◇鎌倉市 塚本啓祥先生

スリランカ・サラナンダ財団から国際栄誉賞を受賞されましたことは、仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学と、外国から日本への留学生を支援する育英事業を高く評価されたことに由るもので、多年に亘る御努力の賜物として衷心より慶賀の意する次第であります。今後健康に御留意され、一層の御活躍を祈念申し上げます。

◇東京都 斎藤 稔様

この度はスリランカのサラナンダ財団より栄ある国際栄誉賞を受賞なさる等、精力的な御活躍を心から感動いたし、又、うれしく存じております。どうぞ健康には呉々も御用心下さって、今後の御活躍を心から御期待申し上げます。

◇東京都 池上本門寺 市川智康老師

「国際栄誉賞」の受賞、お芽出度うございます。日頃の御丹精の賜と存じます。一緒に受賞しました石井英雄師外今後ともよろしくお願い申し上げます。くれぐれも御法体おいと下さいますようお願い申し上げます。

◇稲城市 鶴原鐵雄様

『成寿』を拝読の度に老師の仏教の国際活動を通じて世界平和を願う心がひしひしと伝わってまいります。併せてこの度はスリランカ・サラナダ財団より「国際栄誉賞」を受賞、誠にありがとうございます。

どうぞ健康に留意されますますの御活躍・御発展を御祈念申し上げます。

◇東京都 脇本雅子様

成寿、論文集を賜り、いつも御心におかけいただきますことを感謝を致します。

御祝の御歳に国際栄誉賞を御受賞、世界を舞台に御活躍遊ばされ、心よりお喜び申し上げます。御兄上様もさぞおよろこび遊ばされ先生を見守っておいでいらっしやいましょう。くみかわしお語りなさりたかった事とお寂しさお察し申し上げます。

論文集少しずつ拝読させていただいております。お若い方々の真摯さと熱意が伝わってまいりこのような若者が多く育って下されば、二十一世紀人類もこれからの思いで、御大変な先

生の今までのご苦勞がだんだん実を結ばれたのですね。ますますお忙しくおなりの事と存じます。これからでいらっしやいます。くれぐれも御身体を御自愛遊ばされ、お疲れの折はお休み下さいませ。御仏も休みなさいとおっしゃいます。どうぞご無理なさいませんように。

◇東京都 永平寺別院 ラブガマ・ナーラダ様

スリランカにおいて国際榮譽賞を受賞されたことを心からお祝い申し上げます。老師さまのご健康を祈念いたします。

◇横浜市 中村きくよ様

国際榮譽賞お目出とうございます。益々多々御活躍御苦勞様です。方丈様のお忙しそうなお姿が見えるようです。お体をご自愛下さいまして、いつまでもお元気で。重ねてお祝い申し上げます。昭和五十二年十月にお友達とスリランカに旅しました。お写真なつかしく、若き日の思い出、嬉しく楽しませていただきました。



読者のために

楽しく拝見

名古屋市
前田惠學先生

論文集、成寿、留学僧募集
要項など、有難く拝受申しま
した。

スリランカのお芽出度い国
際榮譽賞の記事、また色々
とお世話になっております私
のところの留学生が寄稿して
おります文章など、楽しく拝見
いたしました。

益々の御発展を念じ上げま
す。

不断の
ご努力とその蓄積

千葉県
椎名宏雄老師

この度はすばらしい内容に
満ち満ちた「成寿」及び従前
の号を遙かに凌駕する内容の
「論文集」を夫々御恵送賜り
厚く御礼申上ます。

既に百名に近い留学僧育英
事業や数々の国際交流、いず
れも我が宗門、大本山、否、
日本仏教の各機関でさえ出来
なかつた大勝躍であり、日本
では沼田さんの大事業と共に
世界に貢献した稀有の仏教活
動史、実践史として永く残る



大道晃仙老師（大本山總持寺副貫首）のお便りから



大茶

茶

茶師 晃仙 老師

www.daido-ko.com



晃仙 老師



偉業活動と確信致します。思えば、これほどの偉業を實踐されるのは、無論黒田老師の大力量に依るものではありませんが、それを発露される菩提心こそは、誌上には現われぬ水面下に於ける老師の不断のご努力とその蓄積によるものと愚考いたします。この度の大田原高校におけるすばらしいご講演と松本氏の評判からも、それは垣間見る思いに駆られました。どうか益々のご発展を心からご祈念申上ます。末尾ながら還暦はもう決してお若くはありませんので、決して御無理をなされず、尊きご法体くれぐれもご自愛

「生きる仏教」の實踐

和光市
鎌田良昭老師

をお忘れなきよう、併せて祈り上げます。

成寿及び論文集を御恵送頂
きご厚情のほど心より御礼申
上げます。貴台のご推進によ
り大事業が着々と進捗し素晴
らしい業績を残され「生きる
仏教」の實踐に唯々感激する
のみです。並大抵のご努力で
は果し得ない業績であり、心
より敬意を表する次第であり
ます。かつてご尊父様のご指
導を頂いた一人としてさぞお

慶びのことと存じ上げます。
慈眼視衆生のもと、今後も
益々御活躍下さいませよう念
じ上げ、お礼の辞とさせてい
ただきます。

活動の良き糧

栃木県
伊藤雄次郎様

この度は、「アメリカ禅特集
号」の貴重な実績に基く論文
集と「成寿」をありがたく拝
受いたしました。

那須水害以来久方振りの秋
空に心洗われる好日に貴院の
発刊書を御恵送賜りました
こと、先日のお坐蒲と共に改め

て感激いたしております。

「成寿」には御坊の「国際
栄誉賞」受賞の快報に接し心
よりお慶び申し上げます。

地の塩の如き永く地味なご
努力が海外で次々と開花して
参っておりますことは、精神
文化で遅れをとっている我が
民族にとって誠に偉大なる功
績でございます。

「成寿」には愚弟夫婦のパ
キスタン旅行記も掲載させて
いただいておりますので
併せて早速拝読いたし、私の
活動の良き糧とさせていただきます
と存じます。

偉大なる宗将

東京都
柴田秀晃老師

先般鷲見老師七周忌の御法
要にはご多用中にも拘りませ
ず御出向御随喜御苦勞様で御
座いました。その砌りお久し
振りの御拝姿うれしう御座い
ました。

貴宗将には益々御健勝にて
各方面に御活躍の御様子を拝
し、何よりとお慶びを申し上げ
ております。

成寿並びに論文集を御恵送
にあづかりまして有難う御座
いました。平素貴宗将の御活

躍に対し心打たれて居る者の
一人で御座います。並々なら
ぬ御苦勞の御浄行と何時も深
く感銘致しております。本当
に貴宗将は偉大なる宗将で
す。世辞抜きで誰れでも真似
は出来ません。

時節不順の折、御法身の御
大切を念じ上げます。

「へやさしさ」の仏教
の提案

東京都
吉津宜英先生

益々御健勝にて御活躍のこ
と、御慶び申し上げます。

この度、春秋社より『へやさ
しさ』の仏教』という本を出

版することになりました。

現代の日本社会は政治、経済の領域では勿論のこと、宗教や教育の分野でも厳しい状況が存在しています。一方で具体的な改革もしないで問題を放置している甘い現実も温存されております。このような現状を「優しい仏教」によって何とか打開する道はないかと考えて、今回の『へやさしさ』の仏教』の提案となりました。出来るだけ広く多くの方々に本書を読んでいただきたいと思っております。御高評価頂ければ幸いです。

順調に推移

大阪市 佃ナリス化粧品
社長 村岡弘義様

黒田御老師におかれましては益々御清栄の御事と大慶に存じ上げます。平素より当社に対し多大なる御高配を賜わり、誠に有難く御礼を申し上げます。お陰様で昨今の厳しい経済状態下順調に推移させて頂いております。

何時もお心にお掛け下さり感謝致しております。

時節柄呉々も御身大切に過ぎごしの程お祈り申し上げます。

心の糧

横浜市
土屋武彌様

九月五日の総代会にはお世話になり厚くお礼を申し上げます。総代会後、家内の叔母の他界で静岡へ、直後に私の伯母の死去で山形へ行ったりしているうちにお礼が遅れましたことお詫び申し上げます。昨年のも二月以来、多忙で最近御寺の諸行事に伺っても方丈様には満足なご挨拶も申し上げられずに失礼をしておりました。五日には釈迦殿にて久しぶりで心を落ち着か

せていただく機会を得ました。

毎朝晩、自宅にてお世話になった方々二十六人の霊に合掌しておりますが、日々の生活の中でほんの一時では十分に自己を無にすることはできない状況に、御寺で方丈様に御指導を賜ることが今の私（家内を含め）にとってどれほど心の糧になっているか感謝しております。

席上、開創三十周年記念行事の試案が諮られました。私自身にとっては洵に有り難いこと、昨今の社会情勢を考慮しつつも何とか成就して下さることを願っております。

また、国際賞受賞心より御祝詞申し上げます。

どうぞお体をお大切になさって下さい。

目を見張る思い

富士市
小田元秀宗師

老大老師におかれましては、益々法縁厚く日々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

この度は成寿と論文集をお送り下さり心からお礼申し上げます。成寿ではなつかしいお写真やヨーロッパの地名が沢山あり、うれしく拝見させ

て頂いております。それにしても老師様の何と忙しく檀務と世界各地での御活躍は誠に目を見張る思いで尊敬申し上げます。これらの御本は本日よりゆっくり拝読させていただきます。

父に対する良い供養

東京都
伊藤一章様

黒田様におかれましては益々ご清祥にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。

さて、先週末（九月初め）海外より帰って参りましたところ「成寿」拝受致しました。

拙稿ですのに、沢山のページを頂き申し訳なく思っております。この様なお取り扱いを頂き、父に対する良い供養になったと誠に嬉しく存じております。

黒田方丈様には長年に亘りいつも変わりなく我々家族に對しご厚情を頂き、一同心より感謝をしております。母も、お陰様にて充実して元気な毎日を送っているのも黒田方丈様のご厚情のお陰と感謝をしております。

精力的な
行動に心打たれ

東京都
渥美和也様

平素の御高配に感謝し、心から厚く御礼申し上げます。今回もまたすばらしい御本を頂戴いたし誠にありがとうございます。

黒田武志先生の精力的な行動にはいつも心を打たれます。先生の持ち前の信念、元氣、明るさは、多くの方々に影響を与えていらつしやることと思えます。私もその一人です。二十一世紀は靈性交流がより大切な時代になると思

います。

黒田先生が長年にかけて育てられている善光寺留学僧育英会は必ず世界の扉を開ける時代を開ける重要なものであると思えます。どうかこれからも一層の御自愛と御活躍を祈念申し上げます。

おもいやりや
愛情に感動

東京都
大濱 正様

成寿及び論文集をご恵送頂きましてまことに有難うございました。

方丈様にはお元気ですますますお忙しくご活躍のこと何よ

りとお慶び申し上げます。

留学生支援にスリランカ国よりの「国際榮譽賞」ご受賞お目出度うございます。日頃布教活動に大宗教家への道を着実に進んでいらっしやることがわかります。

母校での講演「心やわらかに今を生きる」すばらしいお話で、又わかりやすく、全生徒さん達が感心をもって聞かれたことでしょう。親孝行、野口英世と母、姨捨山の親子の話、一期一会なども。

伊藤一章氏の「父三喜庵先生のことの」。錦戸節子さんの「仏使錦戸新観先生のこと」いい記事でした。お二方共先

生を尊敬しご家族が皆様すばらしくおもしろいや愛情に感動する記事でした。有難く拝見しました。

アンコール取材が縁

在ネパール
樋口英夫様

現在（九月中旬）ネパールに滞在しております。あれ以来、アンコールを撮り続けているのですが、内容を深める

為にはヒンドウの画像をマスターしなければなりません。文化庁がそのところを理解してくれ、芸術家海外研修員として、三カ月間勉強す

るチャンスがくれました。カトマンズにある大学の先生と一緒に寺院をまわり、ヒンドウの図像学の講義を受けております。きっかけの面白さをつくづく感じます。あのときアンコール取材の声が私にかかったことよって、現在この地にいるわけですから。きっかけを与えてくださった黒田さんには大変感謝をしております。

留学生に救済の手

名古屋
大野栄人先生

此の度は「論文集」及び「成
寿」をお送り下さいまして厚
く御礼を申し上げます。

今、アジア全体が経済危機
状態にあります。私方の大学
院生には私も援助しておりま
すが、善光寺御老師のまねは
出来ません。善光寺様の善行
によって、多くの留学生が救
われております。私方の留学
生にも救済の手をさしのべて
下さいまして心より御礼申し
上げます。

御山内の皆様様、どうか御
身御自愛下さいますよう切に
お祈りいたしております。

深い御縁を感じて

つくば市
竹村牧男先生

このたびは成寿誌並びに育
英会論文集を御恵送賜り、誠
に有難うございました。スイ
ス・ローザンヌはさぞ美しか
ったことでしょう。また、論
文集で、お兄様の本来の面目
に相見させていただきまし
た。小生は、秋月龍珉先生の
弟子なので深い御縁を感じて
います。徹玄さんには四、五

年前チューリッヒ郊外でお会
いしています。向こうは解ら
ないと存じますが。その時、
立派な方だと思いました。本
当に有難うございました。厚
く御礼申し上げます。

中東の情報をご提供

横浜市
遠藤晴男先生

このたびは論文集と成寿を
お送りいただきまして有難う
ございました。論文集では偉
大な足跡を残された前角博雄
老師の業績、それに負けず劣
らず良い仕事をされてこれら
の方丈のお考えを知って、感

動しております。

成寿で報じられている「国際榮譽賞」受賞おめでとうございませう。母校大田原高校での創立記念講演にも教えられることがたくさんございました。改めてご厚情に御礼申し上げます。

二月末にオマーン（商工省顧問）から帰国し、四月末に依頼のあったUAE（アラブ首長国連邦）国立大学で学生向け講義と教授向けセミナーをこなして参りました。私には中東の現場の話しかできませうが、二十数年間見てきたものを日本人々になんとか伝えるべくまた活動を始めま

した。私の在任中に中東に来ていただけませんでした。ご興味があれば情報はご提供できるかと考えております。

以上取り急ぎ御礼まで。先週親友が突然亡くなり、ご連絡が遅くなったことお詫び申し上げます。

立派な後継者

東京都
榎林津龍様

此の度は「論文集」並びに「成寿」を御惠贈有り難く拝受厚くお礼申し上げます。

榎林が生前に「黒田老師は立派なお方だよ」と申してお

りましたが、立派な後継者がおられて、白純老師要の扇子が広がってすばらしいことと感激いたしております。

有り難うございました。

心から合掌

北海道
古谷ミエ様

成寿のご本と論文集を有難くお受取り致しました。毎日毎日一生懸命におはげみのこと、唯々心から合掌のほかございませう。ご苦勞さまでございませう。そしてありがとうございます。

ご本のページをめくる度に

何のかいしゃくも出来ないくせに心のよごれが洗われるようになります。ひとりでに涙がこぼれてきます。有難いご本にふれさせて頂いた喜びご本にありがとうございます。

善光寺さま、ご立派な方丈さま、いつまでもお若くお元気でおつとめ下さいますよう心からお祈り申し上げます。

仏教発展に
大いに役立つて

小野市
高橋鐵弦老師

この度は貴重な論文集と成寿をご恵贈賜り誠に有難く御礼申し上げます。いなかの

小寺で閑寂な土地ですと交流も少なくこういう貴重な内容のしかも外国での仏教、禅の生活を知ることができ、本当に心に有益な求道心の糧となります。

透析歴十八年、なんとか合併症など多少出ながらも今日まで生きることができ、これも又有難い、かけがえのない人生かと存じております。今では遠方の遊行はもとより外国などとても行けない身の上ですので、本山時代のタイ・パクナムの留学は貴重な体験でありました。本当に有難う存じました。

善光寺の留学制度によって

どれだけ求道の有意の青年に、又仏教発展に大いに役立つておることはこのような立派な論文を読んで有難く、希望もてることであります。

ご老師の一層のご健全を祈っております。

人生を有意義に楽しく

横浜市
渡辺豊子様

論文集第三巻ご上梓おめでとうございます。お忙しいなかを早速お送り下さいまして有りがとうございました。留学僧育英会の発足は昭和六十年の由、暢気な私、その頃何

をしていたのかと反省しております。これから少しづつ読ませていただき残り少ない人生を有意義に楽しく過ごしたく思っております。どうぞお導き下さいますようよろしく
お願い申し上げます。

大切な教科書

京都府
村上博中老師

成寿とよい論文集とよい誠に誠心こもった雑誌ではなく私にとりましては大切な教科書と存じております。漸く第一回目の乱読を終わり、ポツポツ再度読熟すると同時に研

修部面をノートに記載して時を見ては勉強させていただこうと始めかかっております。横着なことですが枕元に二冊を積んで頑張りますので又どうぞ御支援下さい。

お心にかけて
いただき嬉しく

東京都
黒田 肇様

方丈様にはお健やかに過ごしのことと存じます。

先日は父にお花をお供え下さいましてありがとうございます。いつもお心にかけていただき嬉しく思います。昨日は母のところに行きましてこ

のことを伝えましたら大変に感謝しておりました。早くお礼をと思いながら体調を崩してしまい遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

無常感は一としお

東京都
野火 晃様

成寿と論文集ありがたく頂戴いたしました。心より御礼申し上げます。いつもながらの見ごたえ、読みごたえ……。ただただ感心するばかりです。それにしても、広く深い善光寺の実践行。本当に頭が下がります。奇跡のようにさえ思

われます。

ひるがえって私。この七月に古くからの友人で家族ぐるみの付き合いだった加藤子明君が末期ガンで亡くなりました。その臨終から通夜、密葬ダビと、最期の行を共にしましたが、やはり悲しいものです。無常感はひとしお。ますますのご活躍を祈り上げます。

襖絵と

一部壁画を制作中

浦和市

伊沢正男様

本日は本を二冊送って頂きありがとうございます。

今、私は佐久市にある曹洞

宗龍雲寺の客間に襖絵と一部壁画をローケツ染で制作中です。十月完成を目指し頑張っております。機会がありましたら御老師にも一度見て御批評賜りたく思っております。

心して読み

横浜市

木暮子郎様

成寿ご恵送賜り有難うございました。毎々立派な内容、心して読まさせて頂いております。前橋市におります姉（八十歳）の長男が東北福祉大学を出て三十年間地元の前橋で

福祉の仕事に従事しており、

又その娘がごとし東北福祉大学を卒業し、更に現在筑波大学の大学院に進学の上将来福祉の仕事を目指しております。東北福祉大学萩野学長様のお話を感銘深く読みまして、機会がありましたら本文を甥やその娘にも読ませることに致します。

ご方丈様のご健康と善光寺のご発展を祈ります。

ロス禅センター

三十周年

秋田県

渡辺紫山宗師

いつも成寿御恵送頂きあり

がとうございます。ロス禅センター三十周年、心より御祝い申し上げます。今、十五周年当時の記念誌、修行当時の写真集を見えています。マウンテンセンター晋山の天心師は、お別れパーティーでエレキギターを演奏。『シザン No.1 チョッパー』というオリジナル曲を歌って下さいました。清泉さんのやさしさも忘れられません。隠寮では、前角老師とよく『うどん』を作って食べたものです。老師お手製の『だし汁は』格別でした。禅センターのポコ・ア・ポコの御発展を懐心より祈り上げ、御礼一筆まで。

充実したご活躍に感銘

横浜市
金谷 研様

成寿拝見しました。スリランカにおける受賞、ロス禅センター記念行事への御参加、スイス・ローザンヌへの贈呈式参加、そして母校大田原高校での記念講演と、盛沢山、充実したご活躍に感銘致しております。大田原での水害のニュースで善光寺を思い出していました。いろいろ大変だったと思います。文中で「黒田、おまえは六十年何やってきたんだ？」と

聞かれたら「別に何もやってないよ」と答えますという箇所が素晴らしかったです。僕なんか実際何もしていないのですが、今は「音楽を楽しんできた」と答えるような毎日です。聖歌隊で毎週歌い、純粹に美しい言葉を楽しんでいます。

国境を越えた 禅の教えの輪

横浜市
石原孝哉先生

成寿及び論文集拝読いたしました。今回の「アメリカ特集」は大変興味深く読ませていただきました。前角博雄老

師の先駆的な偉業が多くの立派な後継者によって継承され、アメリカに禅がしっかりと根付いている様子が今回の論文集でよく理解できました。

また世界十三カ国に日本の留学生を送り出し、九カ国・一地域から外国人留学生を受け入れ、その数八十人以上という黒田老師の多年に亘る努力にも本当に頭の下がる思いです。国境を越えた禅の教えの輪がさらに広がることを祈っております。

一期一会

滋賀県

西村恵信先生

貴山益々ご清祥の趣き大慶に存じます。花園大学出身の貴会留学僧洪在成師を通じ論文集をご恵投頂き厚く御礼申し上げます。ご令兄前角博雄老師にはご生前一度だけロスアンゼルスで相見の機を得ました。洵に一期一会となりましたが、お誘い頂いた鈴木格禅老師（小生の朋友）のお陰です。貴会のご事業に心より敬意を表しつつ、先は寸楮を以て御礼に代えさせていただきます。

なんとなくしんみり

金沢市

島 岩先生

成寿及び論文集をお送りくださいましてありがとうございます。〔九月上旬〕鶴見で学会があり阿部慈園さんともお会いしましたが、その折りにまた別の人から、東北大学の学生でマドラスで勉強していた三上君（第十二回生の三上俊弘氏）が、交通事故で亡くなっているという話を聞き、金沢に戻ってみると、この論文集が届いていて、それに三上君のものが掲載されて

いたというわけで、なんとなくしんみりしてしまいました。最後に私のものも、特別寄稿という形で掲載いただきまして誠にありがとうございます。

大切に拝読

東京都
永井光延様

過般は成寿並びに論文集をお送り下さいまして、洵に有難うございました。「成寿」誌、これだけのものを季刊で出されることの大変さが分かりますだけに、いつも畏敬の思いをもって大切に拝読させて頂

いています。特にご老師の御文章は毎号楽しみにさせて頂いています。

留学僧を派遣し続けておられるご善業は、み仏の嘉せられる所と存じております。益々のご健勝を心からお祈り申し上げます。

小学校教育施設
援助活動

町田市
齋藤謹也老師

成寿及び論文集ご送付頂き有難うございました。黒田老師のご道心の厚さに深く感じております。又留学僧育成事業への御尽力には頭が下がり

ます。私も少しは見習いたいと一昨年、ネパール・ミカの会を結成し、釈尊の誕生地ルンビニ地区の小学校教育施設援助を中心とした活動を始めました。始めたばかりですが、老師の跡に学ばせていただきながら、継続したいと思っています。

生きる喜び

千葉市
藤田正子様

成寿、論文集が届きました。すぐにページを開き、なつかしい伊藤先生の御作品の数々が目に止り、又々なつかしさ

と感激でしばし、胸が熱くなりました。

日々の忙しさの中で先生のことも時には失礼ながら遠くになりがちになりそうな時に、貴寺のこの御本を拝見しますとあの頃の先生の熱っぽい御姿や言葉などが私の脳裏に蘇り、生きる喜びを感じます。先生も貴寺のこの偉業をどんなにか喜ばれていらつしやるか。先生が生きていらつしやる時に皆と一緒に善光寺様に行きたかったと感じて止みません。これからもどうぞよろしく御指導下さいませ。ありがとうございます。

仏法の醍醐味

春日部市

服部純子様

成寿と論文集を御恵贈下さいまして有難うございました。成寿山善光寺の暖かさがしみじみと伝わってまいりました。私の狭い我見を打ち破りて下さり、暖かく包んで下さっているその大きさに頭が下り、同時に自分を知ることができました。黒田先生の講演「心やわらかに今を生きる」はまさに仏法の醍醐味を感じました。本当に有難うございました。

懐しく切なく
偲びつつ拝見

大宮市

大場満洋老師

いつも御法愛御教導を忝うし誠に有難く存じます。今般特に立派な記念誌と成寿を御恵送賜り厚く御礼を申し上げます。アメリカ特集は一層興味深く、かつ「前角先生」を懐しく切なく偲びつつ拝見させて頂きます。未熟さゆえに接しきれなかった老師の御遺徳を改めて味わわせて頂きたく存じます。

質の高さには
いつも感心

横浜市
渡辺孝章先生

成寿を御恵送賜りありがとうございました。早速拝読させていただきます。早速拝読させていただきますが、いつもながらの方丈様の多方面での御活躍に敬服致しております。

母校での講演抄録では旧制中学から新制高校、機関車の汽笛、伝統行事等々、我が北海道の母校を思い出させて頂く内容で、暫くの間、物思いに耽けさせていただきますました。

この本の編集、文章、写真、イラスト等の質の高さにはいつも感心致しております。これからも益々御発展されますよう心よりお祈り申し上げます。

実際のご苦勞は
更なることと

横浜市
高橋明達様

成寿と論文集をお送りいただき有り難うございました。

このような立派な本の背景に日頃のご尽力、御苦勞があることは僥ふことができますが、実際のご苦勞は更なることと存じます。私は今、深夜

の電気工事現場で交通誘導もして何とかやっておりますが、まだまだ生きること、自分を生かし、社会からも生かされることの意味を理解しておりません。先生の足跡を励みに今世を精一杯生きたいと思えます。

時折淋しさが
押し寄せて

茅ヶ崎市
波多野洋子様

すばらしい御本をお送り下さいましてありがとうございます。楽しみに拝読させていただきました。私共、主人を亡くして早半年が

過ぎ少しづつ平穏な日々が戻って来たようにも感じますが、時折淋しさが押し寄せて参ります。これからは前向きに明るい生活を心掛けていこうと思っております。

存在としての孤独感

横浜市

菱沼和子様

先日は主人の七回忌法要をお陰様で無事済ませることができ、深く感謝しております。又子供達へのお心遣い恐縮しております。良き夫の死を見送って生き続けることがこんなに存在としての孤独感を深

めさせて行くか身を以て知った六年間でした。最初、お参りはお別れの確認に訪れてました。今は少しでも主人の供養して残された子供達と三人で精一杯生きて行こうと思っております。いつも私達三人に何かとお心に掛けて頂き有難く思っております。これからも主人の供養宜しくお願い致します。

娑婆こそ本当の学び舎

栃木県

大室尚昭様

先日はごくろうさん。我々同級生には偉人が三人居る。

黒田老師、伊藤教授、滝沢院長。紫塚の学び舎に居た頃は三奇人だった。

娑婆こそ本当の学び舎である。三人は娑婆で研かれた。経済効率を捨て、今こそ人間復活を願うべきである。

今後ともよろしく

東京都

大谷哲夫先生

論文集並びに成寿拝受させていただきます。有り難く拝読させていただきました。本年四月一日をもちまして副学長を引き受けざるを得ない事情となりましたが、こん

なに多忙とは思ってもみませんでした。拙僧の弟子・有為も正式にマウイの満徳寺に赴任致しました。今後ともよろしく御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

終生忘れ得ぬ
御厚情に感謝

上田市
宮入紀雄老師

在本山中は大変お世話になり、種々御指導御鞭撻下さいましたこと終生忘れ得ぬ御厚情に感謝申し上げます。早帰山してより五十日が過ぎようとしております。その間組寺寺院様の施食随喜有り、又月

遅れ盆会が有りで時の流れに追いやられていました。ふと気付くと浦島太郎、五年間のブランクの間に上田周辺も変化しておることに気付かされています。書物送付の御礼に代えます。

娘達にも是非読ませたい

横浜市
扇元靖子様

成寿ご恵与いただきましたして誠に有難く、心から御礼申し上げます。加えてこの度は立派な論文集まで賜り恐縮に存じます。時間をかけて拝読させていただきます。そして娘

達にも是非読ませたいと願っている、いろいろ人生観を学ばせていただく所存でございます。ご発展とご活躍を祈り上げます。

あの世でも倅せな境涯

つくば市
山口哲雄様

先日はご懇切なご接待を頂き、厚く御礼申し上げます。

家内ともども貴重なお話しに、耳傾けさせていただき、また奥様まで御同席賜り感謝のいたりでございます。

途次、伊藤先生の面影が浮かび、流したこととなかつ

た涙を不覚にもお見せして、お見苦しかったこととお詫びいたします。

「三喜庵先生の百濟觀世音、まことに先生の終生の傑作にして、香氣に包まれたような格調の高い作に、改めて驚嘆いたしました。

先生は、小生から見れば人生の達人であり豊かな生を生きた努力の人だったと思っております。

幽明とを違えたとはいえ、黒田方丈様のご加護もあって、あの世でも倅せな境涯を得られているのではないかと想像しております。

今後ともご教導を賜わりま

すようお願い申し上げます。

「五つの心」を胸に

藤沢市
蓮実正道様

同窓会の折には大変お世話になりました。又この度は貴重な御本を戴きありがとうございます。

日頃生臭い商売の真只中におりますと不惑の歳を遠に過ぎていながら、他人を怨んだり、嫉むんだり、魂の汚れることばかりしているような気がします。そんな折、先生の大田原高校での講演「心やわらかに今を生きる」を読ませて

戴き、大高の在校生と一緒に初心に返って「五つの心」を胸に、一期一会を大切に、心ときめかせて生きて行きたいと思えます。ありがとうございます。

改めて感心

東京都
萩原雄二郎様

先日は早速貴重な書籍をお贈り頂きまして、有難うございました。洋の東西を問わず、大変な御活躍の様子が手にとるようになわかって、改めて感心させられました。大田原高校の記念講演も素晴らしいも

のでした。今の若い高校生に
じつくりと考える機会を与え
たことでしよう。

人生の黄昏を迎えて、小生
自身も「心やわらかに」残り
少ない人生を生きて行きたい
と思っております。

パワーに圧倒

東京都
中島大成宗師

先日は、スリランカのご縁
にてお招きをいただきました
誠に有り難うございました。
当日突然に人数が増えました
ご無礼を致しましたにもか
かわらず、誠に過分なるおもて

なしをいただきましたこと心
より御礼を申し上げます。ス
リランカでお会い致しました
時も、良くお話になり良く召
し上がり良く飲まれるそのパ
ワーに圧倒されましたが、こ
の度もその時を上回るエネル
ギーの放出を目のあたりにし
て驚くとともに、すっかり楽
しいひとときを過ごさせてい
ただきました次第です。

この次は、是非奥様とともに
にこちらの方にもお出ましを
いただき、ご縁のニャーナ・
ラトナ師とともに卓を囲ませ
ていただければと仲間とともに
考えております。その折に
はどうぞ宜しくお願い申し上

げます。

素晴らしい年月の
重みを痛感

宇都宮市
大嶋 正先生

成寿秋季号並びに育英会論
文集を有難うございました。

前二十七巻の三喜庵先生追悼
の記事を始め、各巻の充実は
申すまでもありませんが、第
二十八巻は単に横浜善光寺住
職としてのみならず、仏教伝
道者として留学僧の育英事業
は言うに及ばず、国際荣誉賞
の受賞、ローザンヌ大学への
仏像・仏書の贈呈などなど国
際的な活躍の広さに感銘し

た次第です。

なお、今回は、母校である
栃木県立大田原高校の創立記
念日に記念講演の講師として
招かれた際の講演要旨、又同
日生徒と共に同席した同級生
(昭和三十一年三月卒)の一
人松本君の感想記事、更に、
現在ニューヨーク州立大学教
授で既に大高で記念講演の講
師にもよばれ、又成寿にもよ
く興味深い旅行記・今回はガ
ンダーラの旅を寄せたやはり
同期生の伊藤君の記事で、一
度に四十数年前の諸々のこと
共を思い返すと同時に、素晴
らしい年月の重みを痛感し、
悦に入った次第でした。

末筆ですが、ますますのご
活躍を心よりお祈り致しま
す。

成道会にお参り

横浜市
桜井芳江様

昨日は成道会にお参りさせ
ていただき誠に有難うござい
ました。

本堂も不動殿も曼荼羅の中
におりますようで、お導き下
さいました御仏様に感謝して
おります。又心の糧となるお
話をいただき、お食事を賜り、
その上お土産まで頂戴いたし
厚く厚く御礼申し上げます。

阿字の里にお還りになられ
た伊藤先生の貴重な絵皿有難
く、家宝にさせていただきま
す。

大田原の方丈様にもいつも
大変お世話になっておりま
す。毎年二月か三月に横浜敬
神会の追川様や兄夫婦とお参
りさせていただいて十六年にな
ります。御実家と伺い本当
に驚きました。

今後共御指導賜りますよう
お願い申し上げます。

この上なき幸

足利市
鵜田 力様

黒田様におかれましては、いつもながら内外共に御活躍のほど、小生心より感動申上げております。このような方とお付き合いできますことをこの上なき幸と思っております。又、いつも冊子を御恵送賜りありがとうございます。ライオンズクラブ等へ持参して皆様に見て頂いておりません。

本日賛助金をお送り致しました。もつと黒田様の為に御

力になりたいのですが、田舎の小店ですのてなかなか思うようにはなりません。貧者の一灯と思し召して育英会の活動に御役立て願えれば幸いです。今後の益々の御活躍を期待申し上げます。

二伸、昨年は黒田様には国際的な大変な表彰を受賞されおめでとうございます。

★横浜市 上坂元一人様

(アジア文化交流協会)

成寿、論文集拝受、有難うございました。一山を挙げての多彩な寺院活動と留學生派

遣事業の卓抜せる功業に對し心からなる敬仰と賛意を表

し、任職老師始め皆様の益々のご清祥をお祈り致しております。

★東京都 関根瑛應様

(日本仏教徒懇話会)

論文集を御恵送賜り有難く厚く御礼申し上げます。巻頭言の前角老師のお話、深く感動致しました。また、貴重な数々の論文、これから勉強させて頂きます。御会の有意義な御活動に心から敬意を表しますとともに、私もささやかな活動の参考にさせて頂きたいと存じます。

★東京都

石田 昇様

(妙智會教団)

この度は貴重なご本を下さ
いましてまことに有難うござ
いました。先生のたゆまぬご
活動により、各国の若い方々
が大きな希望と強い誓いをも
たれて修行をなさっておられ
ることに大変意義深いことと
思いますと同時に、先生の御
尽力に対しまして心から感謝
申し上げる次第でございます。

★東京都

水野弘元先生

成寿と論文集を御恵送に預
かりまことに有難く、ゆるゆ
ると拝見いたします。個人で
留学育英のことを、宗派を問

わず、国籍を問わず、世界諸
地域に仏教のために尽くされ
ることは他に類を見ず、深く
感謝致します。一層の御活躍
を祈念します。

★東京都

櫻井秀雄先生

論文集、成寿御恵送頂き厚
く御礼申し上げますと共に、
愈々御清栄のほど切に祈念い
たします。

★福井県

木崎浩哉老師

成寿をお送り下さいまして
誠に有難く合掌拝受致しまし
た。厚く御礼申し上げます。
ご老師のお元気で海外に雄飛
されておられるお写真を拝

し、大変なつかしくうれしく
思いました。

★東京都

飯田利行老師

成寿並びに論文集恵贈に接
し厚く御礼申上ます。愈々御
発展のほど祈り上げます。

★三鷹市

早田啓子様

成寿と論文集を確かに拝受
いたしました。有難うござい
ました。方丈様はじめ皆様御
元気で御活躍の御様子嬉しく
拝見いたしました。

育英会のますますの御発展
をお祈りいたしております。

★長崎県

須田道輝老師

成寿、論文集有難うござい

ました。読ませて頂き、ただただ貴師の御力に敬服するのみです。永く法体健やかに御精進されることをお祈り致します。

★東京都 今井康雄様

(株)日本文化資料センター

立派な論文集をお送り下さりありがとうございます。御令兄の話を拝読しました。全冊はすぐには読めませんから少しずつ拝読するつもりでおります。御寺の御隆盛と皆様の御多幸をお祈り申しあげます。

★山口県 荒木茂樹老師

いつも成寿御恵送戴き有難うございます。御繁忙の法務の中、常に広いお心で国際的に御活動されるお姿を拝し、只々敬服賛仰します。成寿完読、これより論文集を熟読致します。

★船橋市 久保田展弘様

成寿及び論文集ご恵与賜り恐縮です。ありがとうございます。世界に広がる禅の中心的な活動を果たされているご日常に敬意を表しますとともに、感謝申し上げる次第です。今後とも御教導の程、よろしくお願い申し上げます。

★東京都 小川英雄先生

(日本オリエント学会)

成寿と論文集を送って下さり有難うございます。大変立派なご本で早速拝読させていただきますました。慶応の学生にも読ませようと思えます。

★名古屋 岩田文有老師

成寿と論文集をお送り下さりまして誠に有難く厚く御礼申し上げます。全日本仏教会も貴山の偉業はよく知る処であり深く感謝し、いよいよの御発展を祈念いたします。

★豊田市 岡島博司様

この度の栄誉賞授与誠にお

めでとうございます。論文集と成寿を送って頂きありがとうございます。拝読させていただきます。

★東京都

増田宗房様

この度は立派な論文集御恵贈賜り誠に有難う存じます。善光寺留学僧育英会のすばらしいご活躍のご様子、うれしく拝読させていただきました。この後もさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。

★保谷市

錦戸節子様

成寿と論文集本日頂戴いたしました。「心やわらかに今を生きる」心の糧となる素晴ら

しいお話と内容に、これから私の人生のお手本とさせて頂こうと肝に銘じた所でございます。

★京都府

田中智誠老師

論文集と成寿を受け取りました。量質共に充実して装丁も美しい大変ご立派なご本です。『中外』で拝見しましたが、二十一世紀へ向けて有為の人材が育成されていることに、意義深い継続性のある育英事業であることが高く評価されています。ご同慶に存じ上げます。

★東京都

長沼基之様

此の度は成寿、論文集を御恵贈賜り、誠に有難うございました。謹んで御礼申し上げます。

★松本市 小笠原隆元老師

成寿拝受、深謝申し上げます。正に菩薩の願行を具現しておられますことに敬意を表します。ダンカン隆賢に対する留学僧育英会奨学生の採用に御礼を申し上げます。

★横浜市 木村尚三郎先生

論文集と成寿をありがたく拝受いたしました。いつも御配慮をいただきあつく御礼申し上げます。国際的な御活躍につねづね大きな敬意を抱い

ております。スイス・ローザンヌ大学寄贈式の御一文にはとりわけ心を打たれました。ありがとうございます。

★小田原市 松蔭英竜老師

成寿御惠贈頂きましてありがとうございます。老師の御講話中の、天海大僧正が徳川家康に送った言葉、私も大変ありがたく今後の私の心の中にしつかりと受け止めておくよう致す所存にございました。

★船橋市 村田一夫様

成寿並論文集を御惠贈に預り恐縮に存じます。御厚情有難く御礼申し上げます。世界

の諸国を歴巡されておられますことを窺い知ることができ、方丈さんの精力的な布教には、いやはやなんとも頭が下がります。

★東京都 小林貢人老師

成寿ならびに論文集拝受、毎回見事な成果、感服しております。有難うございました。

たくさんのお便り有難うございました。

○ お詫びと訂正

錦戸節子様御執筆のへ父を語るの中で、脱字と誤字がありました。謹んでお詫び申し上げます。

一四二頁下段(詩)

身をも心もみ仏に

おまかせ預けし身にあれば

……

留学育英生からのたより

オーストリア・ウィーン大学

第13回育英生 久間 泰賢

黒田武志老師

前略 今年の日本はおかしな天気が続いているそうですが、つつがなくお過ごしでしょうか。

先日、『成寿』及び『論文集 Vol.3』を拝受しました。老師がお元氣でご活躍されているご様子、また他の留学生の方々の様子などを拝見させて頂き、大変うれしく存じます。

私の方は留學生活も一年が過ぎ、異なる文化、生活習慣にもなれ、お陰様で快適な研究生生活を過ごさせて頂いております。できれば来年一杯を目途に博士論文を完成させるつもりで勉学に励む所存です。どうかご自愛下さいますよう。 草々



留学育英生からのたより

スイス・ローザンヌ大学

第12回育英生 計良 竜成

黒田武志様

拝啓 益々御健勝のことと存じます。

さてこの度、『成寿』第28巻と『論文集』 Vol.3を送って頂きどうもありがとうございました。いつも楽しく読ませて戴いております。スリランカのサラナング財団から「国際榮譽賞」を受賞なさったとのこと、本当におめでとうございませう。黒田老師がこれまでなさって来たことは、国際的に評価されて当然だと思いますし、またこの先、もっと評価されるであろうと確信しております。

また今回送って頂いたものの中には、昨年のスイスでの仏像、仏書贈呈式の特集も含まれていましたが、黒田老師と江川監院老師がスイスにいらしてから、もうすぐ一年が経ようとしていると考えると、月日が流れていく早さに、最近全く驚かされます。寄贈していただいた書籍は登録に随分とてこずっているようですが、もうすぐお目見えするだろうと思います。

私の方は、この五月に家族がスイスに来てから、約四カ月が過ぎ、子供達もようやくスイスでの生活に慣れてきたようなので、やっと一安心といったところです。研究の方も、この春にこれまで3、4年掛けて作ってきた索引(黒田老師のところにも届いたと思います)を、無事出版することができ、雑用から解放されたので、今は自分の博士論文の仕事に集中しております。あと2年で完成させることができるかどうか、少々不安ではありますが、とにかく、自分の出来ることは全てやろうと思っております。

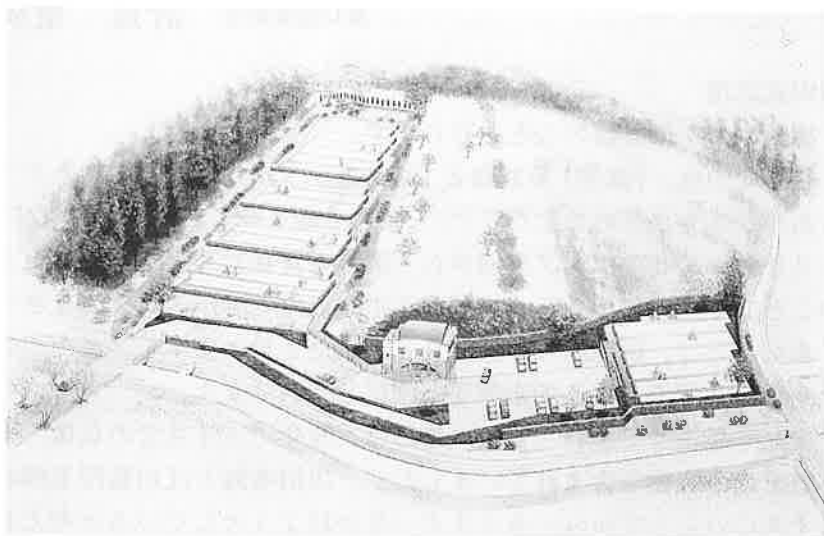
それでは、皆様によろしく。またお便りしたいと思います。

敬具

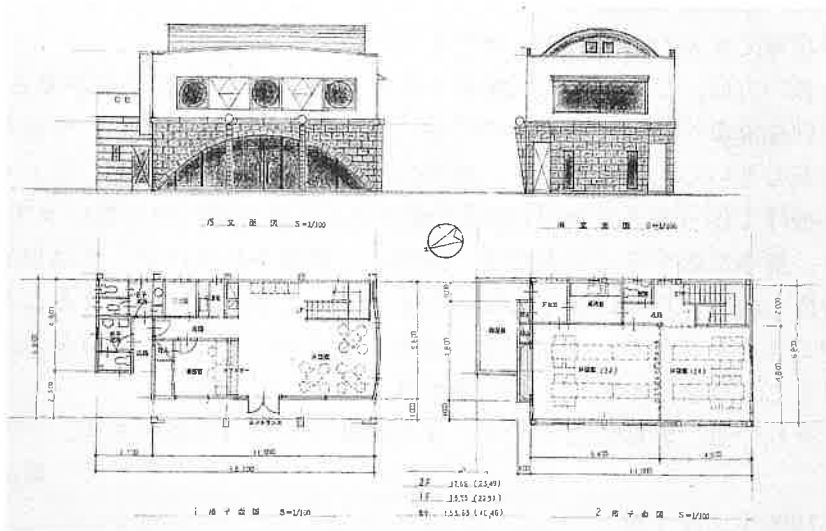
1998年10月4日

善光寺墓地「横浜やすらぎの郷」

完成予想図



設計図





Foreword

The chief priest of Zenkōji – Temple
Takeshi Kuroda

Under the slogan along with Buddha's teachings, which is we should contribute to "the flourish of Buddhism and the peace of the world", and go back to Shaka – mun through the founder, we can reach the day of the 30th anniversary of Seijuzan Zenkōji – Temple and of the 15th of the Scholarship Foundation.

This is due entirely to Rev. Shaka – mun buddha, Rev. Jōyō, Rev. Jōsai, seccessive reverends, and Buddha's divine protection. Also I think this is the result of kind help of our supporters and many people. I thank these people from bottom of my heart.

As the memorial event of the 30th anniversary, we visited to China this April. Dōgen, the founder of Sōtō sect, was 24 years old when he went to China to study by the Japan – Sung trading boat in 1223, the 2nd of *Jouō*. He called on Rev. Nyojō of Tendōji – Temple in Taipaishan two years later, trained himself hard in Zen meditation and attained spiritual enlightenment by the words "Free from body and mind".

Rev. Dōgen no sooner returned to Japan in 1227, the 1st of *Antei*, than he declared his spiritual enlightenment in China, said he learned the mind of softness, which was getting free

from whatever attachment in mind and body, this was the mind of Buddhists.

During our visit in Chaina, we entered and prayed in Tendōji—Temple in Ningpo. Rev. Shūshōkanninrōshi met us warmly and gave us kind hospitality. We prayed for the prosperity of Zenkōji—Temple, the devotion of our supporters and our good journey, and then held the memorial service for successive spirits of our supporters and relatives in Daiyūhōden of Tendōji—Temple.

In Beijing, we had a visit to the greatest hospital in China “China—Japan Friendship Hospital”, which building late Kisaburō Ito had designed, who was an illustrator for “Seiju”.

Next day, we visited to Kouji Kōsaiji—Temple where was Chinese Buddhist’s Society and held the memorial service for the founder of Seijuzan Zenkōji—Temple, late Mitsuyoshi Muraoka’s 23th anniversary of his death, late Ai Muraoka, late Yūsho Muraoka and late Kisaburō Ito surrounded by the 18 arahans in Hōdōjin of white shinning balustraded Daiyūhōden. We were filled with divine exaltation.

I said to myself, I never create any evils, never attach to life or death and train myself harder for devoting to people.

“Torch of Zenkōji—Temple is twinkling.

The virtue of Buddha leads us to Zen of Seiju”

Toward this aim, to spread Buddha’s teachings to the world, I swear I should start again from scratch.

編集後記

賞と永年の労苦をたたえ表彰されました。善光寺にとりましても嬉しいこととございました。

▼四月下旬、記念事業「やすらぎの郷」の建設工事にとりかかりました。約半年ほどで完成の予定です。

▼四月中旬、開創三十周年を記念して道元禅師ご修行の地中国・天童寺へ行って参りました。この模様は次号でご報告いたします。

▼中国・上海人民美術出版社の周穎先生に、十八羅漢を描いていただきました。グラビアで紹介しました。開創三十年を記念するにふさわしく、善光寺の宝物が一つ加わりました。周先生には心より御礼申し上げます。

▼年末に行われたタイ国ブダモントンの経蔵落慶式典には、中外日报社の形山記者が同行され、本誌にレポートを掲載させていただきまし

た。黒田住職の報告と合わせてお読みいただければ、尚一層タイ国の国を挙げての慶祝ぶりがおわかりいただけると思います。

▼記念号のため特集が二本立となり、『成寿』はかつてないほどのページ数となりました。これも皆様方のご支援の賜と御礼申し上げます。

▼み仏に感謝の気持を忘れない日々でありたいものです。

▼新緑の季節を迎え、皆様におかれましては愈々ご清祥のことと存じます。『成寿』29巻をお届け申し上げます。

▼本年、善光寺開創三十周年を迎えるにあたり、来し方に思いを致しすにつけ、皆様のお陰と心から感謝申し上げます。本文中にも記しましたが「身をけずり人に尽くさんすりこぎのその味知れる人ぞ尊し」。善光寺一丸となつて一層の努力を続けてまいります。今後とも叱咤激励、変わらぬ温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

▼このたび黒田住職は、曹洞宗管長（板橋興宗禅師）より、スリランカ・サラナンダ財団からの国際荣誉賞受

成寿 第二十九巻

平成十一年五月二十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺